

館高知県遺産文化財センター発掘調査報告書 第13集

中村・宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ

西ノ谷遺跡

第1分冊

1993・3

高知県教育委員会
館高知県文化財団歴史文化財センター

中村・宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ

西 ノ 谷 遺 跡

1 9 9 3 ・ 3

高 知 県 教 育 委 員 会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

幡多と呼ばれる高知県西南部地域は、九州に近いということもあって同じ高知にありながら中・東部とは異なった地域文化を歴史的に形成してきたところでもあります。今回調査を行った西ノ谷遺跡においても、弥生時代・古墳時代にさかのぼってその特徴を顕著に実証することができました。歴史は現代の鏡であると言われますが、この両地域の異なった文化の発展と交流の結果が今日の高知県の文化・社会を形造っているものと思います。遺跡や遺物は、私たちの祖先が大地に刻み込んだかけがえのない歩みの足跡そのものであります。同時に、現在の私たちの文化的資質の向上をはかる上においても活用して行かなければならないものだと思います。今日、地域の見直し、地域の活性化ということが言われておりますが、それは地域の歴史を如何に私たちのものとして再生していくかということでもあらうかと思います。

本書が、埋蔵文化財の保護と斯学の向上のみならず地域文化・社会の発展のために生かされることを心から願っています。

最後に発掘調査にあたりまして全面的な協力を頂きました建設省中村工事事務所、また寒風の中を厭わず作業に従事して下さいった地元の作業員の皆さまに心より厚くお礼申し上げます。

平成5年3月

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

所 長 小 橋 一 民

例 言

1. 本書は、高規格中村宿毛道路建設に伴う西ノ谷遺跡の発掘調査報告書である。
2. 西ノ谷遺跡は、中村市江ノ村西ノ谷に所在する。
3. 試掘調査を平成3年9月2日から10月17日まで実施し、本調査を平成4年9月24日から12月28日まで実施した。試掘調査面積は157㎡、本調査面積は1,100㎡である。

4. 調査体制

庶 務 三 浦 康 寛

調 査 員

試掘調査 曾 我 貴 行（高知県埋蔵文化財センター）

本 調 査 出 原 恵 三（高知県教育委員会文化振興課）

5. 執筆分担

第I章、第IV章、第V章の1、2及び3の(1)を出原が、第II章、第III章、第V章の3の(2)・(3)・(4)を曾我が執筆した。

6. 本調査における現地の測量実測は、公共座標によった。
7. 発掘調査及び整理事業の過程において、木村剛朗氏、田崎博之先生（愛媛大学）のご指導を得、植物種鑑定・土器底部の網代状圧痕については渡辺誠先生（名古屋大学）、木材樹種鑑定については山口誠治先生（大阪文化財センター）、木製品の保存処理については西山要一先生をわずらわせた。また山口先生、渡辺先生には玉稿を賜わった。記して謝意を表す。
8. 調査にあたっては、建設省四国地方建設局中村工事事務所の協力を頂いた。また現場作業員並びに整理事業員の皆様の献身的な協力に対して厚く感謝の意を表したい。
9. 出土遺物、その他関係資料は高知県埋蔵文化財センターに保管している。

報 告 書 要 約

1. 遺 跡 名 西ノ谷遺跡
2. 所 在 地 高知県中村市江ノ村西ノ谷
3. 立 地 沖積低地 標高約 8 m
4. 種 類 弥生前期・後期及び古墳時代前期の集落址
5. 調査主体 高知県埋蔵文化財センター
6. 調査契機 高規格中村宿毛線建設
7. 調査期間 平成 4 年 9 月 24 日から 12 月 28 日
8. 調査面積 1,100m²
9. 出土遺物 弥生前・後期土器, 古式土師器, 石器, 木器 (鋤・他)
10. 内容要約 弥生前期末及び古式土師器の良好な一括資料を得ることができた。これらの資料は、これまで空白であった高知県西部の土器編年を確立する上に極めて重要な位置を占めると共に県中・東部との比較研究を進め各々の地域性を明らかにする上においても重要な位置を占める。また、これらの土器の特徴から縄文時代に密接な関係にあった大分県地域との交流が弥生・古墳時代においても同様に展開していたことが窺われる。
更に弥生前期土器組成に表れた、甕偏長の特徴は当地域の弥生文化発展期における強固な地域性を示すものとして興味深い現象である。

本文目次

序

例言

報告書要約

本文目次

挿図目次

表目次

PL目次

第Ⅰ章 西ノ谷遺跡周辺の地理・歴史的環境	1
第Ⅱ章 調査に至る経過	5
第Ⅲ章 試掘調査	6
1. 調査の方法	6
2. 調査成果	6
第Ⅳ章 本調査	21
1. 調査の方法	21
2. 1区の調査	23
(1) 基本層序	23
(2) 調査成果	27
① 弥生時代前期の遺構と遺物	27
② 古墳時代前期の遺構と遺物	41
3. 2区の調査	49
(1) 基本層序	49
(2) 検出遺構	55
(3) 遺物の出土状況及び出土遺物	56
第Ⅴ章 考察	64
1. 弥生時代前期後葉の土器	64
(1) 分類	64
① 壺	64
② 甕	65
③ 鉢	66
(2) 考察	66
① 器種組成	67
② 壺	67
③ 甕	67
④ 鉢	70
2. 西ノ谷遺跡出土弥生前期後葉土器の位置付け	71
(1) 人田遺跡出土の土器	74
(2) 西ノ谷遺跡出土の前期後葉甕形土器の位置付け	76
(3) 下城式土器との関係について	77
3. 西ノ谷遺跡出土の古式土師器について	80
(1) 分類	80
① 壺	80
② 甕	80
③ 鉢	80
(2) 1区出土の土器について	81
(3) 2区出土の土器について	82
(4) 西ノ谷遺跡出土古式土師器の編年の位置付けの試み	83
付章	
1. 西ノ谷遺跡出土木製品の樹種について	山口誠治 87
2. 底部圧痕と植物遺体	渡辺誠 91

挿 図 目 次

- Fig. 1 : 西ノ谷遺跡の位置及び周辺の遺跡
 Fig. 2 : 試掘坑配置図
 Fig. 3 : TR 3 出土遺物実測図
 Fig. 4 : TR 3 土層断面図 (柱状模式図)
 Fig. 5 : TR 3 第 VII 層遺物分布図
 Fig. 6 : TR 3 出土遺物実測図 (弥生土器)
 Fig. 7 : TR 3・6 出土遺物実測図 (弥生土器)
 Fig. 8 : TR 6 土層断面図 (柱状模式図)
 Fig. 9 : 本調査区位置図 1
 Fig. 10 : 本調査区位置図 2
 Fig. 11 : 1 区検出遺構・トレンチ・セクション位置図
 Fig. 12 : 1 区基本層序
 Fig. 13 : 弥生時代前期の検出遺構及び遺物出土状況
 Fig. 14 : SK 1 及び SK 1 遺物出土状況実測図
 Fig. 15 : SK 1 出土遺物実測図
 Fig. 16 : SK 2 及び遺物出土状況実測図
 Fig. 17 : SK 2 出土遺物実測図
 Fig. 18 : SK 2 出土打製石器実測図
 Fig. 19 : SK 1 の周辺 (32~34) 及び SK 2 の周辺 (35~38) 出土遺物実測図
 Fig. 20 : 集石 1 及び SD 1 平鋤出土状況実測図
 Fig. 21 : 集石 1 出土遺物実測図
 Fig. 22 : 集石 1 出土遺物実測図
 Fig. 23 : 集石 2 及び出土遺物実測図
 Fig. 24 : 1 群 (50~55・64) 及び 2 群 (56~63) 出土遺物実測図
 Fig. 25 : 2 群 (65~73) 及び 3 群 (74~78) 出土遺物実測図
 Fig. 26 : D 層出土遺物実測図
 Fig. 27 : D 層出土遺物実測図
 Fig. 28 : SD 1 出土の平鋤実測図
 Fig. 29 : SK 3 実測図
 Fig. 30 : 第 VII 層 (古墳時代前期) 遺物出土状況
 Fig. 31 : VII 層出土遺物実測図
 Fig. 32 : VII 層出土遺物実測図
 Fig. 33 : 砂礫層出土遺物実測図
 Fig. 34 : 砂礫層出土の木器実測図
 Fig. 35 : 2 区検出遺構
 Fig. 36 : 2 区西壁基本層序
 Fig. 37 : 2 区溝状遺構エレベーション
 Fig. 38 : 2 区 XVI 層遺物出土状況実測図
 Fig. 39 : 2 区 XVI 層出土遺物実測図
 Fig. 40 : 2 区 XVI 層出土遺物実測図
 Fig. 41 : 2 区 XXVII 層及び XXIX 層上面出土遺物実測図
 Fig. 42 : 2 区 XXVII・XXIX 層上面出土 (184・185) の木製品
 Fig. 43 : 甕の型態分類
 Fig. 44 : 入田遺跡出土壺実測図
 Fig. 45 : 入田遺跡出土深鉢実測図
 Fig. 46 : 入田遺跡出土深鉢実測図
 Fig. 47 : 底部圧痕モデリング陽像
 Fig. 48 : 植物遺体

表 目 次

表 1	遺跡名一覧表
表 2	遺物観察表 1 (1～11)
表 3	遺物観察表 2 (12～21)
表 4	甕分類別比率
表 5	1 区 VII 層及び 2 区 XVI 層出土土器組成表
表 6	遺物観察表 3 (22～32)
表 7	遺物観察表 4 (33～43)
表 8	遺物観察表 5 (44～56)
表 9	遺物観察表 6 (57～68)
表10	遺物観察表 7 (69～82)
表11	遺物観察表 8 (83～93)
表12	遺物観察表 9 (94～107)
表13	遺物観察表10 (108～123)
表14	遺物観察表11 (124～137)
表15	遺物観察表12 (138～150)
表16	遺物観察表13 (152～162)
表17	遺物観察表14 (163～176)
表18	遺物観察表15 (177～183)

P L 目 次

- PL 1 : T R 3 調査前近景 (東より), T R 3 第Ⅴ層検出状況 (西より)
PL 2 : T R 3 第Ⅵ層遺物出土状況 (東より), 同上 (北より)
PL 3 : T R 3 第Ⅵ層遺物出土状況 (東より), 同上 (東より)
PL 4 : T R 6 作業風景 (北西より), T R 6 西壁土層断面 (東より)
PL 5 : T R 3 出土遺物
PL 6 : T R 3 第Ⅵ層遺物出土状況, T R 3・6 出土遺物
PL 7 : 樹種細胞顕微鏡写真
PL 8 : 樹種細胞顕微鏡写真
PL 9 : 西ノ谷遺跡全景 (北東から), 同上 (北から)
PL10 : 1 区東壁, 1 区南壁
PL11 : 1 区南壁, 1 区 T R 3 北壁セクション (S D 1 付近)
PL12 : 1 区弥生前期 1～3 群の遺物出土状況 (北から), 弥生前期集石 2 検出状況
PL13 : 1 区弥生前期土器集中出土状況, 同上 (52)
PL14 : S K 1 検出状況, 同上
PL15 : S K 1 遺物出土状況, 同上
PL16 : S K 1・2 遺物出土状況 (北西より), S K 1 遺物出土状況
PL17 : S K 2 遺物出土状況, S K 1 遺物出土状況 (23・24)
PL18 : S K 2 検出状況, S K 2 セクション及び遺物出土状況
PL19 : S K 1 完掘状況, S K 2 完掘状況
PL20 : 1 区古式土師器出土状況 (Ⅵ層), 同上
PL21 : S K 3 半截状況, S K 3 半截断面
PL22 : S K 3 ドングリ出土状況, S K 3 完掘状況
PL23 : 1 区古式土師器出土状況 (Ⅵ層), 同上
PL24 : 古墳時代前期遺物出土状況, 同上
PL25 : 1 区完掘状況 (北より), 1 区調査後の断ち割り
PL26 : 2 区西壁セクション, 2 区完掘状況 (北東側半分)
PL27 : 2 区完掘状況 (北東側半分), 同上 (南西側半分)
PL28 : 2 区木製品出土状況, 同上
PL29 : 2 区古墳時代前期土器出土状況, 同上
PL30 : 2 区古墳時代前期土器出土状況, 同上
PL31 : 2 区古墳時代前期土器出土状況, 同上
PL32 : 2 区古墳時代前期土器出土状況, 2 区エブリ出土状況
PL33 : 縄文土器 (167) 及び弥生前期土器 (37・46・50・63・72)
PL34 : 弥生前期石器, 同上裏面
PL35 : 弥生前期土器, 同上
PL36 : 弥生前期土器, 古墳時代前期土器
PL37 : 古墳時代前期土器
PL38 : 古墳時代前期土器

第Ⅰ章 西ノ谷遺跡周辺の地理・歴史的環境

西ノ谷遺跡は高知県西南部の中村市江ノ村にある。四万十川に西方から流れ込む支流中筋川右岸に開けた低湿地に位置し、標高8m前後を測る。中村と宿毛を結ぶ中筋川流域の東西に帯状（幅500～1,000m、長さ14km）に伸びる平野部は、特に中筋平野と呼ばれ地質学上第4紀地史を解明する上で重要な地域として位置付けられている。上流の有岡、竹石・車岡付近には中位段丘堆積層（中筋層・戸内層）の分布が認められる。この時期（洪積世第2間氷期）、中筋川流域には海水が浸入し、南岸は四国本土から分離していたと考えられている⁽¹⁾。中筋平野を形成する沖積層は、国見で32m、有岡で20m以上と予想されており、これらの堆積は縄文海進以降によるものである。またこの流域は有名な水害常習地帯であり、洪水となれば四万十川本流からの逆流現象がおり、付近一帯が泥水に浸る状況が続いた。建設省の『渡川四十年史』によれば、「野中兼山の中筋川改修以来明治中期までの230年間における水位10m以上の大洪水は23回、反収6割以下の中洪水72回、浸水50時間以上の小洪水・24時間冠水以上を含めると1,000回近い浸水記録」がある⁽²⁾。有史以来付近の住民が如何に河川の猛威にさらされてきたのか看取することができる。周辺遺跡の展開は、このような自然環境に強く規定されていたことが考えられる。従って遺跡の立地や性格など各時代の自然地理的環境を念頭においた解釈を求めなければ当地域の人々の歴史を正しく認識することはできないであろう。西ノ谷遺跡と現

No.	遺 跡 名	時 代	No.	遺 跡 名	時 代
1	西ノ谷遺跡	弥生(前)～古墳(前)	12	後川橋西遺跡	弥生
2	江ノ村遺跡	弥生(前・後)	13	佐岡遺跡	弥生
3	国見遺跡	縄文(早)～古墳	14	古津賀遺跡	古墳(中・後)
4	船戸遺跡	縄文(後)～古墳	15	古津賀古墳	古墳(後)
5	具同中山遺跡群	弥生～古墳	16	山路遺跡	弥生(後)(中広銅矛)
6	具重遺跡	古墳	17	宮ノ沢(初崎)遺跡	縄文(後)
7	西和田遺跡	弥生(後)	18	吹山越遺跡	弥生(中)
8	源池遺跡	弥生	19	平野遺跡	縄文(前)
9	入田遺跡	縄文(晩)～弥生	20	磯ノ上遺跡	縄文(前)
10	中村貝塚	縄文(晩)	21	双海遺跡	旧石器・縄文
11	古城山遺跡	弥生(中・後)	22	モモノダバ遺跡	縄文(早・前)

表1 遺跡名一覧表

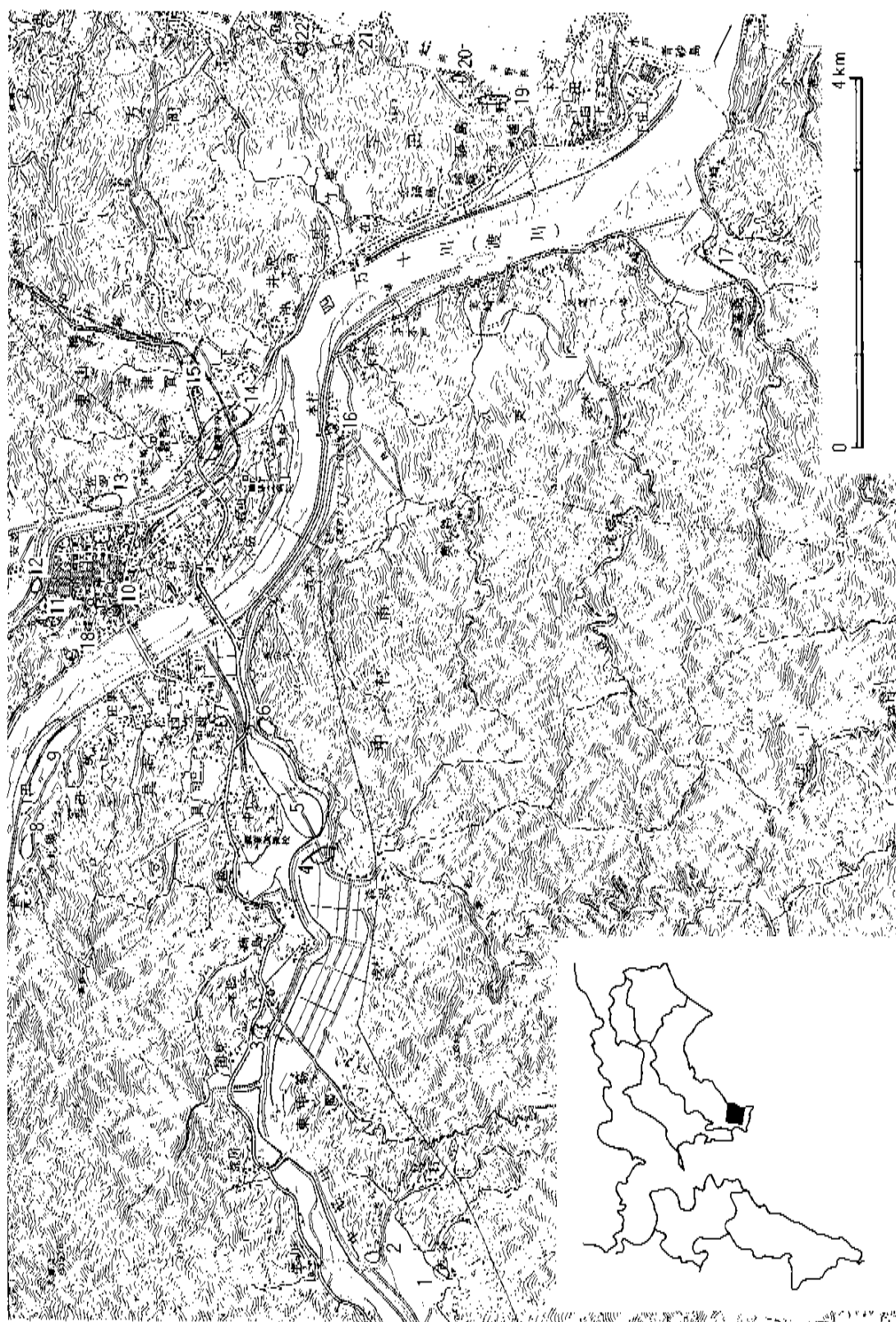


Fig. 1 西ノ谷遺跡の位置及び周辺の遺跡
(縄文時代～古墳時代)

中筋川の最短距離は約500mであるが、これは上述した近世初期の改修結果によるものであり、本来はもっと南にカーブし、すなわち遺跡に近接したところを流れていた。

この付近で最も古く位置付けられる遺跡は、ホルンフェルス製のナイフ形石器を出した双海遺跡(21)を挙げることができる。双海遺跡は土佐湾に臨む海岸段丘に立地し、宿毛市所在の宇須々木遺跡などと共に県下で数少ない旧石器時代遺跡の1つである。縄文時代草創期の遺跡は未確認であるが、早・前期に至ると海岸段丘に点々と出現するようになる。図示した平野(19)・磯ノ上(20)・モモノダバ(22)・双海遺跡(21)は、宿毛湾から足摺半島にかけて発達しているリアス式海岸に展開する一連の諸遺跡に列なる一群の中で理解することができる⁽³⁾。これらの遺跡は土器の散布が比較的少ないのに対して姫島産黒曜石製の石鏃が多く出土することを特徴とする。このことはこれら臨海性の遺跡の多くが定住性の集落というよりもキャンプ地的な性格を有し小集落であったことを物語っている。また臨海性の遺跡が早期～前期へと継続するものが多いのに対し、唯一内陸性の国見遺跡(3)は前期が欠如している。当遺跡は、中後期への発展を遂げる長期定住型の遺跡であり、前期が欠如しているのは縄文海進との関係が考えられ興味深い⁽⁴⁾。続く中期は国見遺跡から船元式、四万十川流域の三里遺跡・間崎遺跡からは宿毛C式土器、後川流域の大用遺跡からは福田K III式土器が出土している⁽⁵⁾。本格調査がなされた遺跡は少ないが、中期後半からは遺跡が河川流域の平野に進出してくる傾向があり生業との関係で今後追求すべき課題である。後期に至るとこの傾向は更に促進され、沖積の進行した中筋川流域の国見遺跡、船元遺跡(4)、四万十川流域の初崎遺跡(17)、三里遺跡など数多くの遺跡が展開し、その多くはこれまでに例を見なかった石鏃や打製石斧を有しており、三里遺跡では72点もの石鏃が確認されている。土器型式も後期初頭の中津式併行期から末の福田K III式までが見られ地理的な位置関係を反映して瀬戸内と豊後水道を隔てた九州からの影響が認められ、中葉からは近畿の影響も加わる⁽⁶⁾。

晩期の遺跡は、人田遺跡(9)・中村貝塚(10)・中筋川上流域のツグロ橋下遺跡を挙げることができる。これらはすべて刻目突帯文を有する晩期後半に属するが人田遺跡(標高13m)は、1952年、日本考古学協会弥生文化特別委員会によって発掘調査がなされ、四国では初めて突帯文土器(人田B式土器)と共に遠賀川式土器(人田I式)が出土し、以後南四国の弥生文化成立を明らかにするうえで指標の一つとなった遺跡である⁽⁷⁾。中村貝塚(標高7.5m)も1965年に小発掘がなされ、下層と上層とに分離して無刻目突帯文土器(中村I式)と刻目突帯文土器(中村II式)が出土し、県西部における晩期後半の標式遺跡となっている⁽⁸⁾。

弥生時代に至っても継起的な展開を見せるが、人田遺跡以降本格的な調査例に恵まれていないのが現状である。前期の遺跡は、西ノ谷遺跡と近接する江ノ村遺跡(2)や国見遺跡が存在するが共に前期末からであり、人田I式との間をつなぐ時期が不明である。このことは人田遺跡においても同様であり、前期中葉の段階がどのような内容をもっていたのか大きな課題となっている。前期末は全県下的に遺跡の飛躍的な増加が認められるが、当地においてもその傾向に

あり小河川の河口に開けた谷平野には多くの遺跡がまだまだ埋没しているものと考えられる。中・後期に至ると沖積地と共に古城山遺跡(11)や吹山越遺跡(18)など高地性集落の出現が認められる。同様の遺跡は県東部にも認められるが、東部のそれが山丘の斜面に多く立地するのに比して西部では山頂にある例が多い。また青銅器は具同中山遺跡群(5)の東神ノ木地区から中広銅矛Ⅰ式が、山路遺跡(16)から同Ⅱ式が各1点出土している⁽⁹⁾。

古墳時代に至ると中筋川上流の宿毛市平田に前期円墳の高岡山1・2号墳や中期前方後円墳(推定)の曾我山古墳が築造されるが、中村市域においては後期円墳の古津賀古墳(15)が知られているに過ぎない。当地域における古墳の分布は極めて稀薄であると言わざるを得ない。しかしながら中筋川・後川流域には、具同中山遺跡群・船戸遺跡(4)・具重遺跡(6)・古津賀遺跡(14)などの一大祀遺跡群が存在している。これらの諸遺跡は数次にわたる調査が実施され、石製・土製模造品などの祭祀遺物と共に祭祀に供した多量の土師器・須恵器等が出土している⁽¹⁰⁾。しかもこれらの遺跡は、遺存状況が良好であり祭祀の単位やセット関係、更に祭祀形態の変遷をも把握することのできる遺跡として注目されている⁽¹¹⁾。

註

- (1) 甲藤次郎『高知県の地質』高知市民図書館
- (2) 建設省四国地方建設局中村工事事務所『渡川改修40年史』1980年
- (3) 木村剛朗「四万十川流域の歴史的環境」『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研 1987年
- (4) 橋田庫欣『中村市史』中村市史編纂室 1969年
- (5) 木村剛朗「前期～中期の生活と文化」『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研 1987年
- (6) 木村剛朗「土佐における後期縄文文化について」『高知の研究』1 地質・考古 清文堂 1983年
- (7) 岡本健児「入田遺跡」『日本農耕文化の生成』東京堂
- (8) 岡本健児『高知県史』考古編 高知県 1968年
- (9) 岡本健児「高知県発掘の銅矛について」『高知の研究』1 清文堂 1983年
- (10) 高知県教育委員会『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』古津賀遺跡・具同中山遺跡群 1988年
- (11) 出原恵三「祭祀発展の諸段階―古墳時代における水辺の祭祀」『考古学研究』第36巻 4号 考古学研究会 1990年

第Ⅱ章 調査に至る経過

国道56号線は、高知市から海岸線沿いに西進し、松山市へと通じており、高知県においては県中央部と西南部とを結ぶ重要な幹線道路である。この沿線の各所において道路改良計画が準備され、また進行中であるが、中村市と宿毛市を結ぶ区間においても、建設省四国地方建設局中村工事事務所によって、高規格中村宿毛道路の建設計画が進められている。

中村市は、高知県の中でも特に遺跡の分布密度の高い地域の一つとして挙げることができるが、中村宿毛道路の計画路線に該当した中筋川流域の平野及び丘陵地帯は、具同中山遺跡群をはじめとする多くの遺跡が分布する地域として特筆することができる。

建設省四国地方建設局中村工事事務所と高知県教育委員会は、高規格道路建設計画と埋蔵文化財保護との調整について、路線決定以前から綿密な協議を積み重ねてきた経過があり、事業の進捗に伴って立会調査及び確認調査等を実施してきた。

今次調査の対象となった江ノ村～西ノ谷地区には、江ノ古城跡・ハナノシロ城跡をはじめとして、西ノ谷城跡・久木ノ城跡等の遺跡が所在している。そして、高規格中村宿毛道路の計画路線にはこれらの4城跡すべてが含まれており、工事の実施によってこれらの埋蔵文化財が何らかの影響を受けることは必定である。そこで、平成3年度にこれら城跡の中で用地交渉の進んでいる江ノ古・ハナノシロの両城跡と江ノ村～西ノ谷区間の沖積地の工事予定範囲について埋蔵文化財の確認調査を実施した。調査によって、江ノ古・ハナノシロ両城跡に城跡の遺構・遺物が遺存していることを確認し、また西ノ谷の沖積地において弥生～古墳時代を中心とする遺跡（西ノ谷遺跡）を検出することができた。

この確認調査の結果に基づき、建設省四国地方建設局中村工事事務所及び高知県教育委員会が、これら3箇所の遺跡の発掘調査実施について合意し、今次調査の運びとなった。調査は高知県教育委員会が受託し、財団法人高知県文化財埋蔵文化財センターがこれを実施した。発掘調査期間は平成4年5月21日から平成4年12月28日までであり、発掘調査面積は3箇所を総計して約6,500㎡である。

第Ⅲ章 試掘調査

高規格中村宿毛道路建設計画に伴い、計画路線上に位置する高知県中村市江ノ村～西ノ谷地区について、平成3年度に事前の確認調査を実施した。西ノ谷遺跡はその際に発見された遺跡である。調査は平成3年9月2日から10月17日までの間実施した。

1. 調査の方法

中村市江ノ村西ノ谷西ノ谷川左岸から西ノ谷城跡東麓までの間に9箇所の試掘坑（TR1～TR9）を任意に設定し、遺物包含層及び遺構等の確認を行った。各試掘坑の調査に際しては必要に応じて試掘坑の拡張を行い、調査面積は157㎡であった。試掘坑の掘り下げには重機を使用し、遺構及び遺物包含層の検出、及び掘り下げは人力で行った。遺構の検出された試掘坑については遺構平面図及び土層断面図（各縮尺1／20）の記録を行い、これ以外の試掘坑についても土層堆積状況の記録を行った。

2. 調査成果

今次の調査区間は南から枝状に延びる丘陵の谷間に相当し、湧水の非常に多い谷地形をなしている。各試掘坑とも、その調査に当たってはこの湧水に悩まされた。土層の堆積状況では、シルト状の灰色粘土層と緑灰色小角礫層が交互に堆積しているのが特徴的であり、南方の山塊からの土石流等による比較的短期間のうちに形成された堆積であると考えられた。

調査の結果、TR1・2・4・5・7～9に関しては遺物包含層・遺構ともに検出されなかったが、TR3・6から弥生時代及び古墳時代の遺物包含層を確認した。以下、試掘坑毎にその内容を記述する。

（1）TR3（Fig. 2～5）

当初、4×4 m大の試掘坑を設定していたが、遺物の出土に伴って、北及び西に2 mの拡張を行い、最終的には6×6 m大の試掘坑となった。

層序（Fig. 4）

現地表面下約3.6 mまでの確認を行った。土層の堆積状況は、第Ⅰ層：表土、第Ⅱ層：灰色砂礫土、第Ⅲ層：暗灰色粘土、第Ⅳ層：青灰色砂礫土、第Ⅴ層：暗褐色灰色粘土、第Ⅵ層：青灰色砂礫土、第Ⅶ層：暗灰色粘土、第Ⅷ層：灰色粘砂土、第Ⅸ層：明青灰色砂礫、第Ⅹ層：暗褐色灰色粘砂土、第Ⅺ層：灰褐色粘砂土、第Ⅻ層：明青灰色砂礫である。砂礫土と

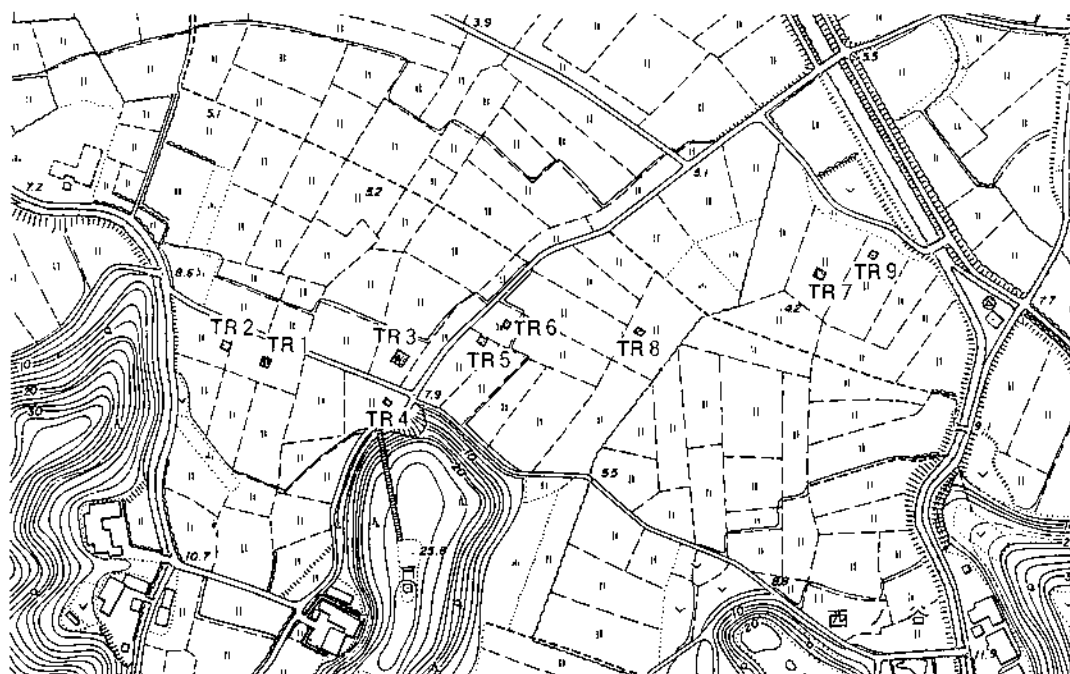


Fig. 2 試掘坑配置図

粘土及び粘砂土との互層をなす点が特徴的であり、度重なる土石流によって谷が埋められてきた過程が想像される。しかしまた、この礫層の堆積によって一時期の遺物包含層がほぼ純粋な状態で保護されてきたことも付言せねばならない。遺物包含層は、第Ⅴ層・第Ⅶ層の2枚を確認することができた。表土下約2mの第Ⅶ層から弥生土器326点、スクレーパ1点が出土し、また表土下約1mの第Ⅴ層から古墳時代前期の土師器7点が出土した。明確な遺構は検出されないが、2時期の遺物包含層が存在することが確認され、本格調査が必要と判断された。

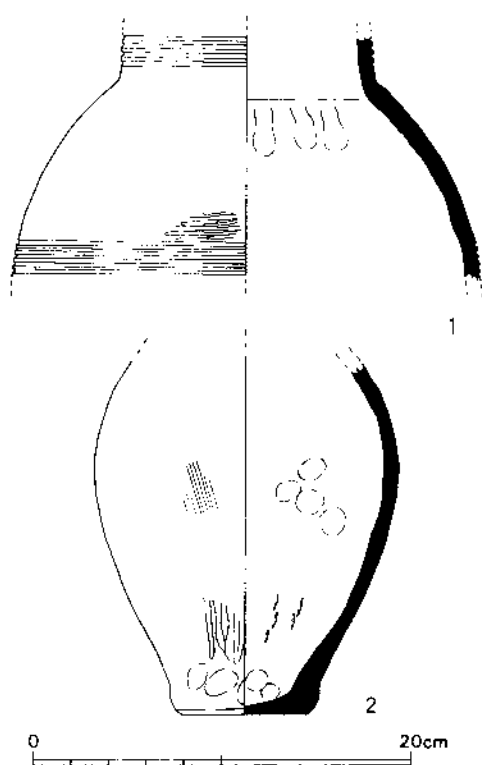


Fig. 3 TR3 出土遺物実測図

TR3

- I: 表土
- II: 灰色砂礫土
- III: 暗灰色粘土
- IV: 青灰色砂礫土
- V: 暗褐色粘土
- VI: 青灰色砂礫土
- VII: 暗灰色粘土
- VIII: 灰色粘砂土
- IX: 明青灰色砂礫
- X: 暗褐色粘砂土
- XI: 灰褐色粘砂土
- XII: 明青灰色砂礫

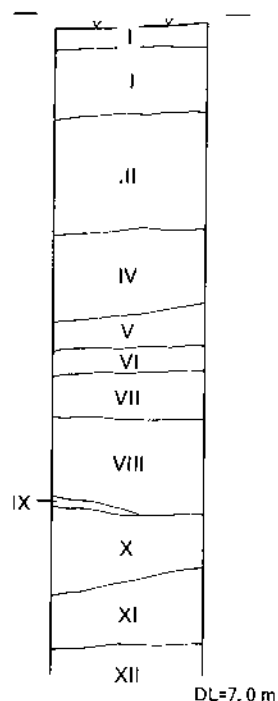


Fig. 4 TR3 土層断面図（柱状模式図）

出土遺物（Fig. 3・6・7）

第V層出土の土師器2点、第VII層出土の弥生土器17点及び、スクレーパ1点を図示することができた。第VII層の弥生土器に関しては、第5図の分布図に示したように、出土範囲には一定の集中箇所がみられ、また図示できた土器でみる限り50cm以上離れて接合する個体は認められないことが指摘できる。以下、第VII層・第V層出土の遺物について概述する。

1～17・21が第VII層出土の遺物である。1・2は壺で、外面はミガキ調整である。3～6・8～12は甕である。甕には大きく分けて3つの形態のものが認められる。すなわち、口縁端部に刻み目をもつもの（3～6・11）、口縁部直下外面に突帯をもつもの（9・10）、刻み目も突帯も有しないもの（8・12）の3者である。6・11は刻み目もちながら口縁部直下外面に沈線を巡らす。3は甕よりも甕形の鉢と呼称すべきものであろう。7は鉢とみられ、外面はミガキ調整である。14～17は底部片である。21はサヌカイト製のスクレーパで、約半分が欠損している。

18・19が第V層出土の遺物である。18は土師器の底部、19は高坏の脚柱部である。

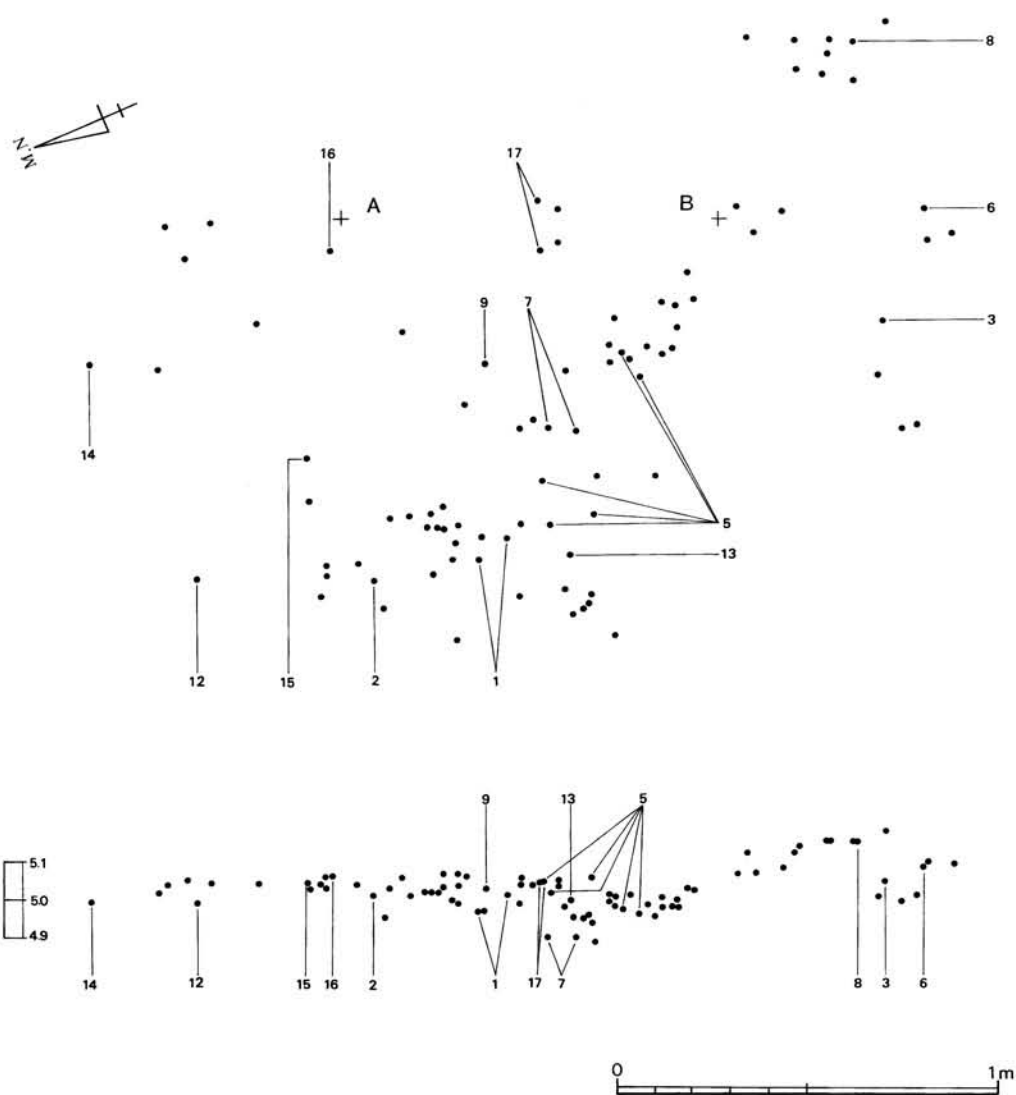


Fig. 5 TR3 第VII層遺物分布図



作業風景（南より）

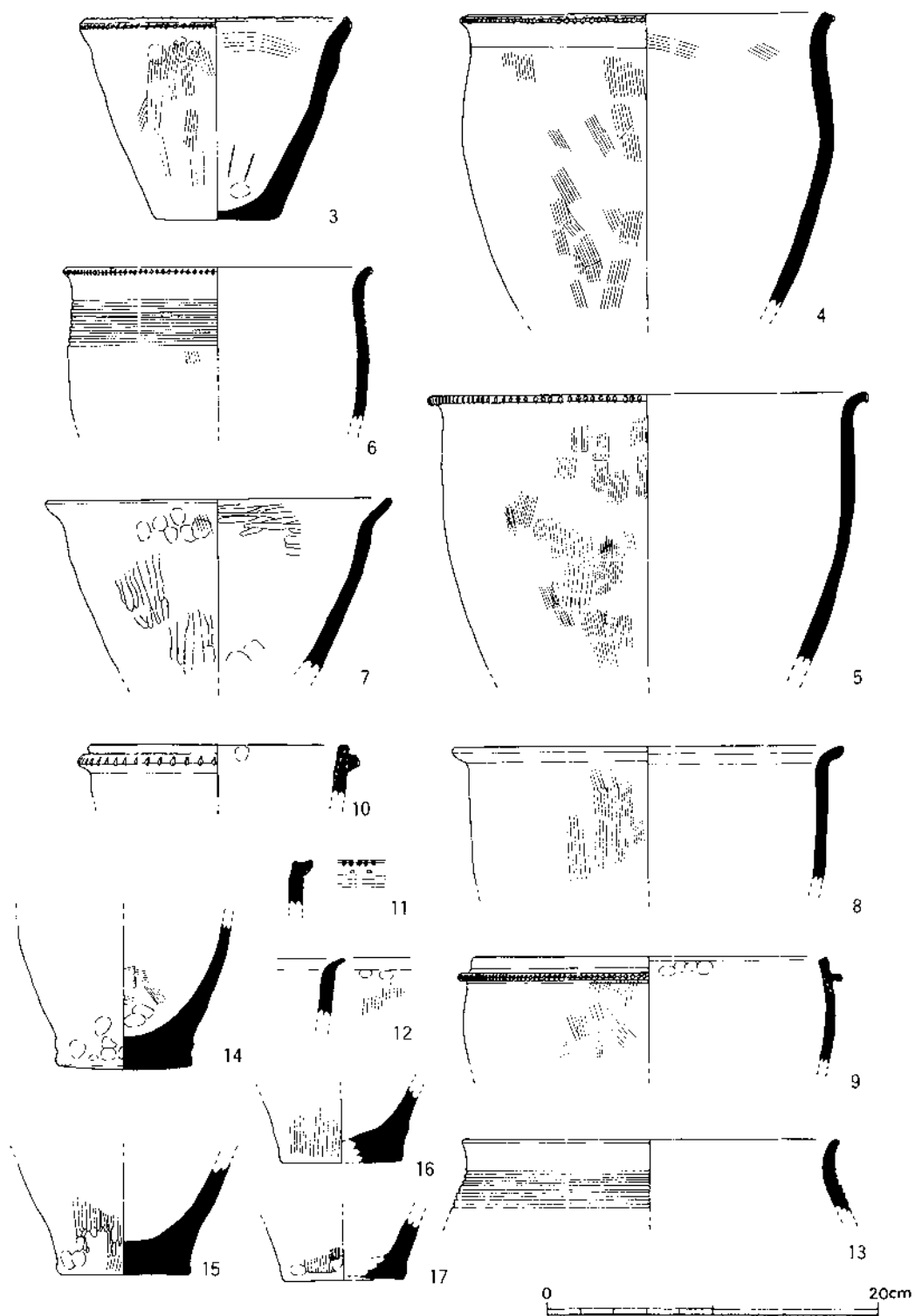


Fig. 6 TR3 出土遺物実測図 (弥生土器)

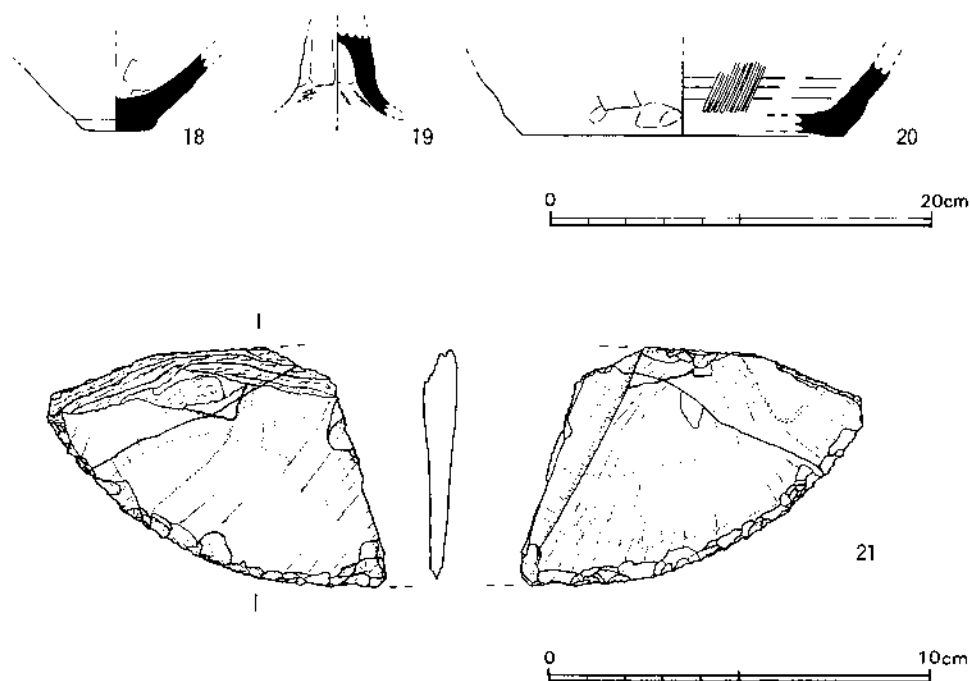


Fig. 7 TR3・6 出土遺物実測図（弥生土器）

(2) TR6

3×4 mの試掘坑で、TR3の北東方約60mに位置する。

層序（Fig. 8）

現地表面下3.7mまでの確認を行った。土層堆積状況は、第I層：表土、第II層：明灰褐色粘質土、第III層：明灰褐色粘質砂礫、第IV層：暗灰色砂礫、第V層：暗灰褐色粘質土、第VI層：暗褐色粘砂礫土、第VII層：暗褐色粘質土、第VIII層：青灰色砂礫、第IX層：暗灰色粘土、第X層：青灰色砂礫、第XI層：暗灰色粘土、第XII層：青灰色砂礫である。TR3と同様に、砂礫土と粘土との互層をなす。表土下約2 mの第IX層、及びそれに続く第X層から弥生土器細片36点が出土しており、その下面の第XI層で杭跡を検出した。また、第III層から備前焼1点が、第IV層から土師質土器片1点がそれぞれ出土した。第XI層の杭跡に関

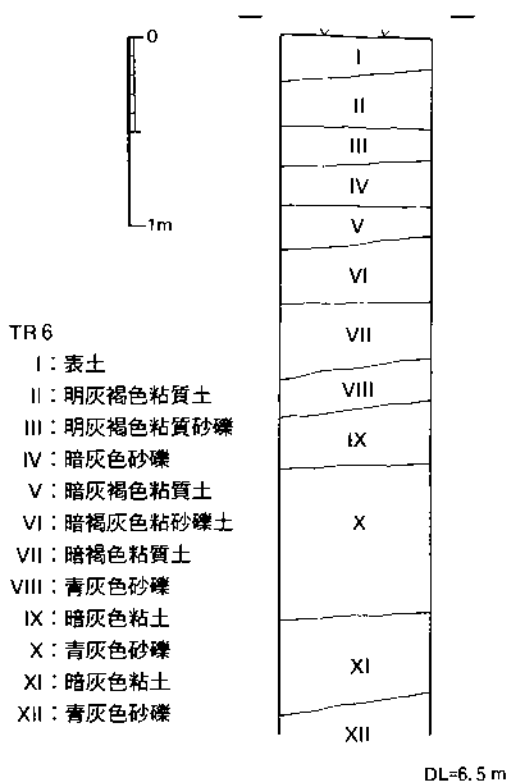


Fig. 8 TR6 土層断面図（柱状模式図）

しては詳細な確認ができなかったため明らかにはしえないが、少なくとも弥生時代の遺物包含層が存在することは明確であり、本格調査が必要と判断された。

出土遺物（Fig. 7）

図示できたのは第Ⅲ層出土の備前焼片 1 点のみである。20は播鉢の底部片で、内面には縦～斜方向の条線を施す。

挿図番号	通稱番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
Fig 3-1	TR 3 第Ⅲ層	弥生土器 壺	— (12.6) (11.5) —	上胴部～頸部のみ残存。体部は内湾して上外方に立ち上がり、頸部はほぼ直立してのびる。頸部外面に4本以上、胴部外面に6本以上の沈線を巡らす。	外面はミガキ調整。頸部には縦位のハケ調整の後、ミガキを施す。内面は器表面の剥落が著しく、調整不明。	胴部外面に煤の付着がみられる。
〃 - 2	〃 〃	〃 〃	— (18.7) 16.2 6.6	上胴部以上は欠損。底部はやや凸状をなす平底で、体部は内湾して立ち上がる。	外面は縦方向のミガキ調整。底部付近には指頭押圧を施す。内面はナデ・指頭押圧を施し、底部付近には板状「具小」部による圧痕がみられる。	外面には部分的に煤が付着。
Fig 6-3	〃 〃	〃 甕（鉢）	15.8 12.3 — 7.4	ほぼ定形。底部は平底で、体部はやや内湾して上外方に立ち上がり、口縁部は緩く屈曲して外傾し、端部は面をなす。	外面は縦位のハケ調整。口縁部直下には横位のハケ・指頭押圧を施す。内面は指頭押圧・ナデ調整。口縁部直下には横位のハケ調整。底部付近には板状「具小」部による圧痕がみられる。	
〃 - 4	〃 〃	〃 甕	21.4 (18.0) — —	下胴部～底部は欠損。体部は内湾して上外方に立ち上がり、口縁付近で緩く屈曲して上外方にのび、端部は浅い凹面をなす。口縁端部外面には右傾する刻みを施す。	外面は縦位～斜位のハケ調整の後、ナデ調整。内面はナデ調整。	
〃 - 5	〃 〃	〃 〃	26.6 (16.6) — —	下胴部～底部は欠損。体部は内湾して上外方に立ち上がり、口縁部直下で屈曲して外方にのび、端部は丸くおさめる。	外面は縦位のハケ及びナデ調整。内面は調整不明。	
〃 - 6	〃 〃	〃 〃	18.5 (9.4) 18.4 —	下胴部～底部は欠損。体部は内湾して上外方に立ち上がり、口縁部直下で緩く屈曲して外上方にのび、端部は面をなす。口縁部直下外面には沈線8本、口縁端部外面には刻みをそれぞれ施す。	外面は縦位のハケ・ナデ調整。内面はナデ調整。	外面には部分的に煤が付着。
〃 - 7	〃 〃	〃 鉢	20.8 (10.6) — —	下胴部～底部は欠損。体部はほぼ直線的に上外方に立ち上がり、口縁部は外傾して上外方にのび、端部は丸くおさめる。	外面はミガキ調整。口縁～頸部にはハケ・指頭押圧を施す。内面は指頭押圧・ナデ調整で、口縁～頸部には横方向のミガキ調整を施す。	〃
〃 - 8	〃 〃	〃 甕	23.6 (8.4) 21.9 —	口縁部のみ残存。体部はほぼ直立して立ち上がり、口縁部は緩く屈曲して外傾し、端部は丸くおさめる。	外面は縦位のハケ調整。内面はナデ調整。口縁部は内外面ともナデ調整。	外面には煤の付着顕著。
〃 - 9	〃 〃	〃 〃	21.2 (6.5) — —	口縁部のみ残存。体部は内湾して立ち上がり、端部は面をなす。口縁部直下外面には断面長方形の突帯を有し、端面に右傾する刻みを施す。	外面は縦～斜位のハケ調整。突帯の上下は横方向のナデ調整。内面は指頭押圧・ナデ調整。	外面には煤の付着がみられる。
〃 - 10	〃 〃	〃 〃	15.0 (3.3) — —	口縁部のみ残存。体部は直線的に上外方に立ち上がり、端部は面をなす。口縁部直下外面に断面不整四角形の突帯を有し、端面に刻みを施す。	外面はナデ調整。内面は指頭押圧・ナデ調整。	
〃 - 11	〃 〃	〃 〃	— (2.9) — —	口縁部のみ残存。体部は直立して立ち上がり、端部は凹面をなし、外側に若干拡張する。口縁端部外面に縦位の刻みを施し、口縁直下外面には2本の沈線を巡らす。	内外面とも指頭押圧・ナデ調整。	外面には煤の付着がみられる。

表2 遺物観察表1

種別番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
Fig 6-12	TR 3 第Ⅲ層	弥生土器 甕	— (3.6) — —	口縁部のみ残存。体部は内湾ぎみに立ち上がり、緩く屈曲して口縁部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。	外面は縦位のハケ調整。 内面はナデ調整。	外面には煤の付着がみられる。
〃 -13	〃 〃	〃 〃	22.5 (4.5) — —	口縁部のみ残存。体部は直線的に内上方に立ち上がり、口縁部は外湾して外上方にのびる。 口縁部直下外面には6本以上の沈線を通らす。	内外面ともナデ調整。口縁端部は器表面の剥落が顕著で、本来の端部であるか否か不明。	
〃 -14	〃 〃	〃 底部	— (8.8) — 8.4	胴部～底部のみ残存。底部はやや凸状を呈する平底で、体部は内湾して外上方に立ち上がる。	体部外面は剥落が著しく調整不明。底部外面は指頭押圧・ナデ調整。 内面は横～斜位のハケ・ナデ調整。	
〃 -15	〃 〃	〃 〃	— (6.8) — 8.0	底部片。底部は平底で、体部は内湾して外上方に立ち上がる。	外面は縦位のハケ調整の後、縦位のミガキ調整で、底部には指頭押圧を加える。 内面は剥落著しく、調整不明。	
〃 -16	〃 〃	〃 〃	— (4.6) — 7.4	底部片。底部は平底で、体部は内湾ぎみに外上方に立ち上がる。	外面は縦位のハケ調整。 内面・底面はナデ調整。	
〃 -17	〃 〃	〃 〃	— (3.8) — 7.0	底部片。底部は上げ底状に浅く凹み、体部は内湾ぎみに外上方にのびる。	外面は縦位のハケ及びナデ調整で、指頭圧痕がみられる。内面は剥落著しく調整不明。 底面はナデ調整。	
Fig 7-18	〃 第Ⅴ層	土師器 底部	— (4.1) — 2.8	底部片。底部は凸状をなす平底で、体部は内湾して外上方にのびる。	内外面・底面ともナデ調整。内面には板状工具の小口部による圧痕がみられる。	外面には煤の付着がみられる。
〃 -19	〃 〃	〃 高坏	— (4.4) — — —	脚柱部のみ残存。脚柱部はややエッジ状をなし、裾部は外湾しながらラッパ状に開く様子。 脚柱部は面取りにより多角錐状をなす。内面の裾部へ移行する部分は稜をなす。	外面は板状工具によるナデで面取りした後、ナデ調整。裾部は右傾するタタキ調整の後、ナデ調整。 内面はナデ調整。裾部は板状工具による押さえを右回りの渦巻き状に施した後、ナデ調整。	
〃 -20	TR 6 第Ⅲ層	縄前焼 埴鉢	— (4.0) — 17.0	底部片。底部は平底で、体部は直線的に外上方にのびる。 内面には縦～斜方向の条線（4条/cm）を施す。	ロクロ成形。内外面ともロクロによるナデ調整。	
〃 -21	TR 3 第Ⅲ層	スクレーパー	全長 6.0 全幅 7.9 全厚 0.8 重量 48g	右半部は欠損。扁平な半月形を呈するものとみられる。	横長の剥片を素材とし、背面側には一部自然面を残す。刃部は両刃である。	サヌカイト製

表 3 遺物観察表 2



SK 1 検出状況



同上 遺物出土状況



平鉄 (109) 出土状況



有孔板状木製品 (184) 出土状況



3



69



23



52



80



32



30



113



77



157



171

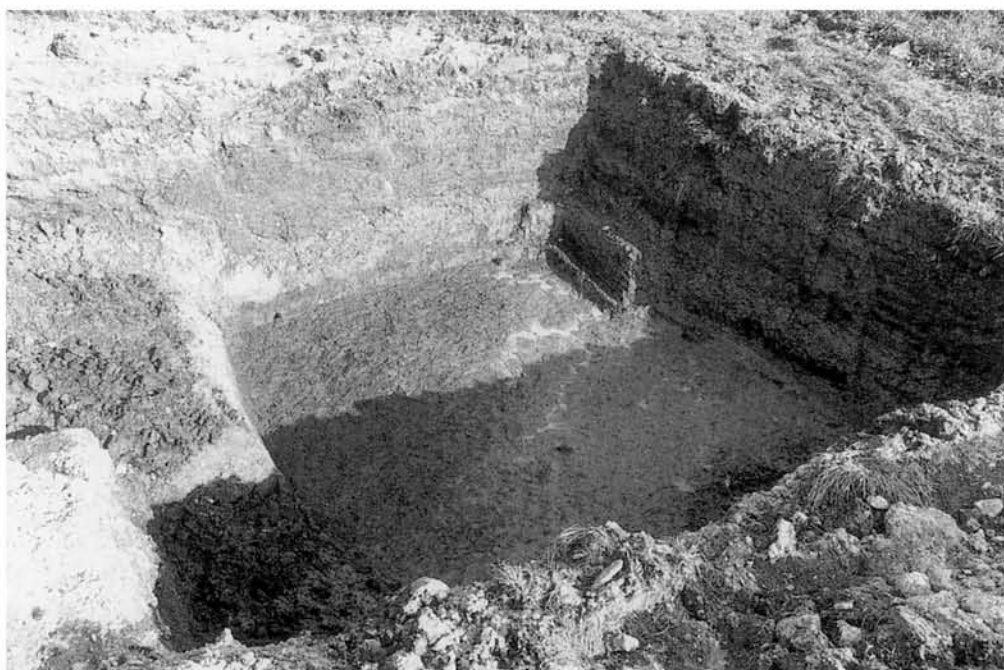


31

弥生前期土器 (30・77), 同石器 (31), 弥生後期土器 (171), 古式土師器 (113・157)



TR 3 調査前近景（東より）



TR 3 第V層 検出状況（西より）

PL 2



TR 3 第Ⅶ層 遺物出土状況（東より）



同 上（北より）



TR3 第Ⅶ層 遺物出土状況（東より）



同 上（東より）

PL 4



TR 6 作業風景（北西より）



TR 6 西壁土層断面（東より）

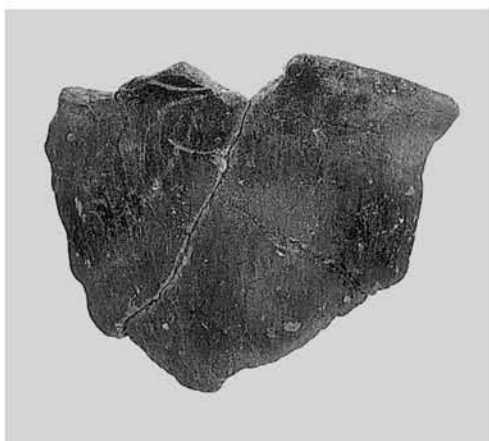
PL 5



1



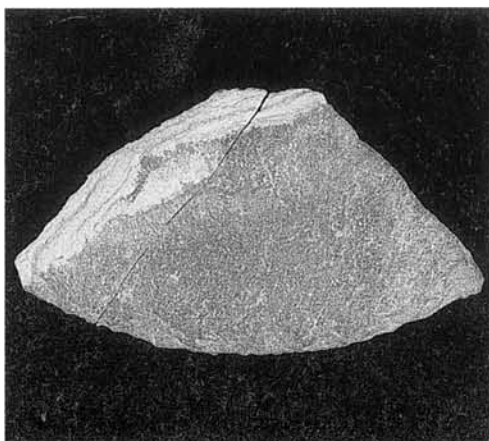
2



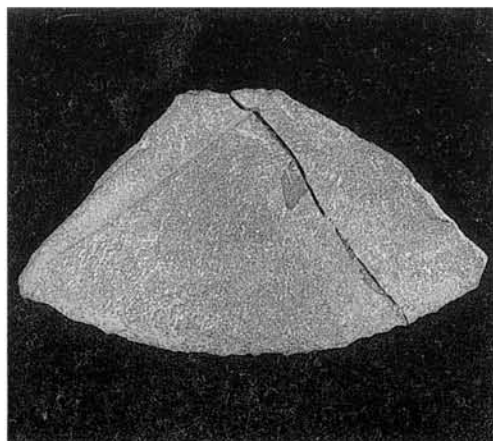
7



5



21 (表)



21 (裏)

TR 3 出土遺物

PL 6



TR 3 第Ⅶ層 遺物出土状況



14



15



18



20

TR 3・6 出土遺物

第Ⅳ章 本 調 査

1. 調査の方法

西ノ谷遺跡は、米栖神社が載る丘陵の前方に広がる低湿地に占地する。その範囲を明確に把握するには至っていないが、丘陵西側の谷部を含んで数千㎡の広がりをもっているものと考えられる。調査は遺跡を東西に2分するかたちで走る市道線を界に西側を1区、東側を2区として調査区を設定した。調査面積は1区が600㎡、2区が500㎡である。試掘調査により遺物包含



Fig. 9 本調査区位置図1

層及び生活面は、地表下2～3mにあることから発掘作業の保安上あるいは作業の速やかな推移をはかるため調査区に長さ9.5mの鋼矢板を打ち込み囲繞した。1区は全周を開い、2区は道路側と南北面を開ったが、東面は安全な勾配で掘り下げた。表土層以下は古墳時代の遺物包含層直上までは、重機を使って掘削し、古墳時代の遺物包含層以下弥生時代の遺物包含層・遺構検出面までは人力で慎重に掘り下げた。遺物の取り上げ及び平面実測は、公共座標第IV系による基準点を使用した。包含層出土の遺物については4mグリッド毎に取り上げたが、遺構出土及び原位置を保った状態で出土した遺物については原則として20分の1で平面実測を行い、必要に応じて40分の1あるいは100分の1の平板測量を併用した。

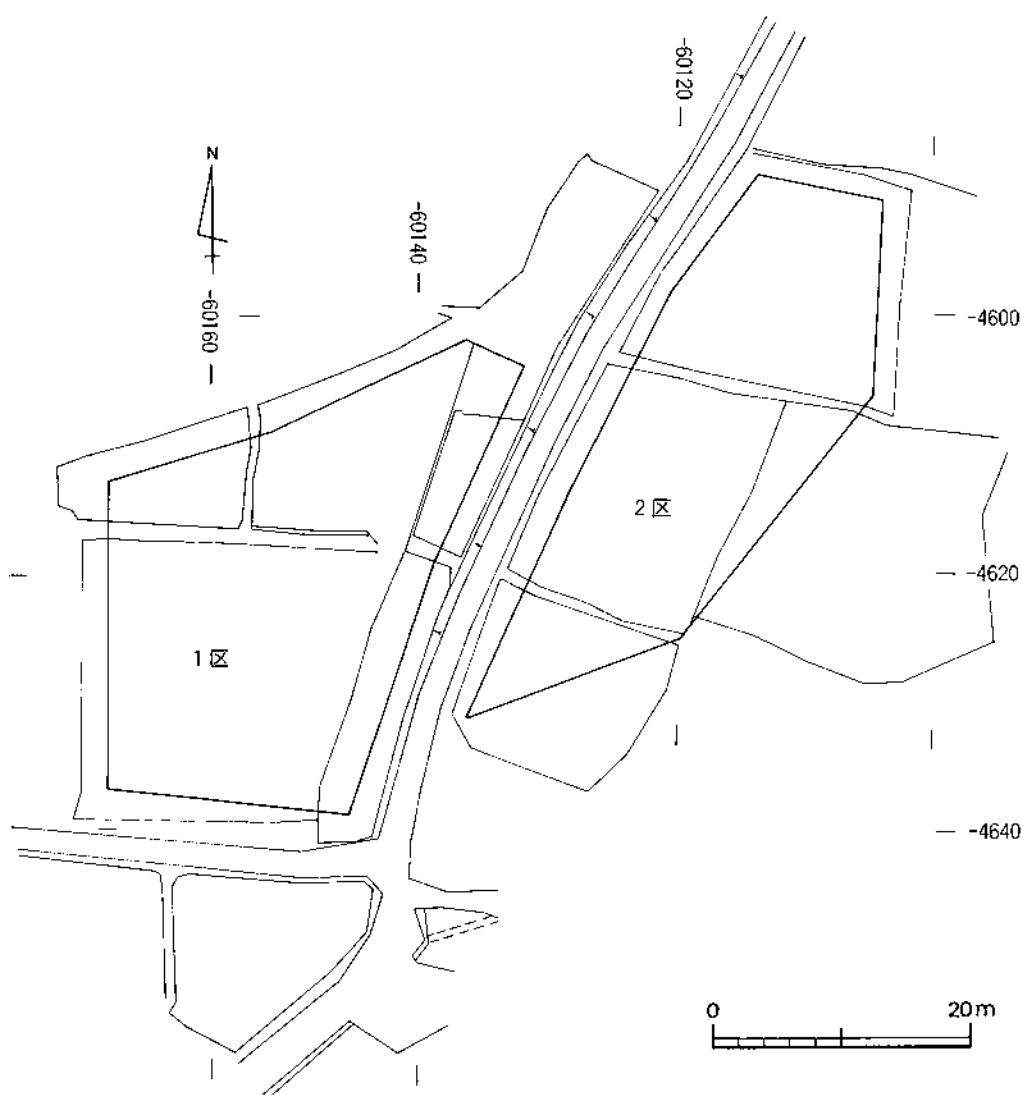


Fig. 10 本調査区位置図 2

2. 1 区の調査

(1) 基本層序 (Fig. 12)

1 区の層序は、調査区南面の壁と道路沿いの東側の壁の一部及び、調査区内に 5 本のバンクを残して層序の観察を行った。南壁と東壁では表土 (I 層) 下 1 ~ 1.5 m の深さまでは、礫層

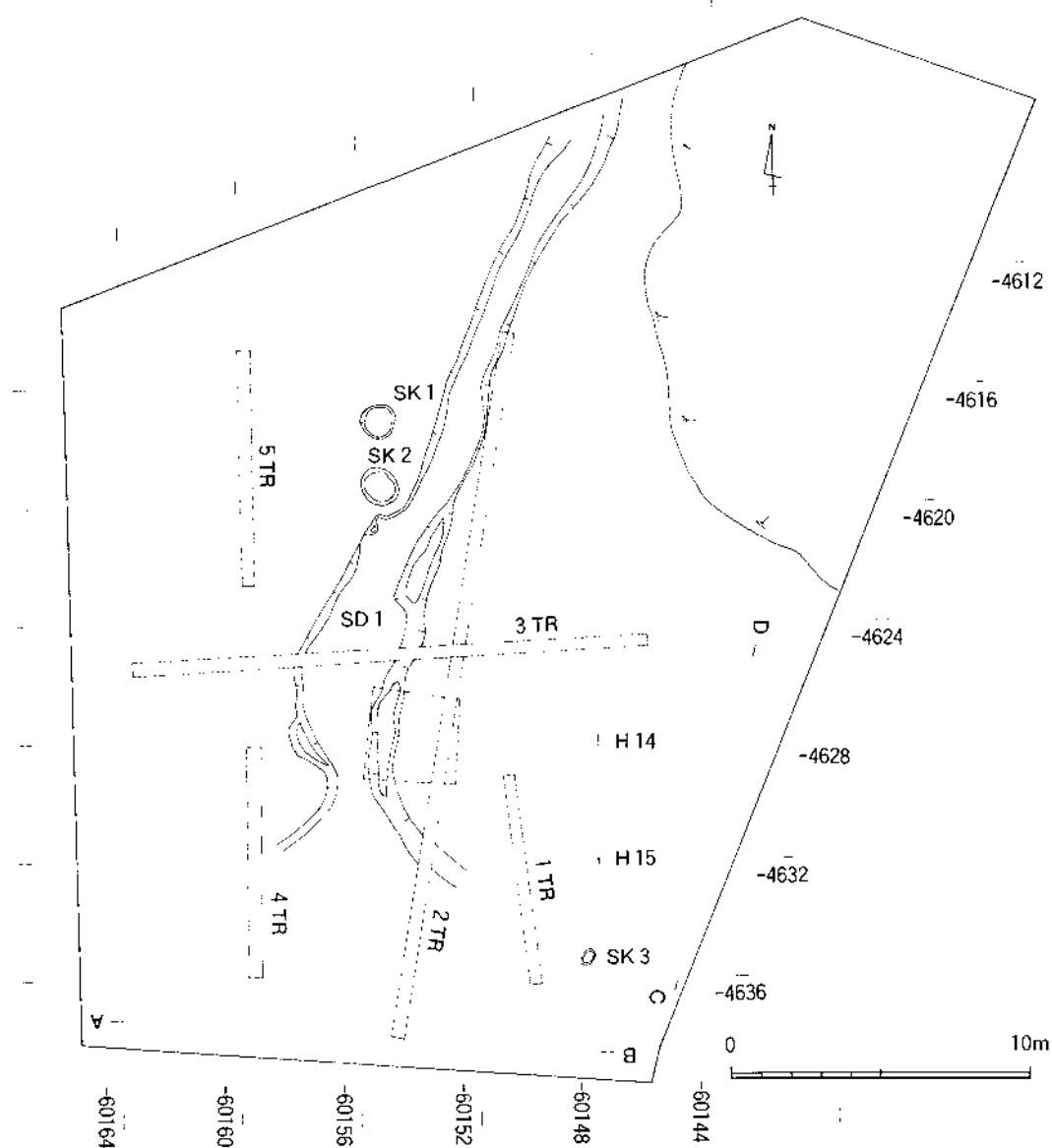


Fig. 11 1 区検出遺構・トレンチ・セクション位置図

と粘土層が交互に整合を保って堆積(I～IV層)しているが、V層より下層については、礫層・砂礫層・粘土層が無秩序的に複雑な堆積を示している。複雑な堆積を示す東・南壁の層準は、調査区内で十分に面的な広がりを把握できないものも多い。これらの砂礫層は、南の丘陵及び南に伸びる谷部から洪水などに際して流出したものや崖錐性の堆積物であり、VI・VII層などの粘土層は、植物遺体など腐食物を多く含んでいることから比較的安定している環境下で堆積、あるいは四万十川からの逆流現象による冠水時に沈殿堆積したものである。

これらの層準の中で遺物を多く含み安定しているのはX層とXIII層(南壁では確認できない)である。X層は南壁に一部を切られながらも安定した堆積をしており、南壁の東隅では後述するように古墳時代前期の包含層(VII層)を載せており、X層上面にも原遺位を保った状態で同時期の遺物を検出することができた。XIII層は南壁では確認し得なかったが、東壁ではXII層の下に堆積している。本来は南壁にも堆積していたと考えられるが、XII層(礫層)によって削られたものと考えられる。このXIII層は調査区内にも安定して広がっていることがトレンチ1～4によって確認することができる。そしてXIII層上面には弥生時代前期の遺物包含層D層を載せている。

(2) 各トレンチの層序

これらのトレンチは弥生時代前期遺物の出土層位及びその堆積状況を明らかにするために設定した。南・東壁に対応する層準も存在するものの各壁では認められない堆積もあることから、トレンチ内のみで確認された層準についてはA～Iの層名を付した。

① トレンチ2の東壁層序

南端より7mまではXII層が、それより北にはXIII層が緩傾斜しながら安定した堆積を示す。その上には部分的に砂礫層が堆積する所もあるが、弥生時代前期の遺物包含層D層がほぼ整合で堆積している。南部のXII層は洪水による礫層の堆積でありXIII層を挟り取ったものであろう。D層の上面はA層(灰青色砂礫の無遺物層)で被われ、A層は北に向かって層厚を増しており、北端ではA・XIII層を切って急に厚くなっている。A層上面の凹地にはVII層が堆積する。

② トレンチ3北壁

XIII層が基層にあるが、XIII層を切るSD1を境に西と東とでは層準が異なっている。東側はXIII層の上にD層が整合で堆積、D層はSD1に落ち込んでおり、傾斜部分には水辺特有の木葉、小枝などの植物腐食物が堆積している。SD1は洪水砂礫層B層(灰色砂礫)によって完全に埋没したことがわかる。西側は無遺物層G・H層が堆積し、その中を砂礫層が挟るように堆積している。この砂礫層はXII層と同じ層準であることが考えられるが追跡することができなかった。当層準は流木を大きく含んでおり洪水による堆積層と考えられる。

③ トレンチ5東壁

調査区西北に設けた長さ7.8mのトレンチである。ここではXIII層は確認できない。もっと下層に潜っているものと考えられる。G層の上には一部砂礫をはさんでD層が堆積しているが、

ここでは前期土器は全く出土していない。D層の上にはA・VII層が安定した堆積を示している。

④ トレンチ4 東壁

調査区の西南に設けた長さ8mのトレンチである。XIII層が厚く堆積しており、その中央を切るように洪水による砂礫層の厚い堆積があり流木を多く含んでいる。この砂礫層はXII層に対応する可能性がある。またXIII層上・下で色調にわずかな違いがあるところからやや褐色味を帯びた下層部をXIII層とした。北半部のXIII層上にはA・G層が砂礫層堆積後に沈澱堆積している。

以上1区の層序について見たが、表示した層準より下層についても、粘土と礫層が交互に堆積しており、この付近の沖積層の形成過程を知ることができる。先述のように洪水と四万十川の逆流現象による沈澱堆積とが交互にくり返された結果であり、人々が定住生活を営むには相当不安定な環境であったと考えられる弥生時代前期末にXIII層を基盤とする生活面が確認されたが、それまでは人工遺物の存在を確認することができない、従ってXIII層が形成された後、弥生時代前期末に至って比較的安定した環境下で人々の最初の営みが開始されたものと考えられる。しかしながら中期以降の遺物が全く認められず古墳時代前期まで空白が続く、この空白期は前期末という限られた一時期でこの地を放棄したのか、中・後期の遺構・遺物が相次ぐ洪水砂によって流出されてしまったのかということは、今次調査結果からは明らかにすることができない。また古墳時代以降現代までの空白期についても同様のことが考えられる。ただ表土（現耕作土）直下は砂礫層となっており、更に下層についても旧耕作土層の存在が認められない。しかしながら天正年間に作られた長宗我部地検帳によれば水田化されていた記録があり、少なくとも近世以降水田経営がなされていたと考えなければならない。従って度重なる洪水毎に水田は流失しそのつど新たな普請が繰り返されたものと考えられる。

(2) 調査成果

① 弥生時代前期の遺構と遺物

SK1 (Fig. 14.15)

楕円形のプランを有し長軸1.17m、短軸1.10m、深さ10cmを測る。床面はほぼ平坦面をなし壁は斜めに立ち上がる。埋土は炭化物を含んだ暗灰色粘土の単統一層である。遺物は土坑の縁辺部から甕(22・23・25・26)・鉢(24)の比較的大形の破片が出土している。甕底部(26)は床面に接しているが、他のものは検出面付近からの出土である。22・23は大きなカーブを描いて外反し口縁部には刻目を有する。外面ハケ調整を施すが上胴部で原体の方向が異なっている内面の指頭圧痕と相俟って接合部で生じた変化の可能性がある。24は口縁端部をつまんだ強い横ナデを行い、下端に刻目を施す。口縁下に刻目突帯を貼付している。25は口縁外面に1条・上胴部には3条の微降帯を貼付。内外面ナデ調整。25は胎土中にチャートを多く含むなど色調・胎土共

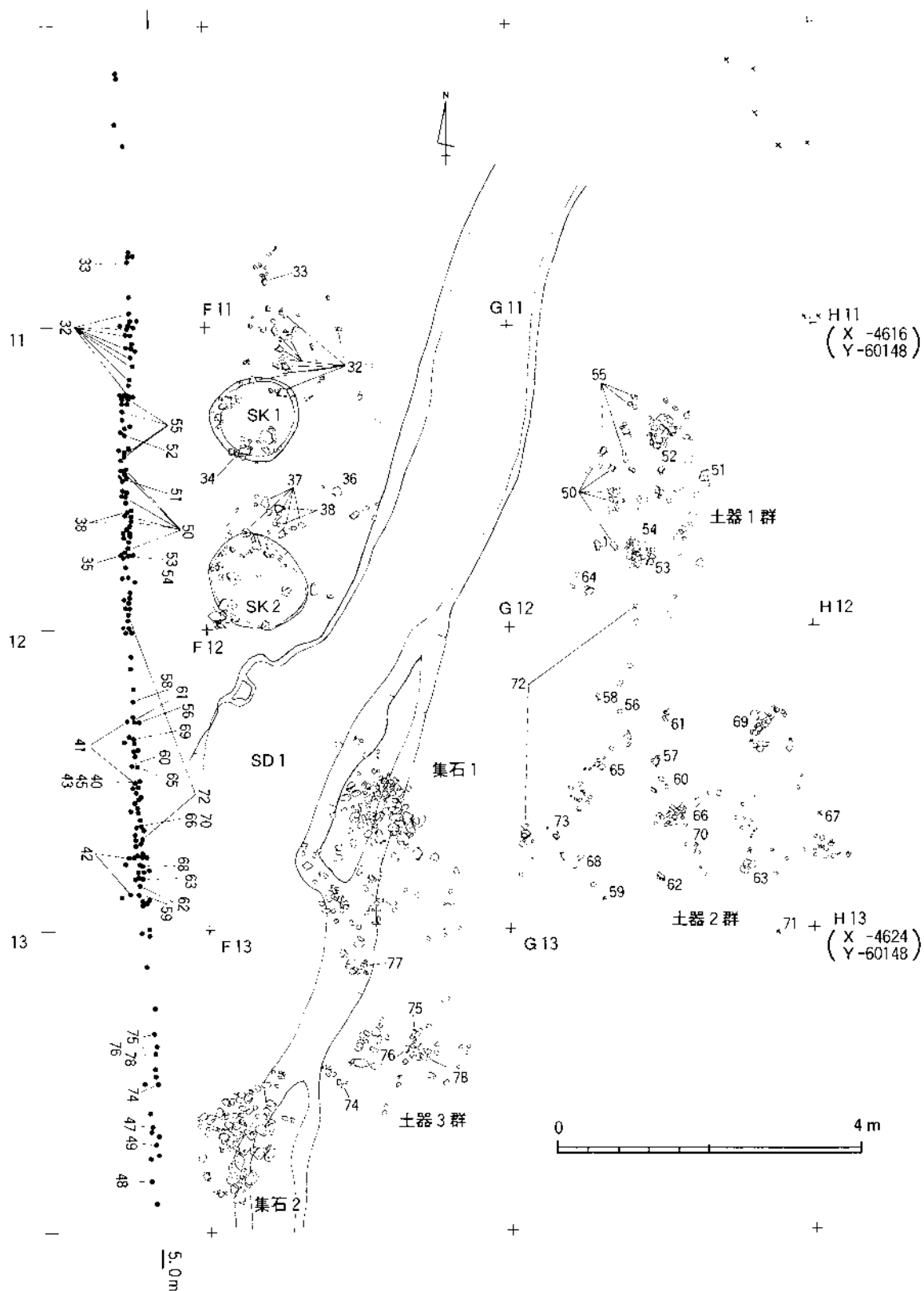


Fig. 13 弥生時代前期の検出遺構及び遺物出土状況

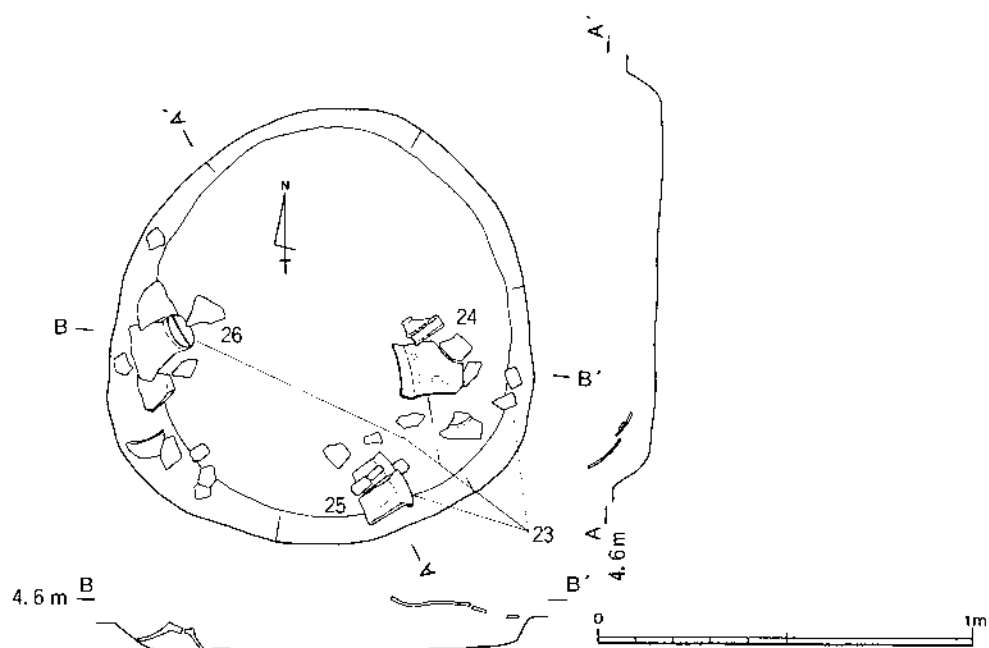


Fig. 14 SK1 及び SK1 遺物出土状況実測図

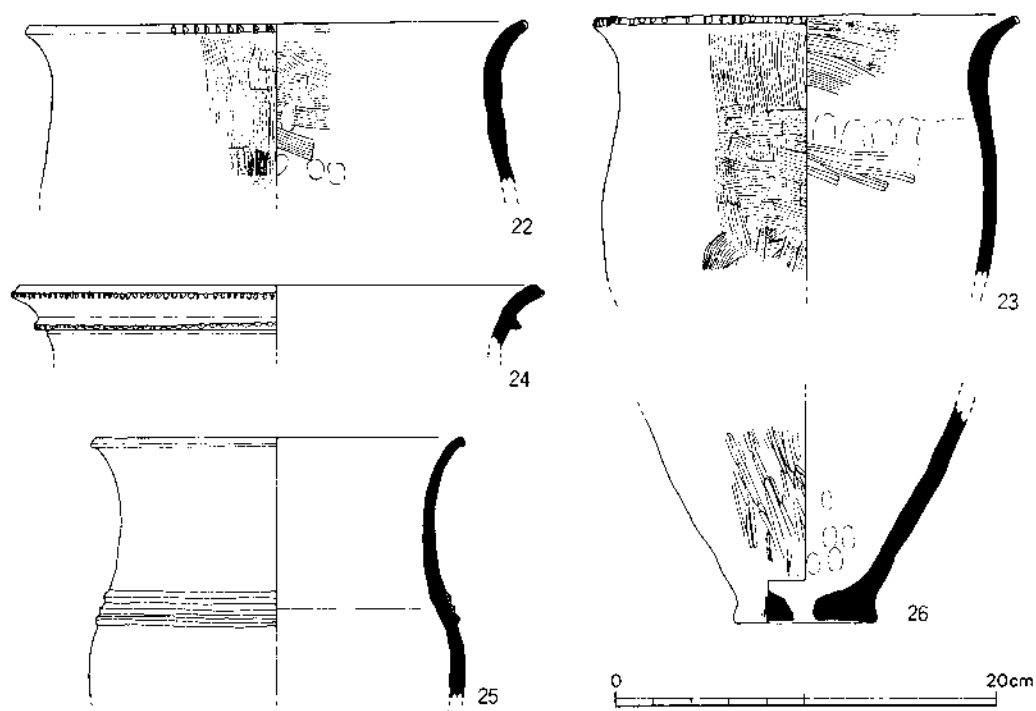


Fig. 15 SK1 出土遺物実測図
甕 III - A - ①類 (22・23)・同 VIII 類 (25)・
同底部 (26)・鉢 I 類 (24)

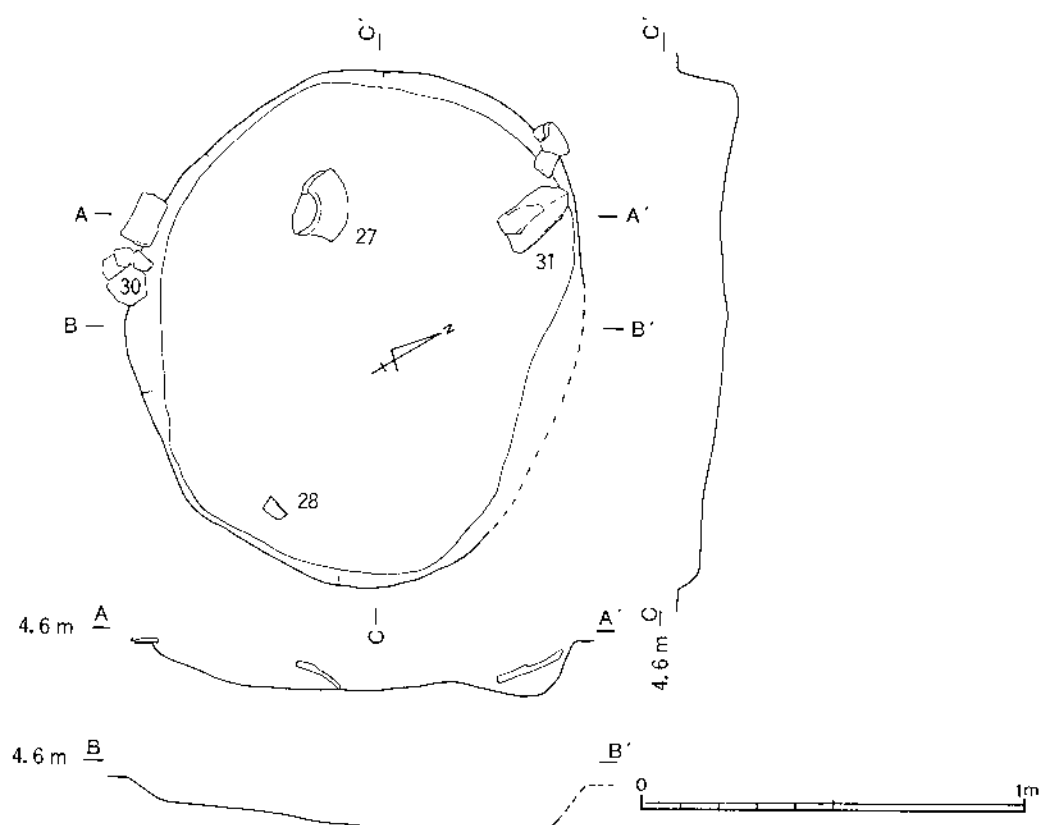


Fig. 16 SK 2 及び遺物出土状況実測図

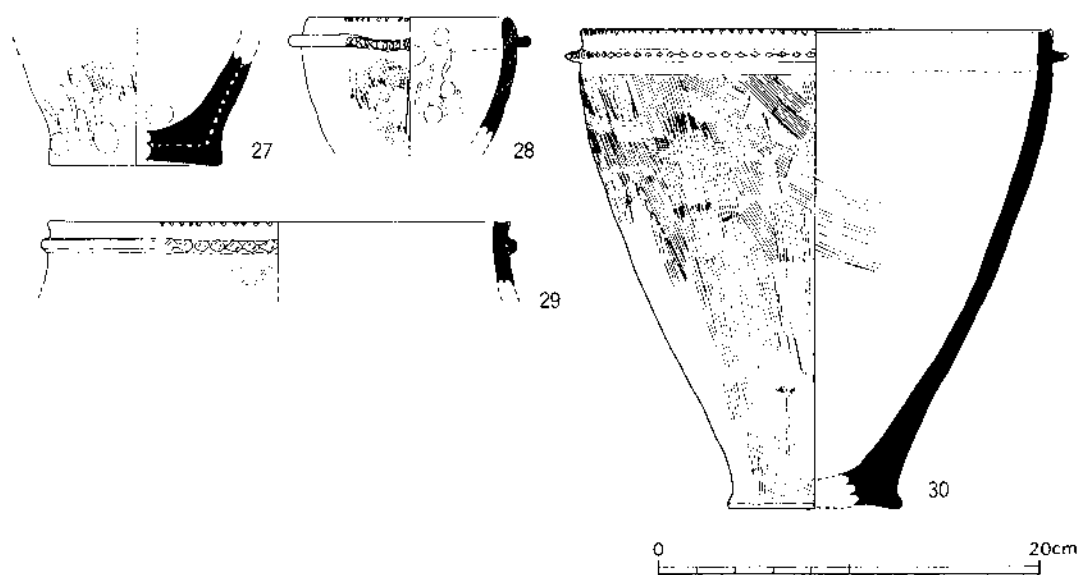


Fig. 17 SK 2 出土遺物実測図
 甕 VI - A - ② - ㊦ 類 (29・30) ・
 甕 VI - A - ① - ㊦ 類 (28) ・同底部 (27)

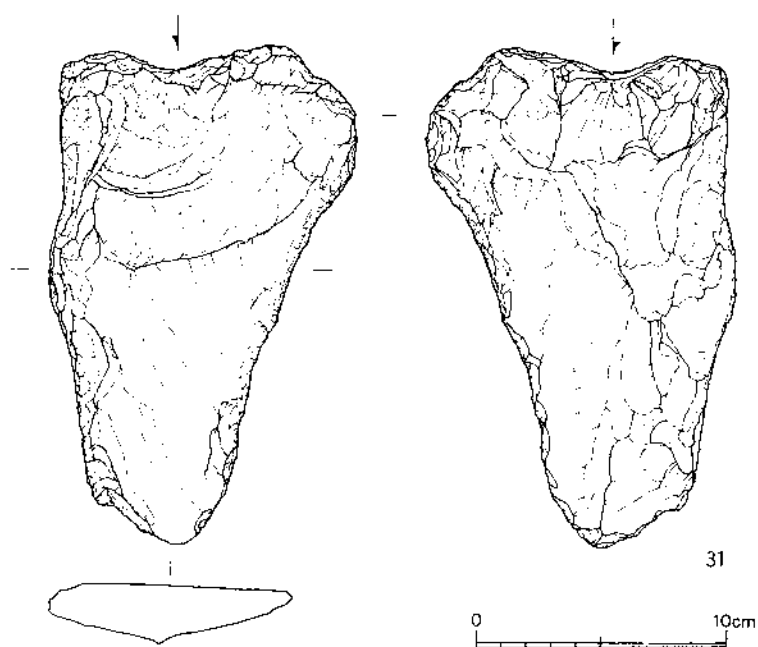


Fig. 18 SK 2 出土打製石器実測図

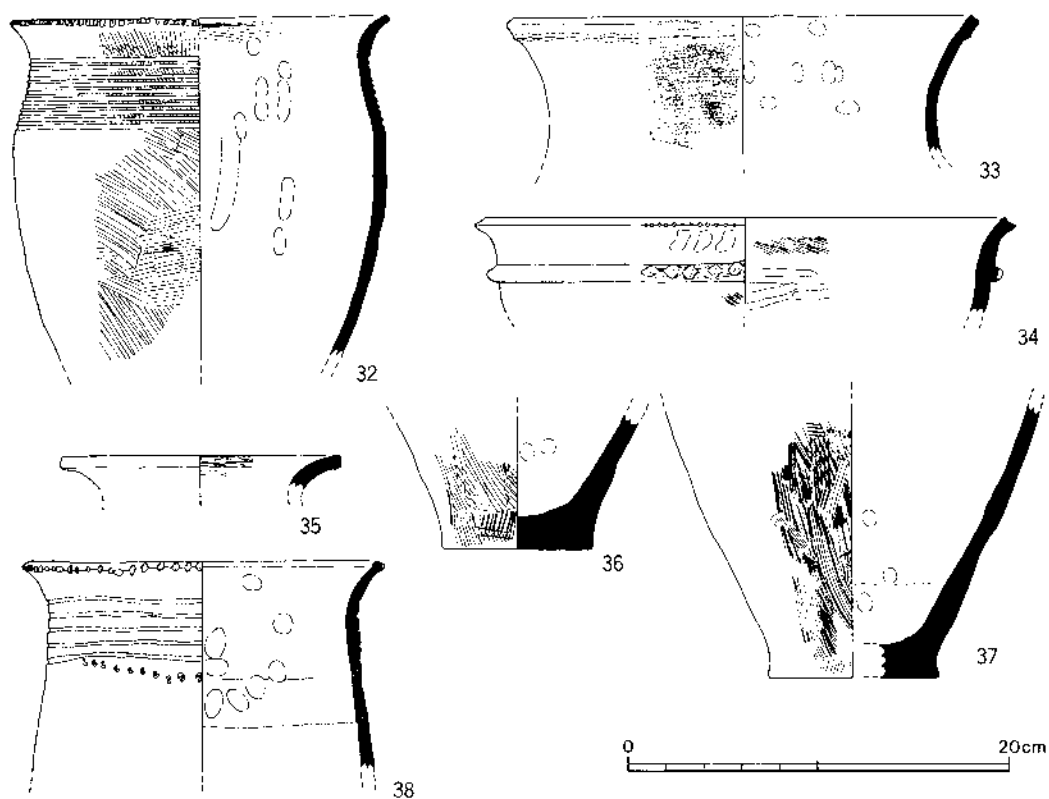


Fig. 19 SK 1 の周辺(32~34)及び SK 2 の周辺(35~38)出土遺物実測図
 甕 I - A - ①類(32)・甕 I - B - ①類(38)・甕 VIII 類(33)・
 甕 I 類(35)・鉢 I 類(34)

に他の土器とは異なっている。26は台形状の底部を有し焼成後穿孔をする。外面は縦方向のヘラミガキ、内面には指頭圧痕が顕著である。24以外は外面が全面に煤けている。すべて前期末に属し、SK 1 が堆積する一時期に廃棄されたものである。

なお、後述するように SK 1 の北側には多量の同時期の土器が出土しているが、SK 1 との関連が考えられる。

SK 2 (Fig. 16・17・18)

SK 1 の南 2 m にある。楕円形のプランを有し長軸 1.37 m、短軸 1.2 m、深さ 7 cm を測る。東側の壁の一部を十分つかむことができなかったが土坑として把握することは可能である。検出面には一面に炭化物が広がり、埋土にも炭化物を多量に含んでいる。床面は凹凸が見られ壁の立ち上がり角度も場所によって異なる。遺物は甕底部(27)が床面に接する状態で、打製石器(31)が北側の壁に倒れかかるような状態で出土している。28・29は検出面付近で、30は肩にかかる状態で出土している。28～30は口縁部に刻目を有し、口縁下には刻目突帯を貼付している。外面はハケ調整を基調としている。(27)の底部付近及び(28)の内面にはヘラ磨きが施される。すべて外面が煤けている。SK 1 と同時期であり同様の廃棄パターンが考えられる。

SK 1 及び SK 2 周辺出土の遺物 (Fig. 19)

SK 1・2 の周辺からは、図示した土器を中心に多量の土器片が集中して出土している。なかには甕(32・37)のように土坑の検出面出土の土器と接合するものもある。鉢(34)は、検出面直上の出土であるところから周辺出土の遺物として扱った。32は如意状口縁を有し、口縁に刻目、上胴部に10条のヘラ描沈線を施している。33は口縁部に微隆起帯を貼付する甕、34は口縁部を強く摘み出し下端に刻目、口縁下に刻目突帯を貼付した鉢である。35は壺口縁部、38は口縁端を摘み出し下端に刻目、上胴部に5条の沈線帯を有しその下に竹管状原体による刺突文を配する。36・37は甕底部である。以上のうち甕はすべて煤けており、底部の2つは被熱赤変している。これらの土器はすべて SK 1・2 と同時期の前期末に属し、一連の廃棄遺物として把握することができよう。

集石 1 及びその出土遺物 (Fig. 20・21・22)

集石 1 は SD 1 の東側肩部に集中する礫群で、2×2.5 m の範囲に集中するが SD 1 の立ち上がり部にあるテラス部分からは浮いている。これらの礫は、四万十層群に多く認められる砂岩の円角礫で構成されており、礫群の中には大小の土器片を多く含んでいる。図示し得たものは甕のみである。39～41は如意状口縁を有し、40・41は口縁を摘み出し下端に細い刻目、40は上胴部に8条以上の沈線帯、41は1条のヘラ描沈線を有す。42は口縁下に刻目突帯、41は口縁部に無刻の太い突帯を貼付し内面に1条の沈線を配す。46は大きなカーブを描いて外反する口縁を有し口縁端部を強く摘み出している。44・45は底部である。例外なく煤けている。これらの土器もすべて前期末に属する。

集石 2 及びその出土遺物 (Fig. 23)

集石 1 の 4 m 南にある。SD 1 の検出面上にあり 1.1×1.6 m の範囲に集中する。石材及び土器の出

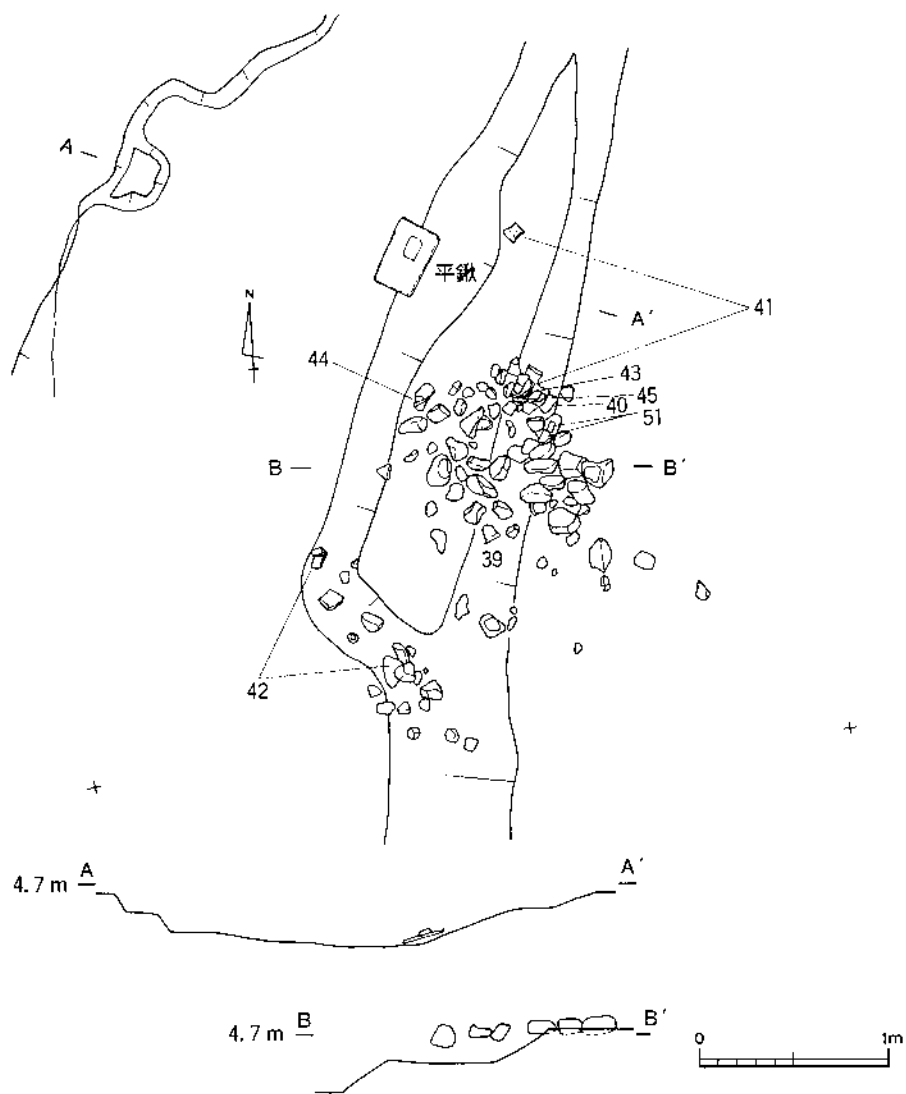


Fig. 20 集石1及びSD1平鋤出土状況実測図

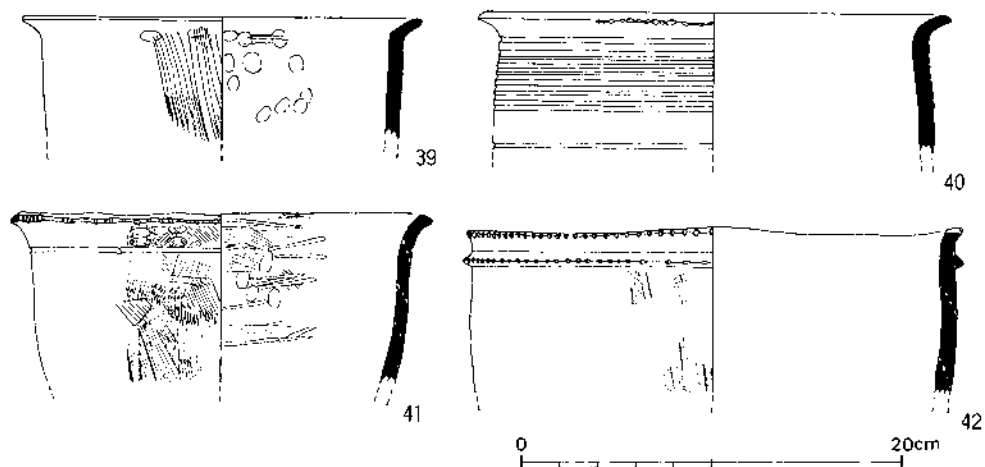


Fig. 21 集石1出土遺物実測図
掘I-A-②類(39)・同I-B-①類(40・41)・
同VI-A-②-③類(42)

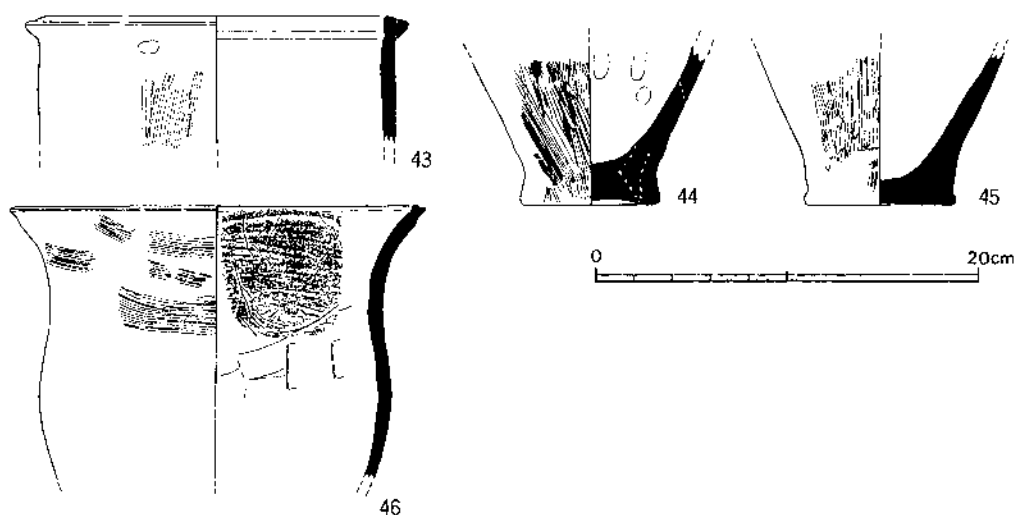


Fig. 22 集石1出土遺物実測図
甕Ⅲ-B-②類(46)・
同Ⅶ-B類(43)・同底部(44・45)

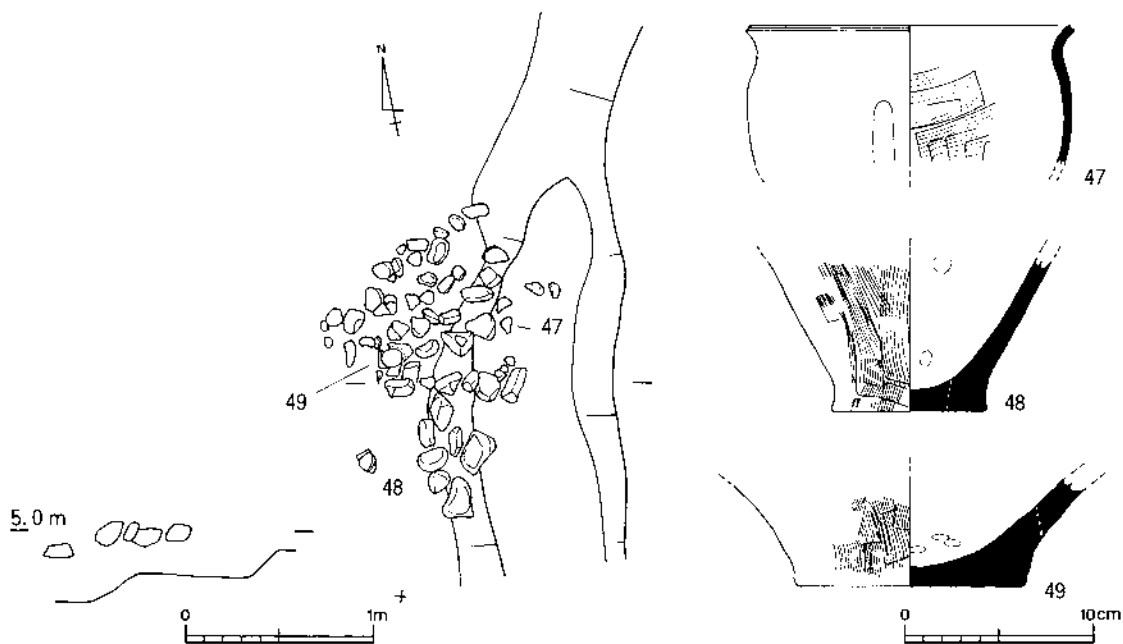


Fig. 23 集石2及び出土遺物実測図
甕Ⅰ-A-③類(47)・同底部(48)・壺底部(49)

土状況も集石1と全く同じである。47は口唇部に細い沈線を有した如意状口縁を有する甕、48は甕底部、49は壺底部である。図示した3点も例外なく外面が煤けている。すべて前期末に属する。

集石1・2は、SD1が機能しつつも壁側に泥が詰まりSD1の幅が減じはじめた時期に集石がなされたものと考えられる。その時期は土器の入り具合から判断して、前期末に比定することができる。

1 群の土器 (Fig. 13・24)

SD 1 の東側に集中する土器群であり XIII 層直上及び XIII 層の上の D 層中から出土し、 2×3.2 m の範囲に集中する。これらは 50・55 のように最大 1 m 近くははなれた位置の接合資料もあるが、52 のように 1 個体が折り重なった状態で出土した例もある。50・51 は如意状に外反する口縁を有し、端部を摘み出し下端に細い刻目を施す。52 は口縁部に断面三角形の太い無刻突帯を貼付、内面には指頭によるナデが顕著、53 は直立する口縁端部を摘み出し細い刻目を施し、口縁下に断面三角形の無刻突帯を貼付。54・55 は底部であり、55 は焼成後穿孔する。図示し得たのはすべて甕であり、外面は例外なく煤けている。この他扁平な形状をなした磨製石器 (64) が出土している。一見扁平片刃石斧状を呈するが刃部の研ぎ出しは全く認められない。蛇文岩である。出土遺物はすべて前期末に属する。

2 群の土器 (Fig. 13・24・25)

1 群の南にある。 4.4×3.8 m の範囲に集中しており 1 群より広く遺物量も多いが、分布密度は緩慢である。出土層位及び出土状況は 1 群と同様である。56～58 は小型の壺、59 はラッパ状に外反する口縁部を有し頸部や口唇部に刻目突帯・ヘラ描沈線・刻目で文様を多く施す。内面にも三角突帯を貼付している。60 は無頸壺で内外面ヘラ磨きを施す。63 は壺底部である。62 は口縁下に刻目突帯を貼付した鉢である。61 は口縁を摘み出し端部に細い刻目、口縁下に刻目突帯を貼付する。65・67～69・71 は如意状に外反する口縁を有し、67・68 は上胸部に数条の沈線帯を有す。68・71 は口唇部に刻目を施すが他のものは無刻である。66・70 は口縁部がほとんど外反せず端部を強く摘み出し細い刻目を施す。上胸部に各々 4 条のヘラ描沈線を有す。72 は甕底部で断面台形状を呈す。外底に網代の圧痕が認められる。73 は扁平な磨製石器であるが刃部は研ぎ出されていない。壺底部 (63) 及び甕 (65～72) は外面が煤けており、中でも (69) は胸部中位以下被熱赤変が激しい。なお (72) は、1 群との接合資料であるが 2 群に含めた。2 群の遺物もすべて前期末に属する。

3 群の出土遺物 (Fig. 13・25)

集石 1 の南にある。 2×2 m の範囲に分布する。その密度は緩慢であるが一応群として把握した。74～76・78 は如意状に外反する口縁部を有し、74 は口唇部に刻目・上胸部に 8 条以上のヘラ描沈線帯を有する。77 は頸部から大きなカーブを描いて外反する口縁部を有し、口唇は面をなす。76 以外は外面が煤ける。3 群の遺物も前期末に属する。

D 層出土の遺物 (Fig. 26・27)

壺：79 は直立気味の頸部から口縁部が強く外反する。頸部外面には 6 条以上のヘラ描沈線帯を有する。80 は卵倒形の体部に直線的に立ち上がる口縁部がつく。

甕：82・85～91・83・94 は如意状に外反する口縁を有す。82・85～91・93 は口縁端に刻目を有し、82・85・90・93 は上胸部に数条のヘラ描沈線帯を施し、82 と 85 は沈線帯下に刺突列点文、90 は沈線間にも刺突列点文を配す。81・84 は頸部から大きく外反する口縁部を有する

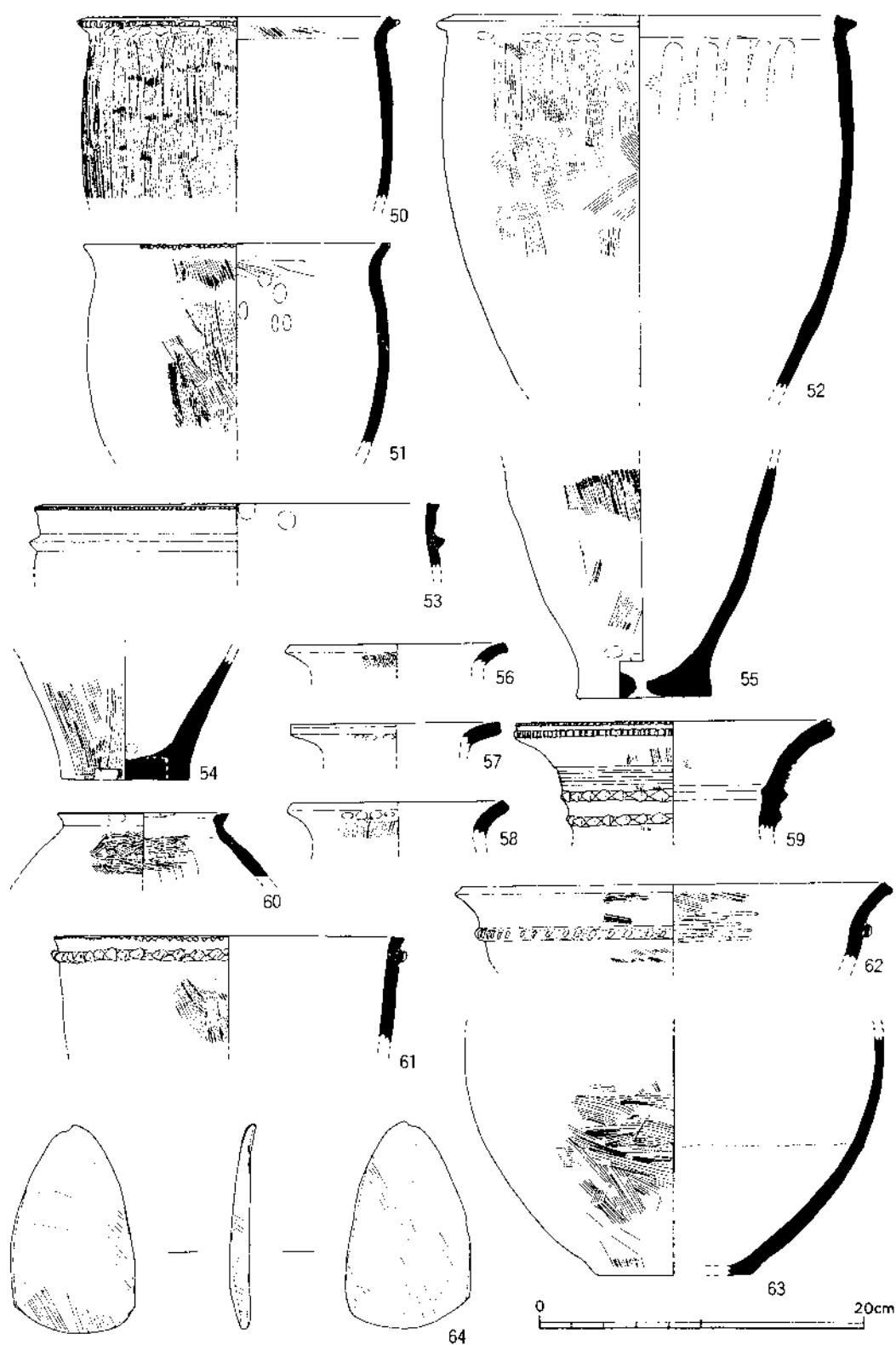


Fig. 24 1群(50~55・64)及び2群(56~63)出土遺物実測図
 甕Ⅰ-B-①類(50・51)・同Ⅵ-B-②-①類(53)・
 同Ⅵ-A-②-①類(61)・同Ⅶ-B類(52)・同底部(54・55)・
 壺Ⅰ類(56~58)・同Ⅱ類(59)・同Ⅳ類(60)・同底部(63)・
 鉢Ⅰ類(62)・石器(64) (64はS=1/2)

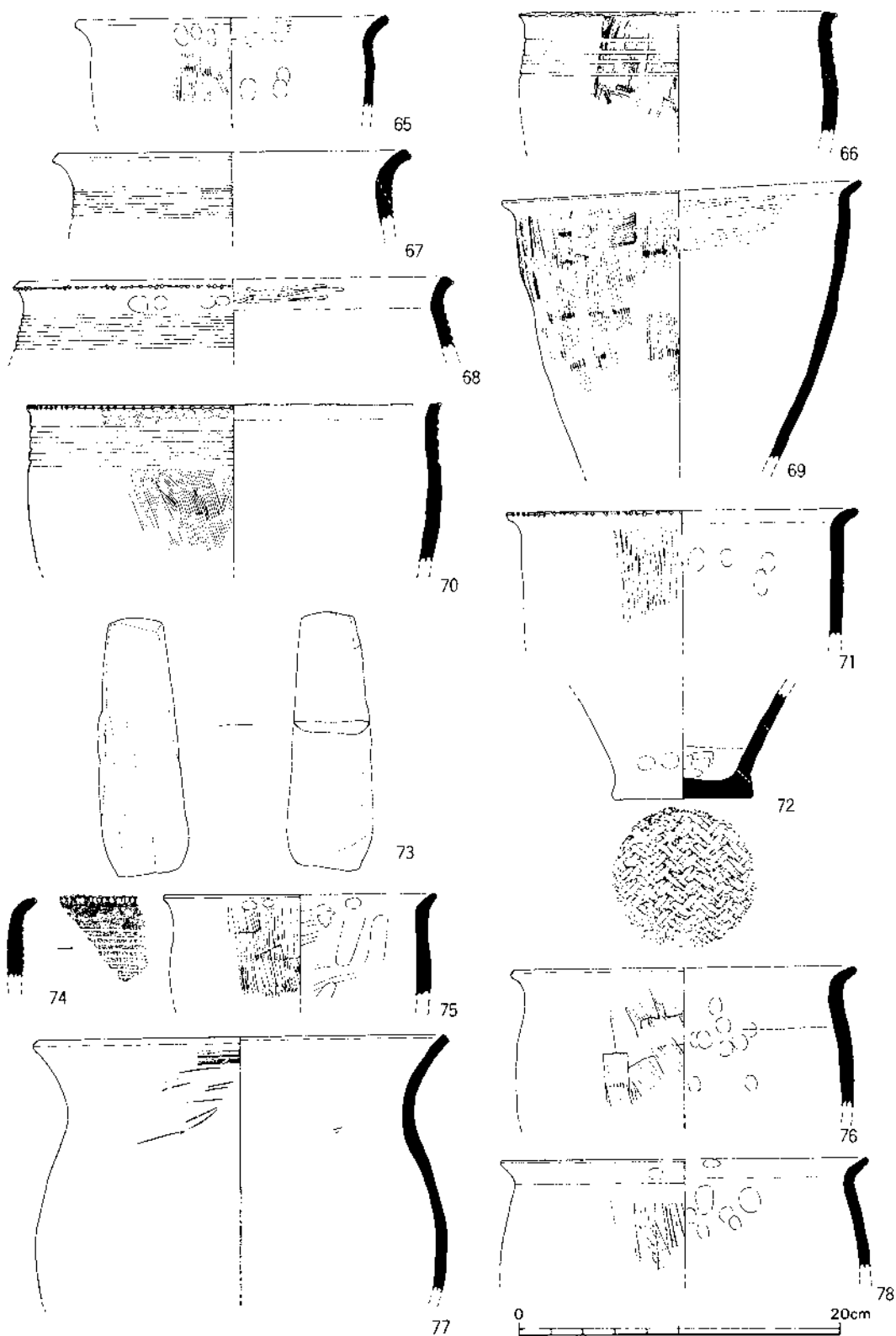


Fig. 25 2群(65~73)及び3群(74~78)出土遺物実測図
 甕Ⅰ-A-①類(71・74)・同Ⅰ-A-②類(65・69・75・76・78)・
 同Ⅰ-B-①類(68)・同Ⅰ-B-②類(67)・同Ⅱ-①類(66・70)・
 同Ⅲ-A-②類(77)・同底部(72)・石器(73) (73はS=1/2)

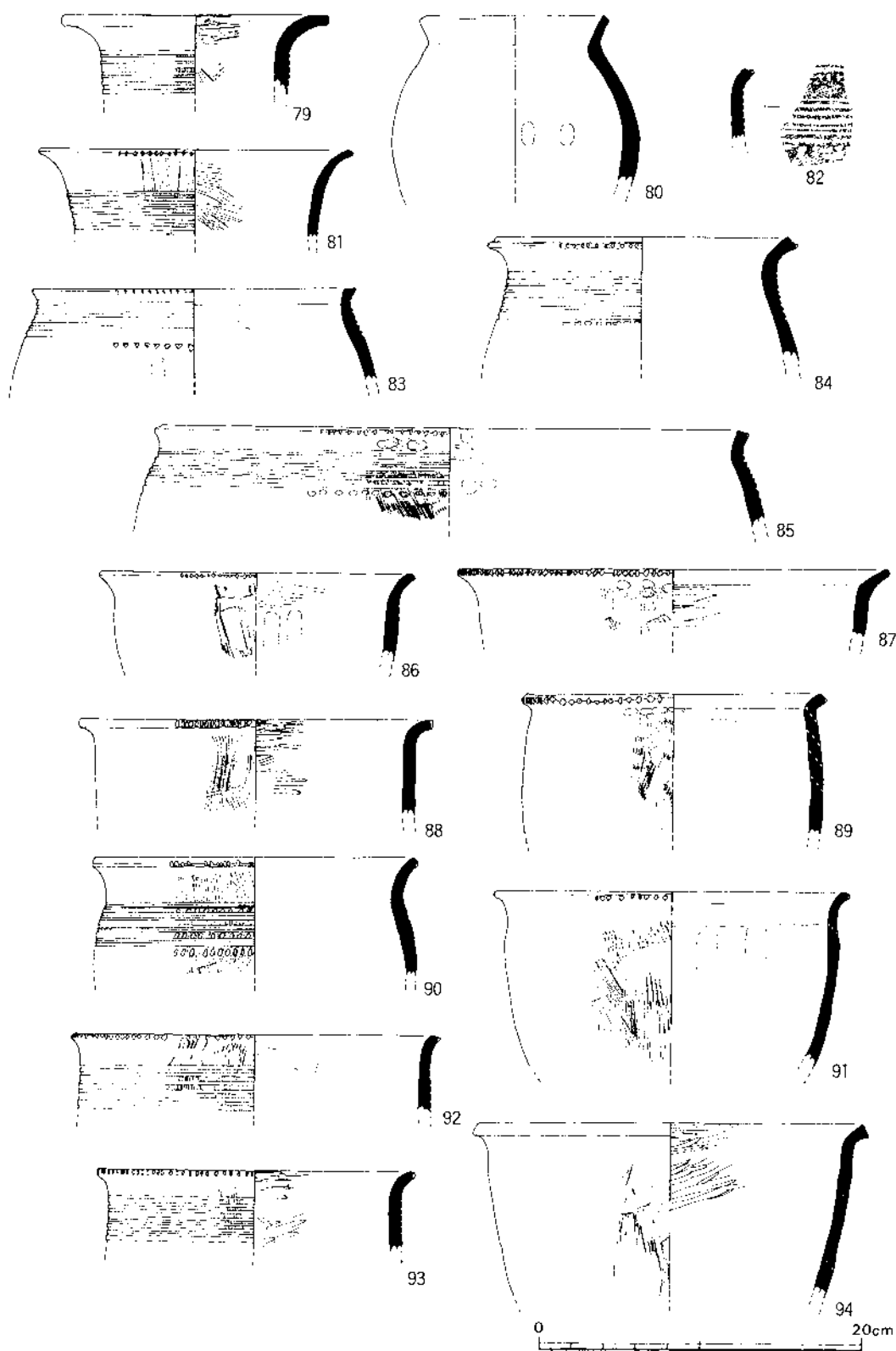


Fig. 26 D層出土遺物実測図
 壺Ⅰ類(79)・同Ⅲ類(80)・甕Ⅰ-A-①類(87・88・90・93)・同Ⅰ-B-①類(82・85・86・89・91)・同Ⅰ-B-②類(94)・同Ⅱ-①類(83・92)・同Ⅲ-A-①類(81)・同Ⅲ-B-①類(84)

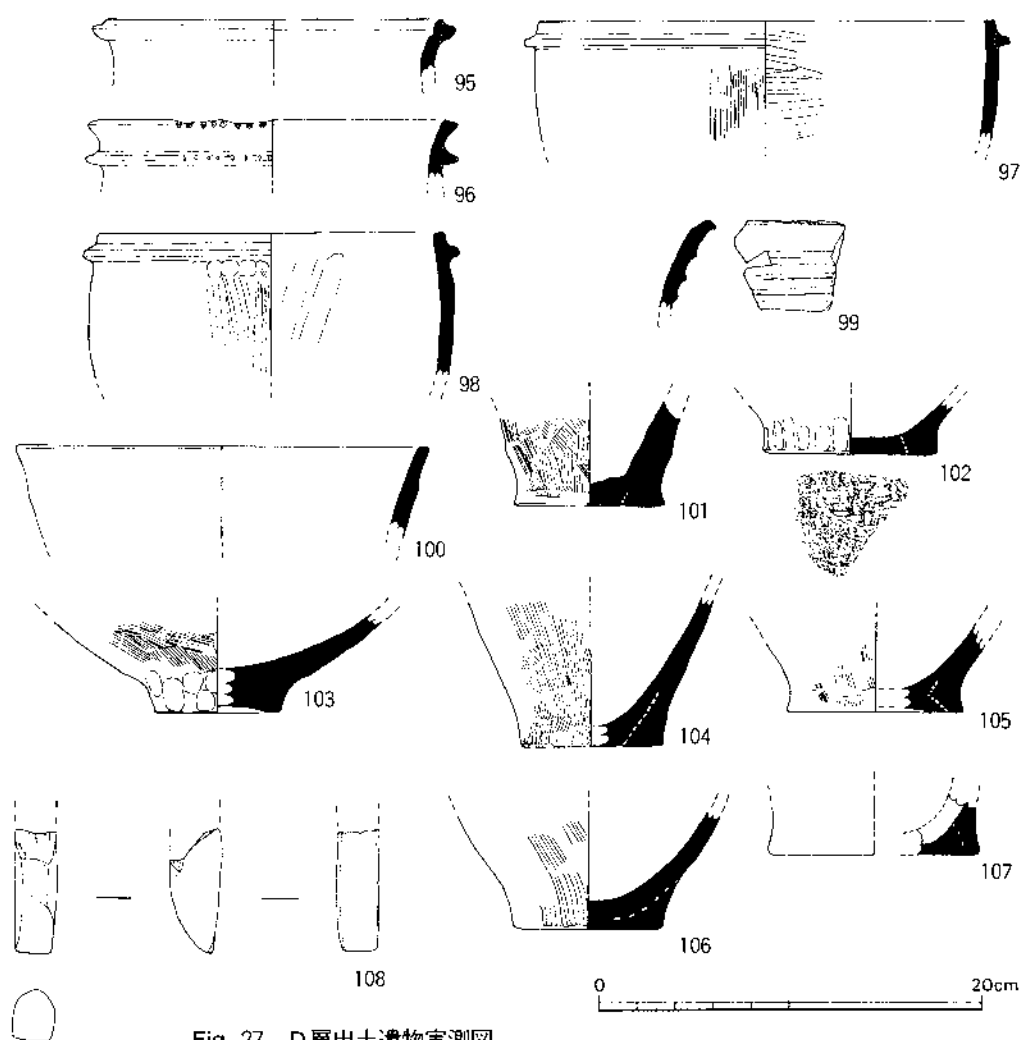


Fig. 27 D層出土遺物実測図

甕 VI-A-②-④類(96)・同 VI-B-①-⑥類(97・98)・
同 VII-B類(95)・同 VIII類(99)・同底部(101・102・104~107)・
鉢 II類(100)・壺底部(103)・石器(108) (108はS=1/2)

タイプで、84は口縁端部を摘み出し強い横ナデを施す。両者共に上胴部に7・9条以上のヘラ描沈線帯を有し口縁端に刻目を施す。83・92は口縁部の外反が弱く、端部を強く摘み出し横方向にナデる。両者共に口縁端に細い刻目、上胴部には数条のヘラ描沈線を有し、83は沈線帯下に刺突列点文を配す。95は口縁部外面に無刻突帯を貼付、内面に太い沈線を配す。97・98は口縁下に無刻突帯、96は口縁下に刻目突帯を有し摘み出された口縁端部にも刻目を施す。99は口縁下に断面三角の小突帯が3条認められる。

鉢：100が1例見られるのみである。直線的に立ち上がり口縁部に至るタイプである。

底部：103は壺底部，101・102・104～107は甕底部である。総じてハケ調整で仕上げるが(102・103)は底部付近に指頭圧痕が顕著，(102)の外底には(72)と同じ網代圧痕がある。以上29点の土器のなかで26点に煤の付着が認められる。

石器：ノミ状を呈する柱状片刃石斧(108)が1点出土している。基部が欠損しているが、幅1.1cm、厚さ1.4cmを測り前面研磨している。結晶片岩製である。

SD1 (Fig. 11)

調査区を西南方向から東北方向に走る溝である。確認延長24mを測るが、南部では肩部を検出することができなかった。土石流によって流出したものと考えられる。溝幅は1.2～3.8mで集石1・2の付近が最も広い。埋土は基本的に砂礫層であるが、集石付近は3TR北壁セクション (Fig. 12) で示したように木葉や小枝の腐食物を含んだ泥土が東側から流れ込むような状態で堆積している。この泥土はD層に腐食物が入ったものであり、前期土器片を含んでい

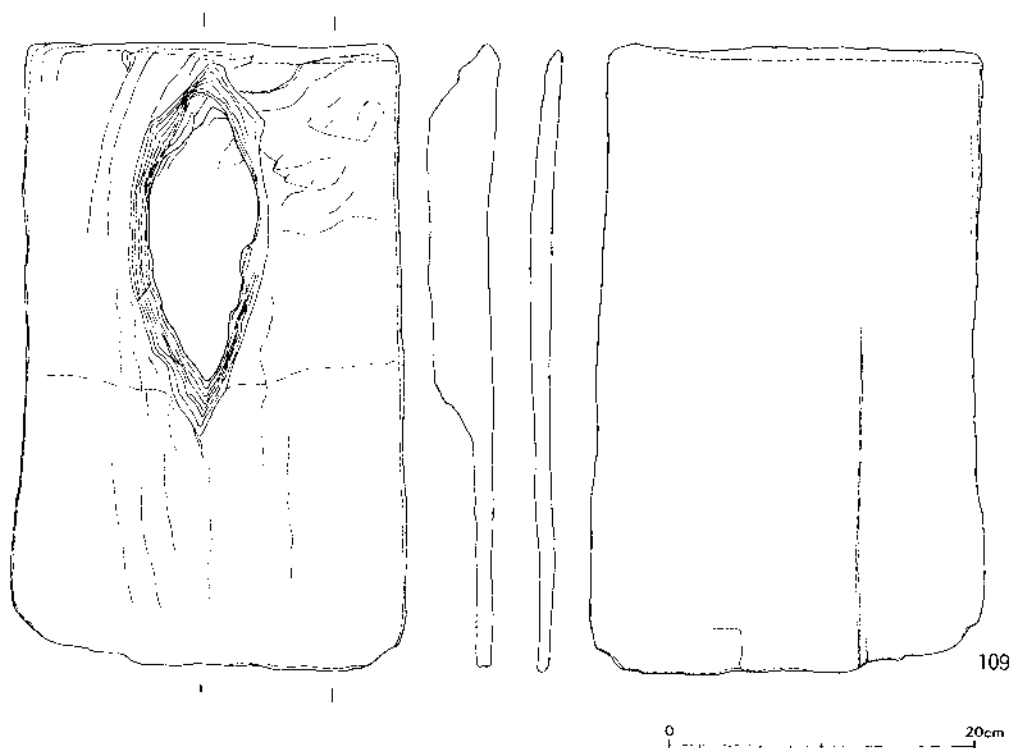


Fig. 28 SD1出土の平鍬実測図

るが、砂礫層(B層)には全く遺物を含んでいない。また集石1付近で東壁にかかるように (Fig. 20) 平鍬 (Fig. 28-109) 未製品の完形が出土している。この鍬の材はコナラ鹿属に属し、長さ41.6cm、幅24.6cm、厚さ1cmを測る。杏仁形の島状高まりは台形状の断面をなし、上底の長さは18cm、幅7.0cm、下底の長さ23.6cm、幅9.2cmを測る。長さとの比率はほぼ2.5：1、身

長と島部長（下底）の比率はほぼ1.7：1である。柄穴と刃部の造り出しのない未製品であるが、平面形は長方形で側縁の反りは全く認められない。

SD 1 は、先述したように前期末に機能しながらも、泥土の堆積によって少しずつ幅を減少させてつづき、集石が形成された時期には東側のテラス部は完全に埋没していたと考えられる。その後洪水により一挙に砂礫がたまり完全に機能を失ったものである。

② 古墳時代前期の遺構と遺物

① SK 3 (Fig. 29)

調査区南東隅に位置する。古墳時代前期の遺物包含層＝VII 層直下の当該期の生活面から掘り込まれている。楕円形を呈し長軸56cm、短軸41cm、深さ13cmを測る。床面は中央部が最も深く凹状をなし、壁は斜めに立ち上がる。埋土は炭化物・腐食物（木葉・小枝など）を多く含み、ドンダリが多く出土した。

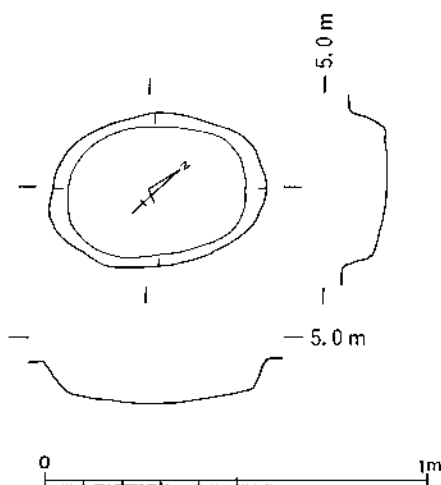


Fig. 29 SK 3 実測図

② 古墳時代前期の遺物出土状況 (Fig. 30)

古墳時代前期の遺物出土状況は大きく2つに分けることができる。1つは、調査区東南隅を中心にして安定して広がるVII層及びその下のXIII層上面（古墳時代前期の生活面）で検出された一群である。他はVII層を切って堆積した洪水による砂礫層出土の遺物である。砂礫層が堆積する以前、VII層は北に向かって緩傾斜しながらも少し長く伸び沼状になった湿地へと沈んでいっていたと考えられる。VII層及びVIII層上面出土の遺物は、図示したように集中度が高く、接合資料からもあまり原位置を移動していないことが考えられる。またVII層中には他時期の遺物が全く入っていないことから純粋な前期の遺物包含層として捉えることができ、しかも一括性の高い遺物群とすることができる。砂礫層中の遺物は、本来VII層あるいはXIII層中にあったものが、流されたものであろう。土器群北側に多く出土した木片類は、その際に流れついた流木と考えられる。

VII層及びXIII層出土の遺物 (Fig. 31・32)

壺：(110)と(111)の2点のみである。110は直線的に立ち上がる二重口縁壺で端部は尖り気味、111は直線的に立ち上がる口縁部を有し、口縁下に三角突帯を貼付、外面に叩きが認められる。

甕：112・113・123・129は、口縁部が長く立ち上がるが屈曲が弱い。口縁部外面の立ち上がり

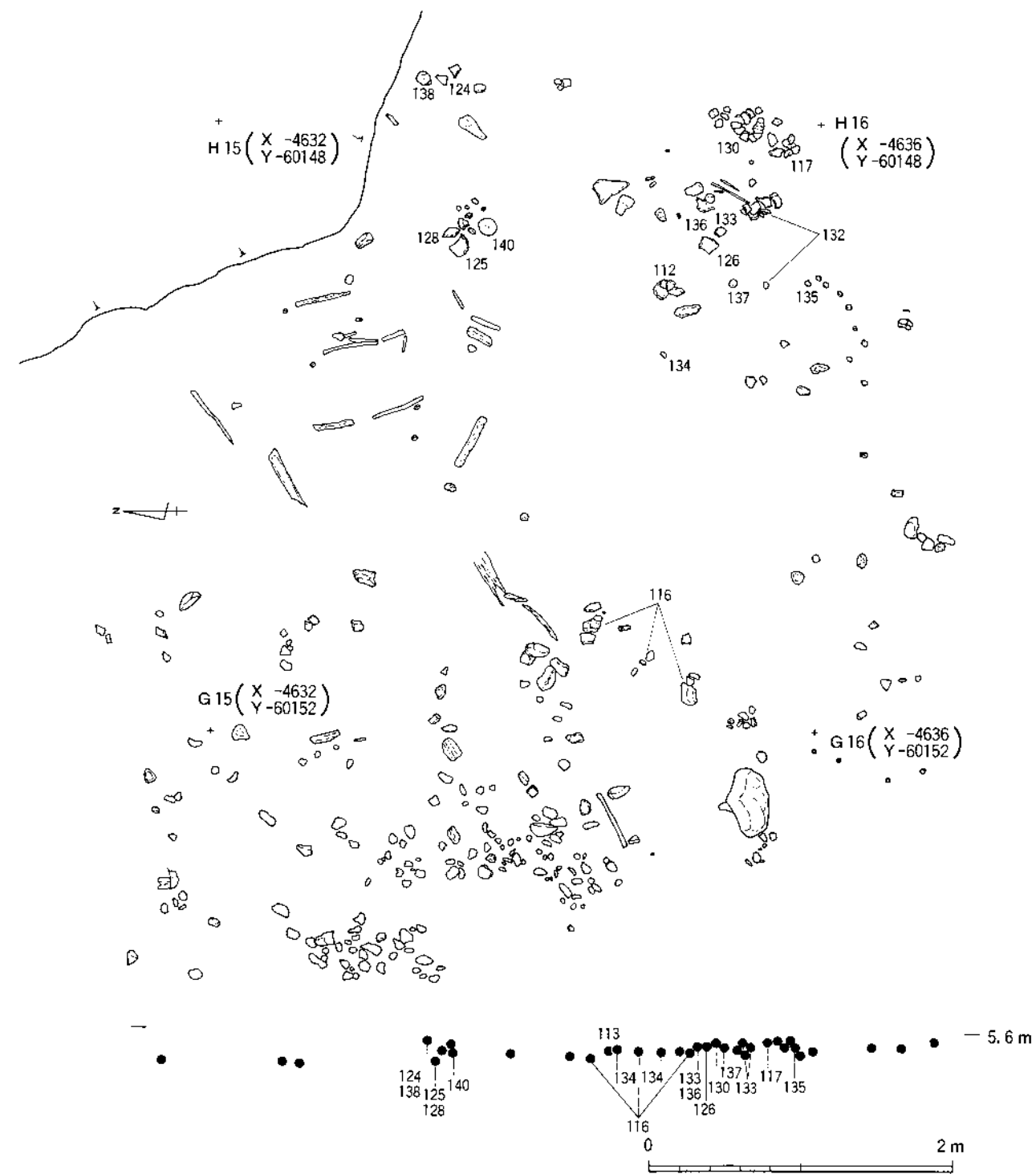


Fig. 30 第VII層（古墳時代前期）遺物出土状況

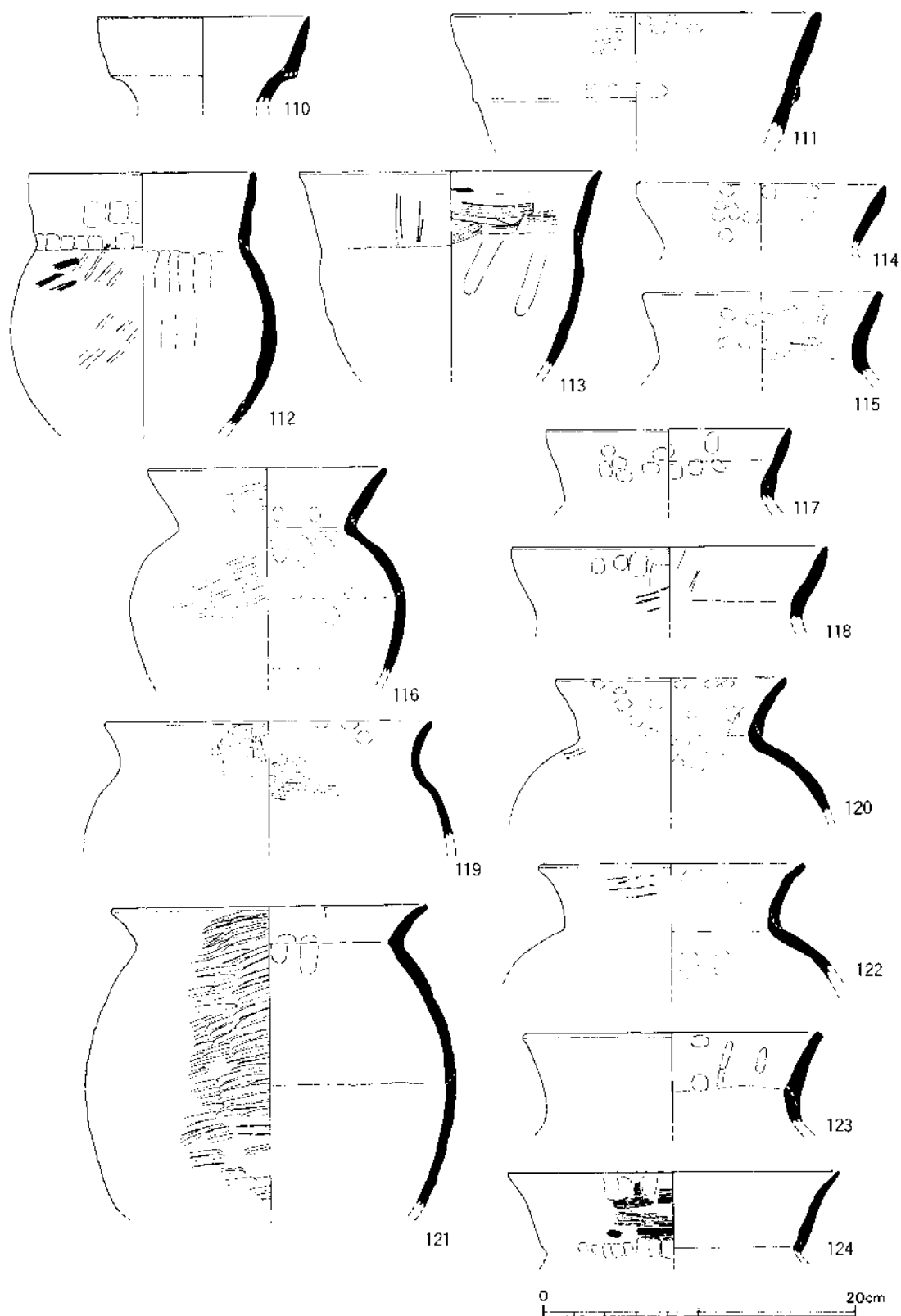


Fig. 31 VII層出土遺物実測図
 壺Ⅲ類(110)・同Ⅳ類(111)・甕Ⅰ-A類(114~118・120・122・124)・同Ⅰ-B類(112・113・123)・同Ⅱ類(119・121)

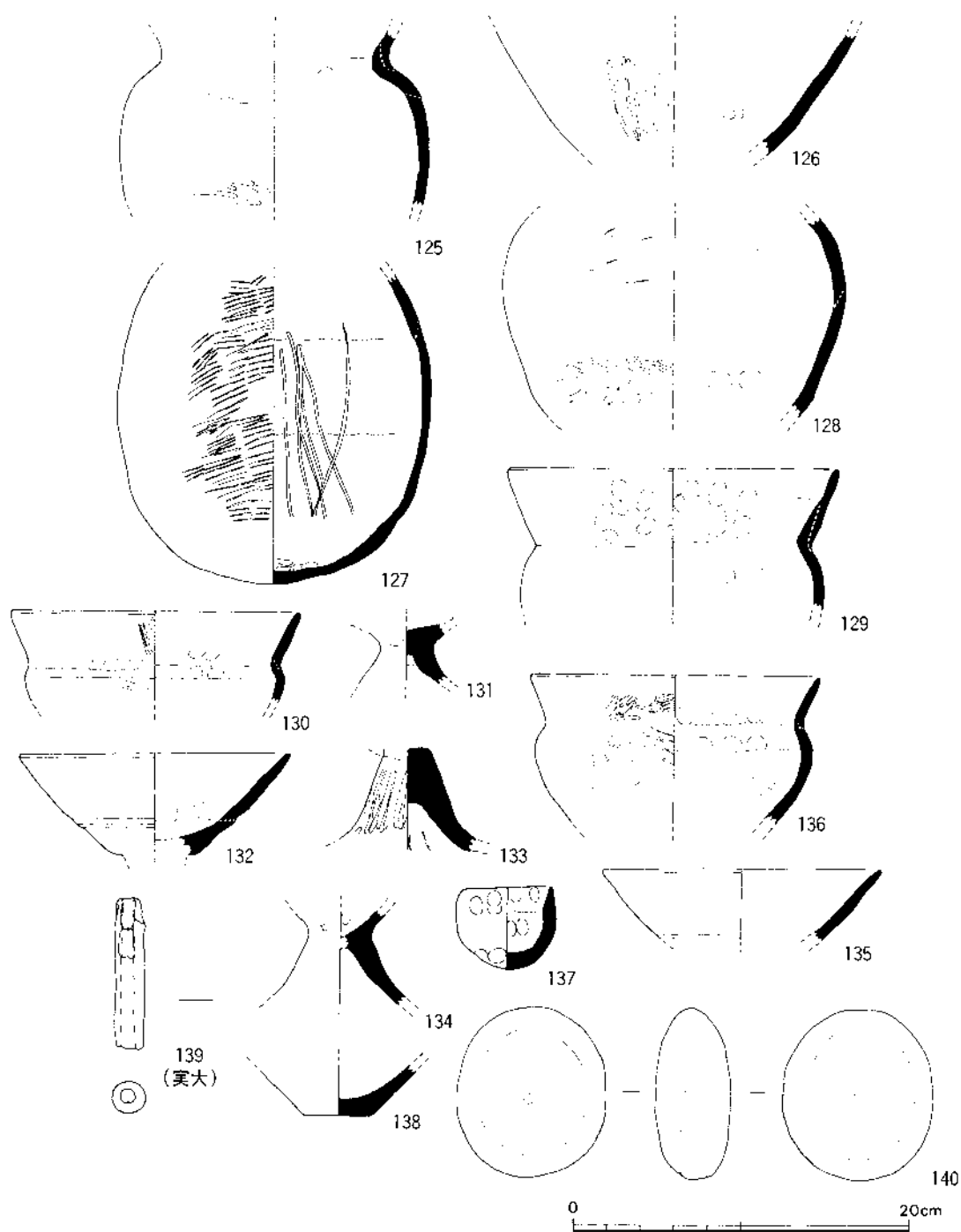


Fig. 32 VII層出土遺物実測図
 甕I-A類(129)・同胴底部(125~128・138)・
 鉢III類(130・136)・高杯(131~135)・
 手捏ね土器(137)・管土(139)・叩石(140)

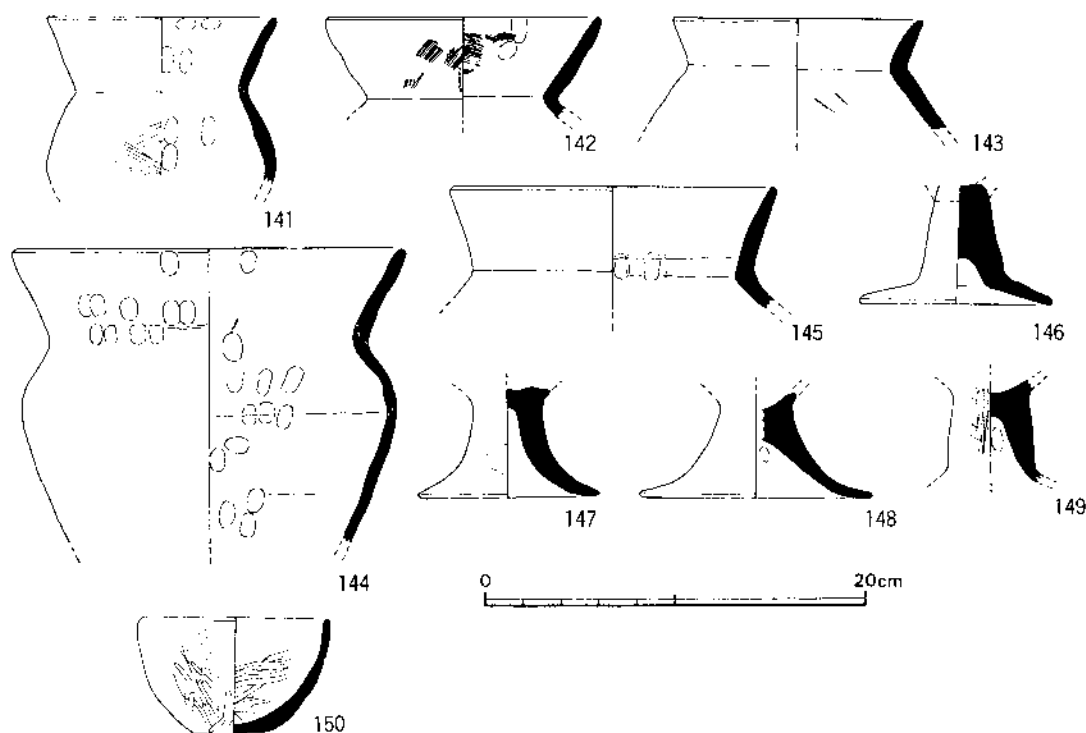


Fig. 33 砂礫層出土遺物実測図
壺Ⅱ-A類(141)・甕Ⅰ-A類(142・144・145)・
甕Ⅱ類(143)・鉢Ⅰ類(150)・高坏(146~149)

付近に、接合時に生じた指頭圧痕が残り、内面は指頭によるナデが顕著である。112の胴部外面は右上がりの叩きが見られる。114~118・120・122・124は、口縁部が長く立ち上がり外反の屈曲が強い。口縁部外面立ち上がりの指頭圧痕は(124)以外あまり顕著でないが、断面観察では体部上端に口縁部粘土帯を継ぎ足している。(116・118・122)の口縁部外面には叩きが認められるが、口縁部叩き出し手法によるものではなく、口縁部成形後に叩きを施したものである。119・121は、口縁部が短く外反するもので、(119)は丸いカーブを描き(121)は内面に稜をなして屈曲する。121は外面全面に右上りの叩きを施しており、叩き出し口縁の可能性が強い。125~128は胴部片である。127は丸底・外面に右上がりの叩きを施すが内面に顕著に現れた粘土帯接合部に対応して叩きの方向が微妙に変わっている。胴部三段成形による。内面にヘラによる沈線が数条縦方向に引かれる。また内底には指頭圧痕が顕著である。128の胴部外面下位には弱いヘラ削り(左←右)が認められる。126の外面にはヘラ磨きが認められる。138は平底の底部である。

鉢：130・136は、肩が張り頸部でくびれ、口縁部は直線的に外方に立ち上がる。130は外面ハケ調整、136はヘラ磨きを施す。両者共に内面に指頭圧痕が顕著であり、比較的長く立ち上がる口縁部は甕と同様の手法によって成形している。

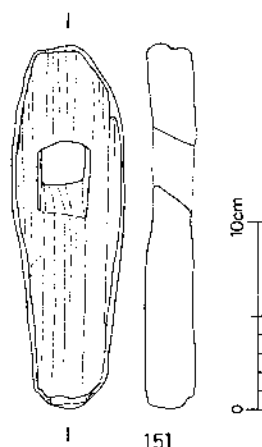
高坏：132・135は坏部、131・133は脚部である。前者は比較的細い坏底部から直線的に立ち上

がるが、外面には成形時に生じた弱い段部を有する。口縁端部は丸くおさめる。脚部131は、坏底部からそのまま開くタイプである。133は、坏底部への押入部で剝離しており分制成形手法のあり方をよく示している。柱状部はやや中脹れし裾部で強く外反、外面へラ磨き、内面はハケ状原体による圧痕が認められる。

手捏ね土器：137が1点出土している。土器集中部分から出土しているが、特に高坏(132・133～135)鉢(130・136)の集中する地点から出土している。137は、内外面指頭圧痕が顕著で内面にわずかに稜をなす。

管玉：139が1点出土している。碧玉製で長さ2.3cm、径4.5mm、孔径1.5mmを測る。片側穿孔の可能性がある。

叩石：140が1点出土している。平面形は9.5×10.2cmの楕円形で、厚さ4.5cm、重さ630gを測る。側縁部の全周及び両主面の中央部に敲打痕が認められる。硬質砂岩である。



砂礫層出土の遺物 (Fig. 33・34)

壺：141は、口縁部がやや長く直線的に立ち上がる胴部外面ハケ調整、内面指頭圧痕を施す。口縁部の成形は甕と同様である。

甕：口縁部がく字状に屈曲し長く立ち上がる(142・144・145)と短く立ち上がる(143)がある。(142・145)は屈曲部内面に稜をなし、144は丸味を帯びて外反する。144は、口縁部外面及び胴部内面に指頭圧痕が顕著である。上胴部及び口縁部の接合痕を断面で確認することができる。内・外面共に激しく煤けている。

鉢：150は、平底の底部から内湾して立ち上がる。内・外面へラ磨きを施す。

高坏：脚部のみ4点出土している。146は充実した柱状部から裾部が強く屈曲して外反。147・148は裾部になめらかなカーブを描いて移行する。149は中空の柱状部で外面にへラ磨きが施される。

木器：151は、長さ19.1cm、最大幅6.0cm、厚さ2.5cmを測る。3.6×2.6cmの方形孔を斜めに穿っている。方形孔は柄を押入する柄穴と考えられる。また先端部が僅かに段状をなしているが、刃部の着装部の可能性がある。したがって鋏を想定することができる。材質はケヤキである。

Fig. 34 砂礫層出土の木器実測図

3. 2 区の調査

(1) 基本層序 (Fig. 36)

道路沿いの調査区西壁の地層断面観察を行った。I ～ XXXVIII 層に分層することが可能で 1 区以上に複雑な堆積を示している。II 層は 1 ～ 20cm 大の礫層で層厚は 76 ～ 128cm を測り北に向かって厚さを増している。1 区の II 層に対応する層準であり洪水による堆積である。III 層は北寄り部分のみに認められ層厚は 0 ～ 18cm を測る。腐食土を多く含んだ黒褐色粘質土であり、1 区に対応する層準を求めることはできない。IV 層は、暗黄灰色砂礫層で層厚は 6 ～ 50cm を測り全面に堆積するが、場所によって層厚に変化が見られる。当層準は 1 区の IV 層に対応している。

V 層以下は、砂礫層・砂層・シルト・粘土層が複雑に堆積している。これは 1 区で見たと同様に洪水と逆流現象による沈澱が繰り返し行われたことを示している。ただ南部にのみ認められる XVI 層（黒灰色粘質土）は、層厚 0 ～ 20cm を測り多量の古墳時代前期の遺物を包含している。当層準は 1 区の VII 層に対応するものであるが、1 区 - VII 層が粘土層（IX 層）あるいは粗砂層（X 層）の上面に堆積しているのに対して、2 区 - XVI 層は主として洪水砂礫層である XXXV 層の上面に載っている点が異なる。しかし XVI 層は後述するように復元完形を含む多量の土器が原位置を保って出土していることから古墳時代前期の生活面を形成していたと考えることができる。XXVII 層は、層厚 10 ～ 90cm を測る青灰色砂礫層で洪水による堆積である。南寄りの部分で X・XIII・XXIV・XXV・XXVI 層などに切られている。XXVII 層中からは縄文後期土器 1 点の他弥生後期・古墳時代前期の遺物包含層が少量含まれている。XXVII 層に対応する 1 区の層準を明確に把握することができないが、1 区 - 東端北端に見える砂礫層を想定することができよう。また XXVII 層を切る各層準からも同時期の遺物が少量出土している。このことは各層準が XXVII 層堆積後まもなく形成されたことを示している。XXVII 層の下には XXVIII ～ XXXIII 層（粘土層）、XXXIV 層（粘土・砂礫層）、XXXV 層（砂礫層）、XXXVI・XXXVII 層（粘土層）、XXXVIII 層（腐食土層）が北に向かって緩傾斜しつつ堆積している。これらは調査区方向に広がる沼状地あるいは中筋川の遊水地帯につながっていると考えられる。ただ XXIX 層上面では、後述するように半完形の弥生後期土器と木器及び杭列が検出された。XXIX 層は弥生後期のある時期、比較的安定した生活面を形成していた可能性がある。北側に厚く堆積する XXXV 層（灰～黄灰色砂礫層）は、洪水砂礫とも崖錐性の堆積とも考えることができる。無遺物層で 1 区の XII 層に対応する。

2 区は 1 区に比べて洪水砂礫層や沈澱層の堆積が厚く、また 1 区で確認された弥生前期の遺物包含層や生活面は存在しない。これは旧地形が東に向かって傾斜していることを示している。

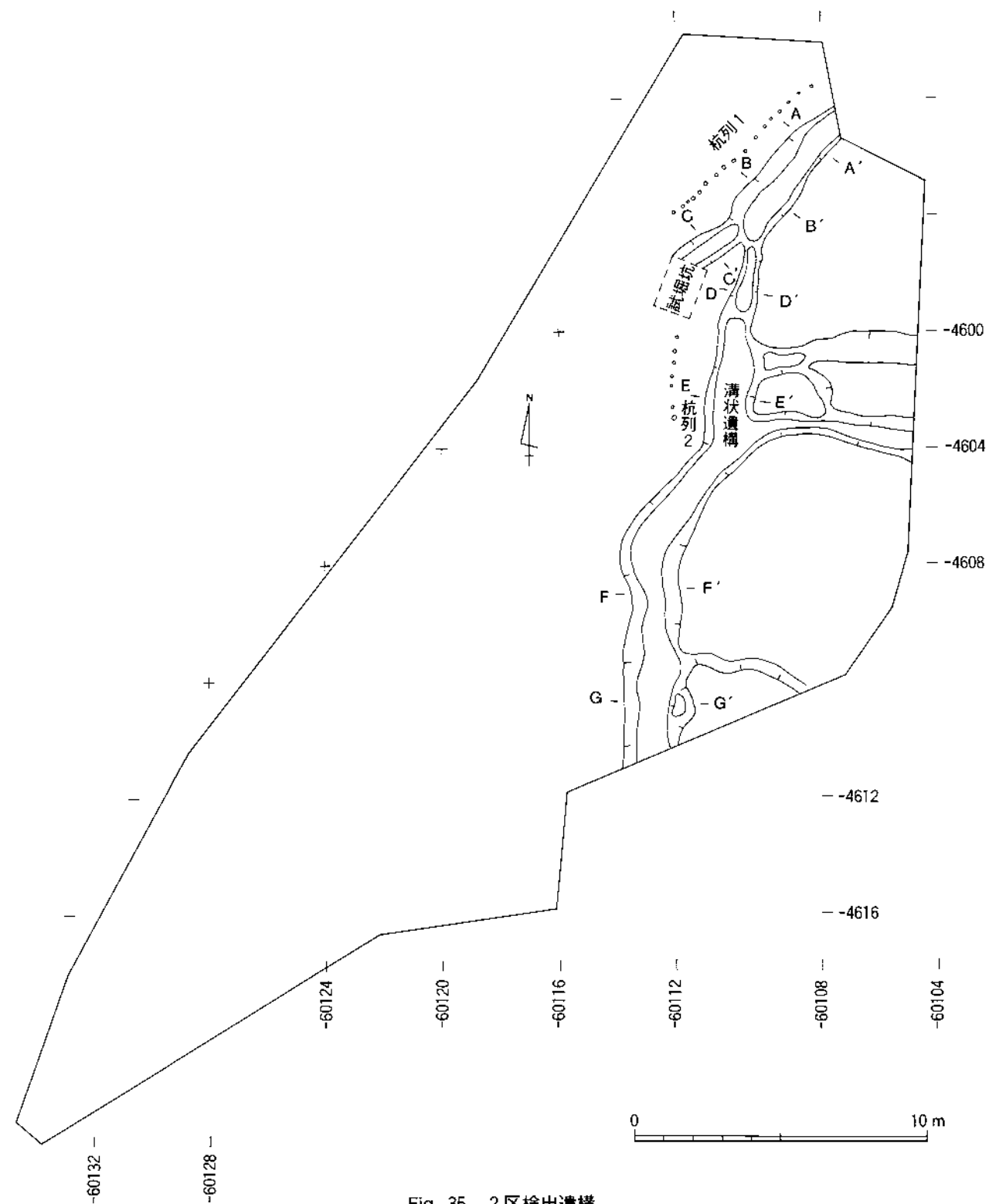


Fig. 35 2区検出遺構

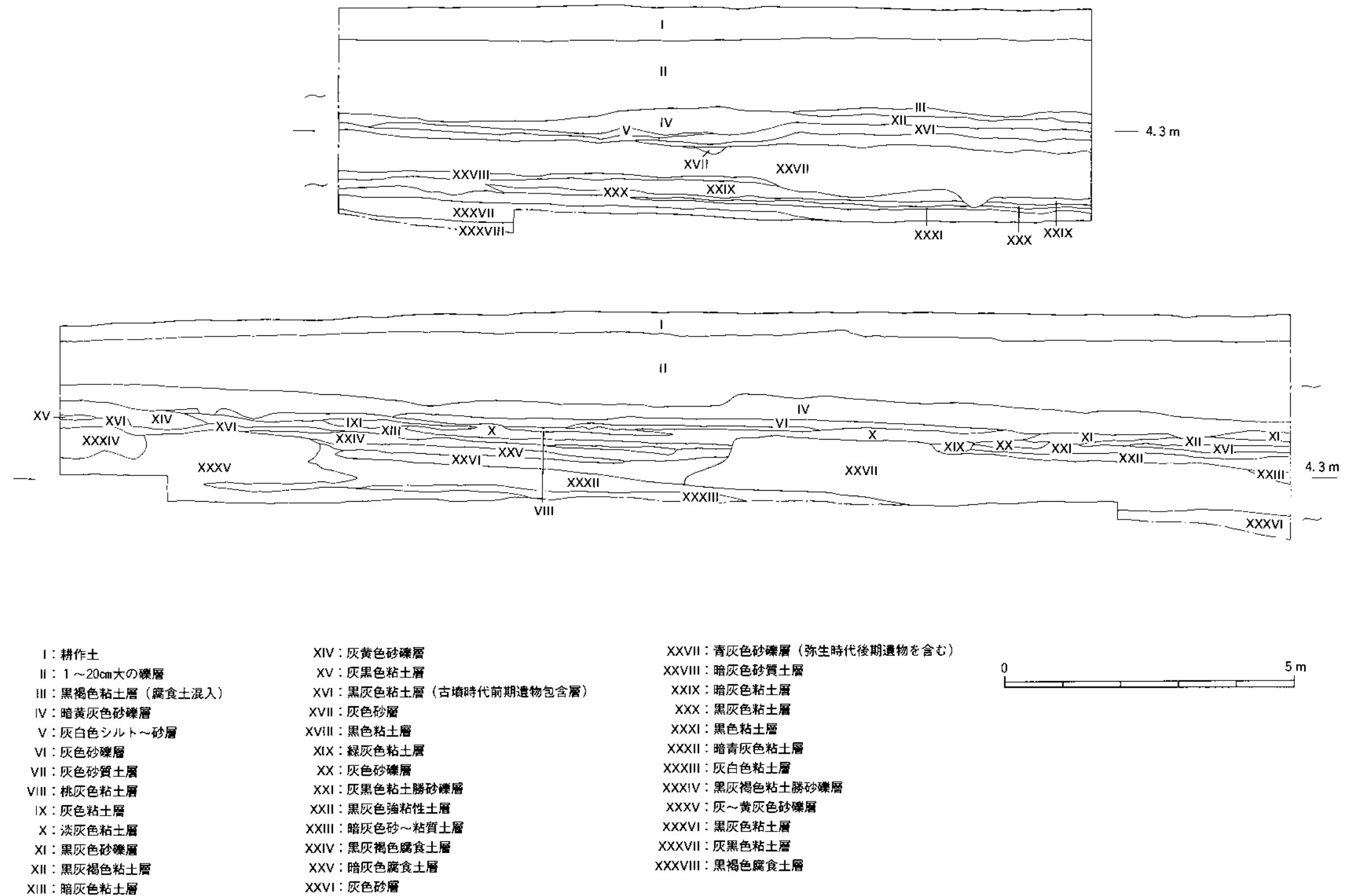


Fig. 36 2区西壁基本層序

(2) 検出遺構

① 杭列1 (Fig. 35)

調査区北隅で検出した。弥生後期の生活面の可能性のある XXIX 層に打ち込まれている。南西方向から北東方向に伸び延長 7 m の区間に 17 本の杭が打たれている。各杭の大きさは直径 5 ～ 7 cm 前後で長さは 70 ～ 80 cm と比較的統一性があり、各杭共に自然木が利用されているが、先端部は鉄刃によって鋭く尖っている。杭列は後述する溝状遺構に並行して打たれており、溝状遺構と関連して機能していたものと考えられるが性格については明確にし難い。

② 杭列2 (Fig. 35)

杭列 1 と同じ面に打たれ、同様の規格の材を用いている。方向はほぼ南北に並び、延長 3 m の区間に 7 本打たれているが、間隔は杭列 1 よりも広い。杭列 2 も溝状遺構に並行する。

③ 溝状遺構 (Fig. 35・37)

調査区の北半に南から北に伸びる延長約 25 m の溝状遺構である。幅 0.6 ～ 2 m、深さ 10 ～ 40 cm を測り最も狭い D - D' 付近が最深を示している。XXIX 層から掘り込まれており、埋土はすべて XXVII 層の洪水砂礫層で埋土中より少量の古墳時代前期土器片が入っている。溝の肩は総じて西壁側が高く東壁側が低い。検出面から見て杭列 1・2 と共に機能した遺構と考えられるが、性格については不明と言わざるを得ない。

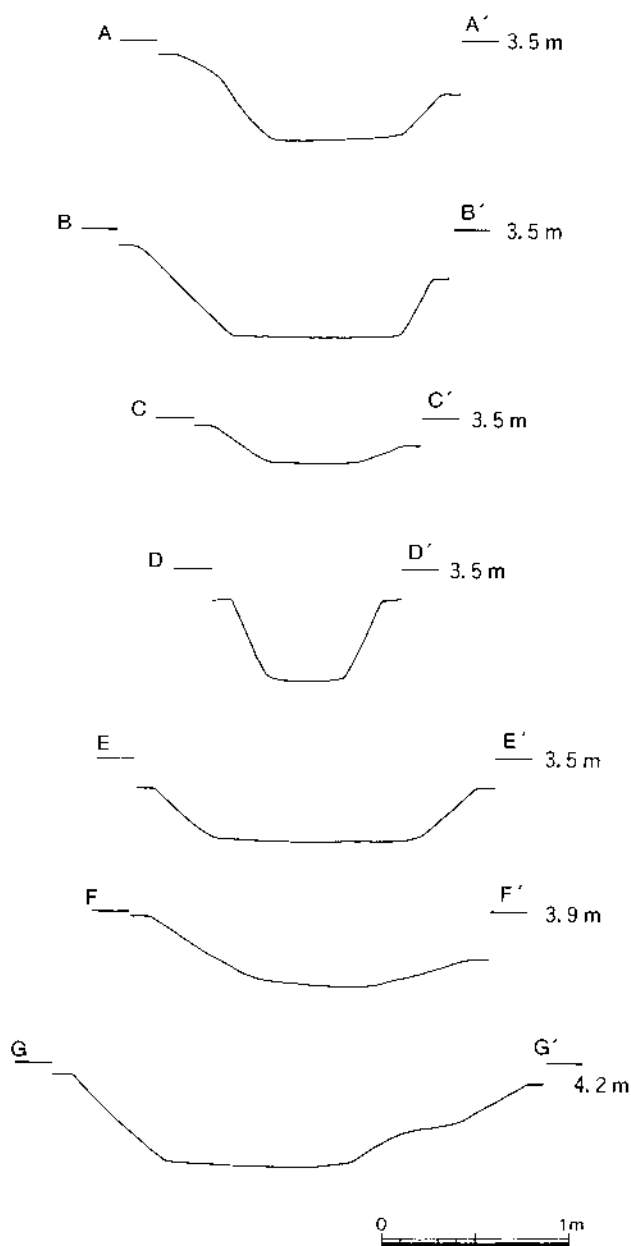


Fig. 37 2区溝状遺構エレベーション

(3) 遺物の出土状況及び出土遺物

① XVI層遺物の出土状況 (Fig. 38)

XVI層は、2区南隅にのみ堆積が認められ、1区のVII層に対応する。図示したように復元完形及びそれに近い状況で原位置を保った状態で出土している。遺物はすべて古墳時代前期に属するが出土状態から西の土器群(152・163・158など)と東の土器群(153・165)に別かれ、その間には土器の出土が認められない。この遺物空白部分はXVI層の基盤となっているXXXV層を切る砂礫層や粘土の互層堆積の上面部にあたる。したがってこの部分はしばしば自然の流路となっていたと考えられる。西の土器群付近にある流木は流路となった時に流れついたものである。

本来、西の土器群は東方に広がりをもち東の土器群と一体をなしていたことが考えられる。1区のVII層の北端が切られたのと全く同じ原因で2区の土器群が流され、空白部分が生じたと結論付けることができる。2区の遺物出土レベルが1区に比べて総じて20cm程低いのは旧地形に規程されたものである。

② XVI層出土の遺物 (Fig. 39・40)

壺：(152・155)の2点出土している。152はやや肩の張った上胴部から直立気味の口縁部が立ち上がる。叩き成形後、外面には丁寧なヘラ磨きが施される。上胴部内面には指頭圧痕が顕著、断面の底部付近、胴部中位、頸部に明瞭な粘土帯接合部を観察することができる。後二者は内傾接合による。胴部外面下半はタール状に炭素が吸着し、光沢を帯びる。平底である。155は、長い胴部を有し、口縁部は内面に稜を生じて直線的に外方に立ち上がる。外面はナデを基調とするが、頸部の付け根付近には接合時の圧痕が明瞭に残っている。内面は指頭圧痕が顕著に認められ、断面は胴部中位・上位に粘土帯接合痕を明瞭にとどめている。粘土帯の幅は6.5cm、内傾接合である。

甕：総じて口縁部の立ち上がりが長い、く字状の屈曲が強いタイプ(154・156・157・163)と外反度の弱いタイプ(153・164・165)がある。両者共に叩き成形に依っているが、口縁部の叩き出しは認められない。154・157は断面に明瞭な粘土帯接合痕跡をとどめ、(157)は叩き目の方向も接合部で明瞭に変化している。154は上胴部が外傾、中・下部は内傾接合によっている。粘土帯の幅は3cm、接合部外面に段を生じる。(157)は上胴部が内傾、中位が外傾を呈し、粘土帯幅は4～5cmである。底部は(161)が丸底である他はすべて平底をとどめている。総じて被熱赤変し煤けが激しい。

高坏：(159・160)の2点が出土している。ゆるやかに外反する口縁部を有するが、1区出土の高坏と同じ作りで口縁部立ち上がりの外面に突帯状の稜線が巡る。両者共外面はヘラ磨きを施し口縁部は丸くおさめる。

鉢：(158)が1点のみ出土している。浅い碗状を呈し内面ヘラ磨き外面ナデ調整。粘土帯接合

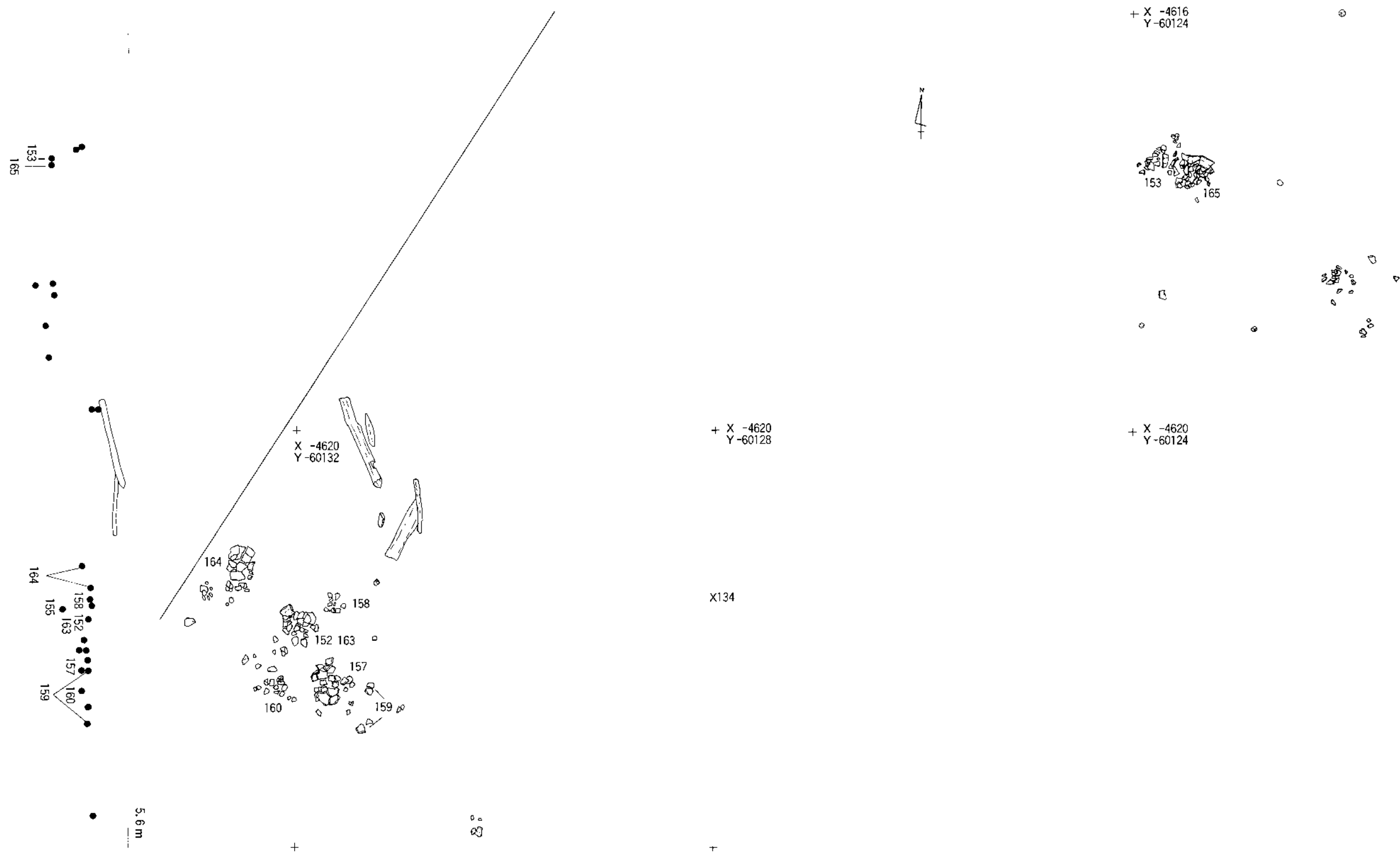


Fig. 38 2区 XVI 層遺物出土状況実測図 (S = 1 / 40)

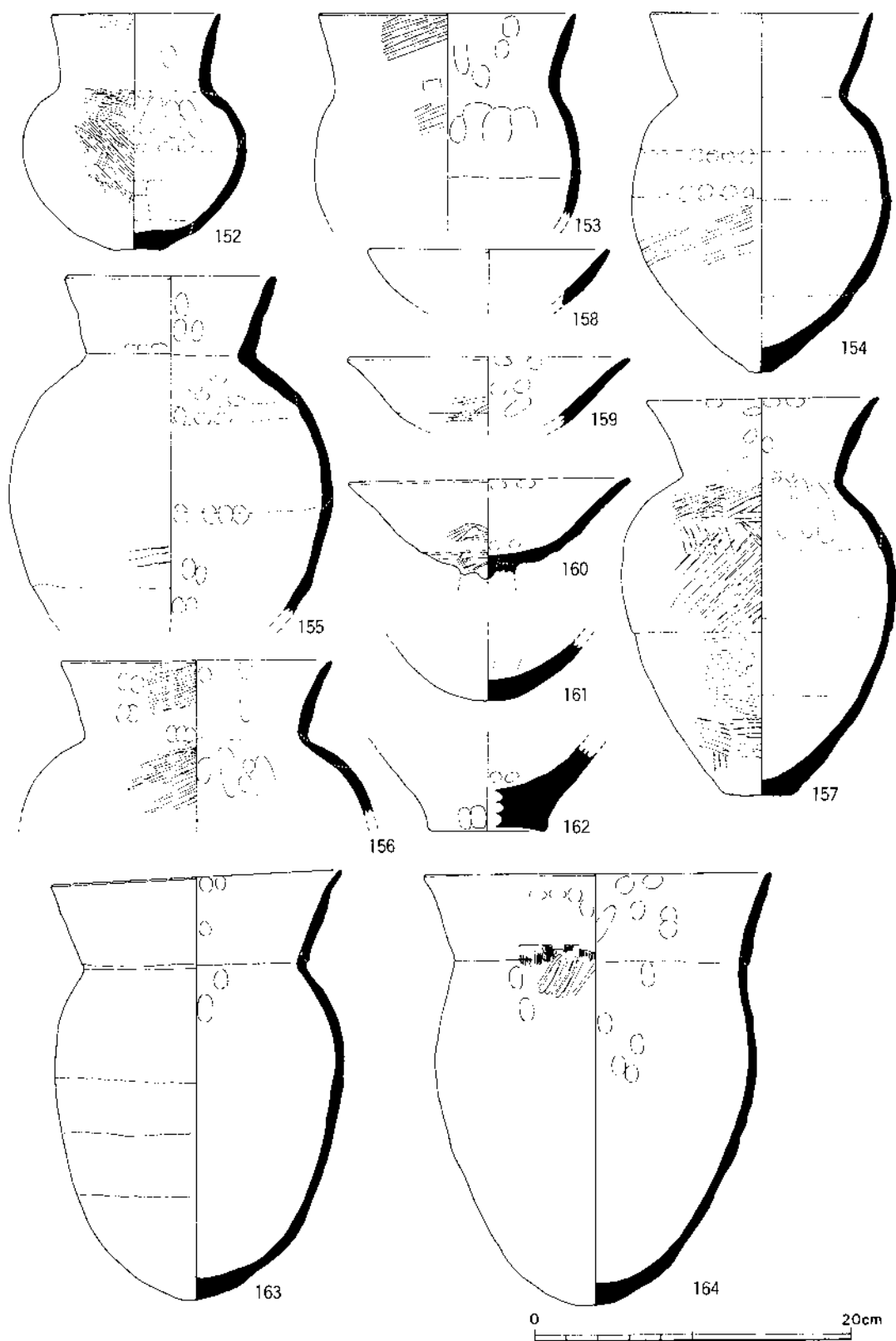


Fig. 39 2区XVI層出土遺物実測図
 壺Ⅰ類(155)・同Ⅱ-B類(152)・甕Ⅰ-A類(154・156・
 157・163)・同Ⅰ-B類(153・164)・同底部(161・162)・
 高杯(159・160)・鉢Ⅱ類(158)

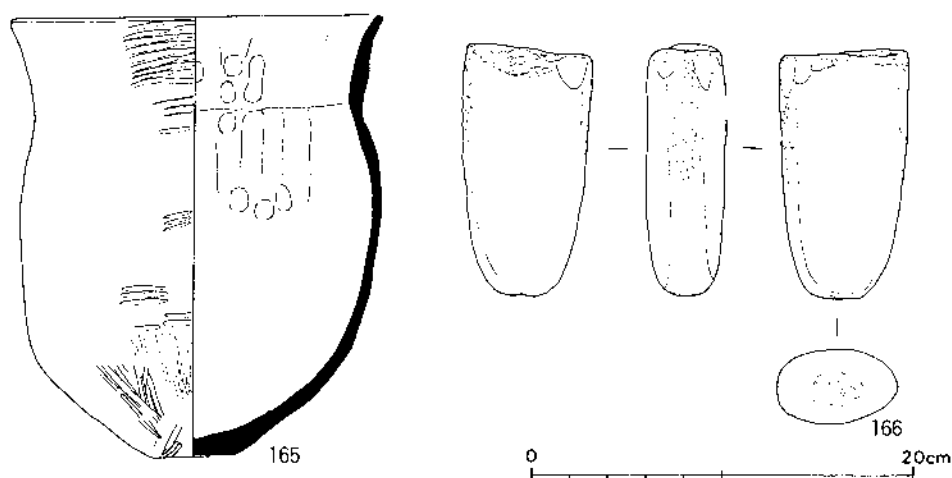


Fig. 40 2区 XVI 層出土遺物実測図
甕 I-B 類(165)・叩石(166)

部で剝離している。

叩石：(166)が1点出土している。棒状の河原石を打割したもので、両側縁及び先端部に敲打痕が認められる。長さ13.1cm、幅6.9cm、厚さ4.0cm、重さ600gを測る。砂岩である。

② XXVII 出土の遺物 (Fig. 41・42)

厚く堆積する洪水砂礫層中からは縄文後期土器1点を含む弥生後期～古墳時代前期土器が出土している。縄文土器はローリングによる磨耗が極めて激しいが、他の土器はほとんど磨耗が認められない。

縄文土器：後期中葉深鉢の口縁部である。(167)口縁部が外方に肥厚、頸部無文の縁帯文土器である。口縁部外面には縄文が施されていたと考えられるが、磨耗のために消えている。片和式土器に属する。

弥生後期～古墳時代前期初の土器

壺：加飾壺の口縁部が2点出土している。169は口縁部外面に双線の山形文と円形浮文を貼付している。171は、二重口縁壺で口縁部外面に2帯の櫛描波状文、頸部に断面長方形の粘土帯を貼付、外面には格子目文を施している。171は安国寺式土器に属する。

甕：XVI 層で顕著であった口縁部が長く立ち上がるタイプは、1点(172)のみで他は短く外反するタイプで占められている(173～179)。172の口縁部の立ち上がりも XVI 層のものに比べれば短い。総じて叩き成形であり、177は口縁部叩き出し手法によっている。170は口縁端部をつまみ出している。搬入品である。底部は、(180)が丸底である以外はすべて平底で(178)は木葉圧痕が認められる。

高坏：坏部の下半が1点(183)出土している。底部からの立ち上がり部外面は稜をなすが、突帯状にはならない。内外面横方向のハケ調整を施す。

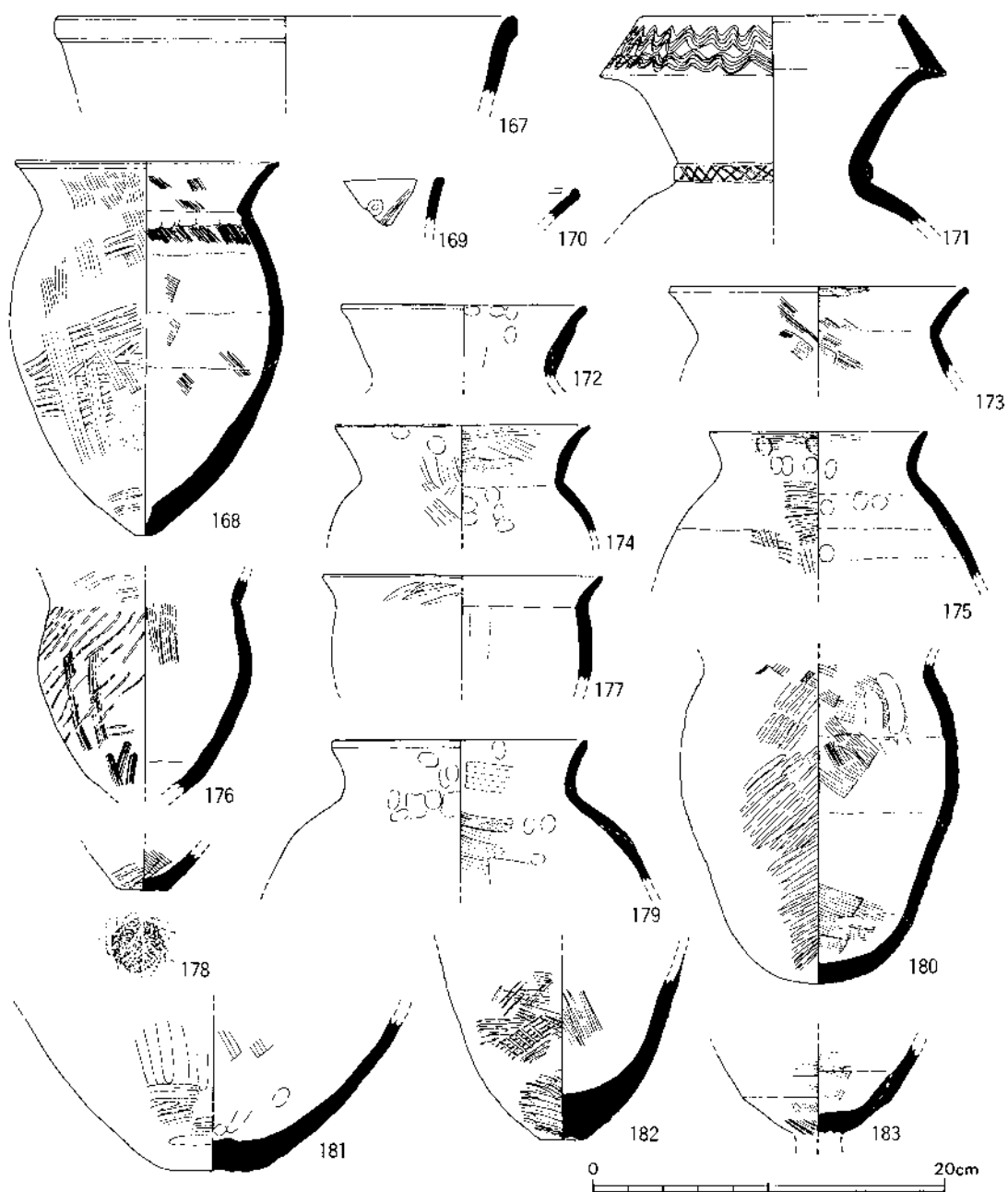


Fig. 41 2区XXVII層及びXXIX層上面出土遺物実測図
(168がXXIX層, 他はXXVII層)

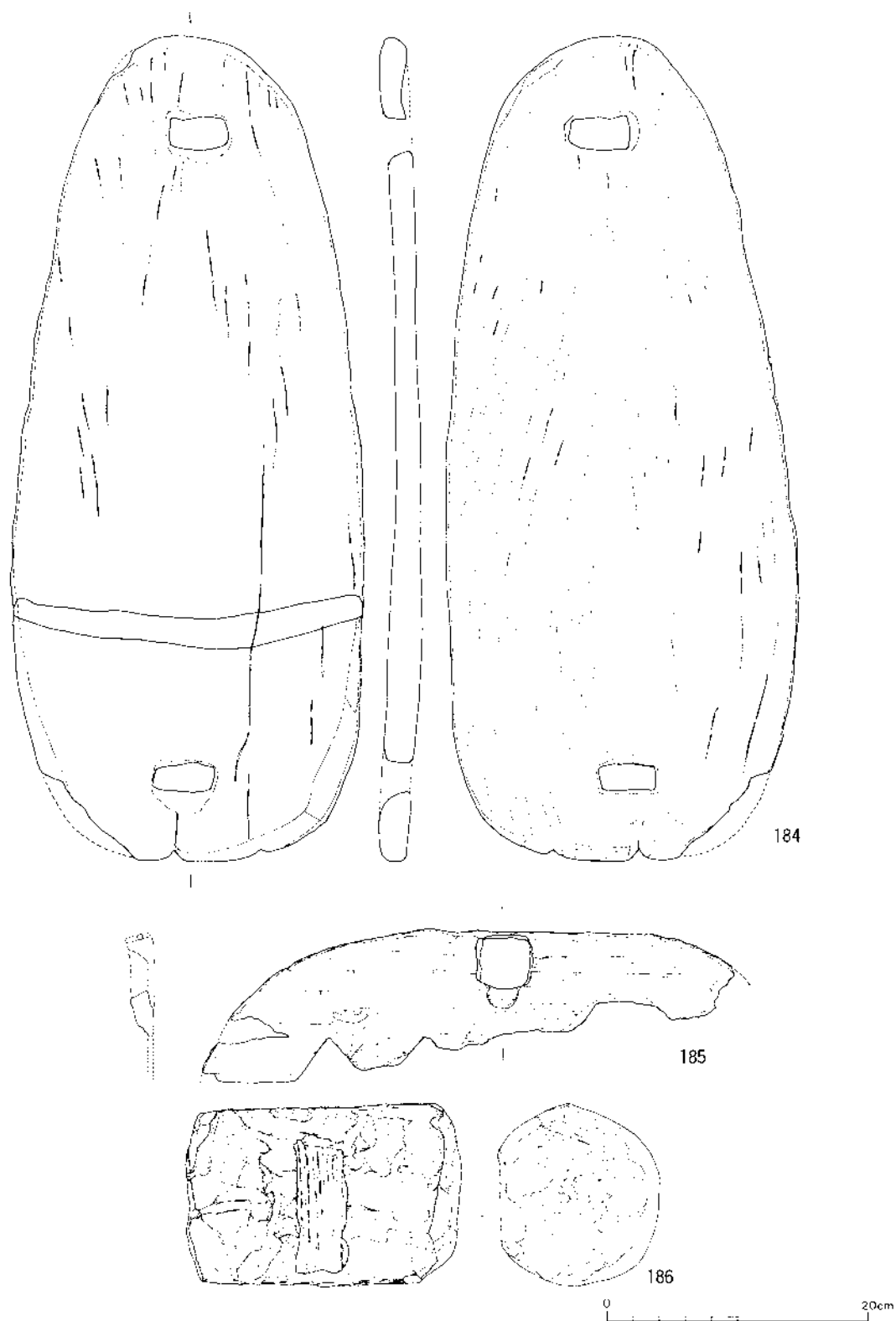


Fig. 42 2区 XXVII 層(186)・XXIX 層上面出土(184・185)の木製品
 両端有孔板状木製品(184)・エブリ状木製品(185)・
 木槌状木製品(186)

木器：槌状の木製品が1点(186)出土している。長さ21cm，径14.2cmを測り，上面に長さ9cm，幅4cm，深さ2cmの方形の抉りが施されている。柄の着装部であろうか，両端面に磨耗痕らしき痕跡が認められるが使用によるものかどうか不明である。ムクノキ製である。

③ XXIX層上面の遺物 (Fig. 35)

弥生後期末の甕(168)と木器2点(184・185)が出土している。(168)の口縁部は内面に稜をなしてく字状に外反，叩き成形であるが口縁部叩き出し手法は用いていない。

木器：両端に方形孔を穿った板状木製品(164)とエブリ状木製品(165)が出土している。前者は，長軸63.6cm，短軸27.0cm，厚さ1.6～2.5cmを測り，わずかに湾曲している。長軸の左右両端に5×2.5～3.0cm前後の方形孔を有す。ヤマゲワ製である。165は，いたみが激しいがエブリ状の木製品であることが判る。刃部長は45cm前後，幅13cm前後を推定することができる。背部は緩やかなカーブを描いて内湾する。背部中央部に4×4cmの方形孔を穿つ。刃部には鋸歯状の刃を作り出しているが本数は不明である。コナラ亜属製である。

第V章 考 察

今次調査は、遺跡が低湿地に立地していることもあって生活遺構の検出は僅少であったが、弥生時代前期後葉及び古墳時代前期の一括性の高い土器資料を得ることができた。両者は、県西部（幡多地域）においては、その実態が十分に把握されていなかったものであり、当地の土器編年及び地域性を理解する上において標式的な資料になるものと考えられる。ここでは、両者について器種別に型式分類を行った上で諸特徴を抽出し、県中・東部との比較検討を通して当該期における幡多地域の土器様相を明かにしたい。

1. 弥生時代前期後葉の土器

(1) 分類

① 壺

主として口縁部形態からⅠ～Ⅳ類に分けることができる。

Ⅰ類：比較的小型で口縁部が強く外反する。内面には横位のヘラミガキが施される。(35・56～58・79) 図示し得なかったものを含めると7点存在する。

Ⅱ類：Ⅰ類に比べて大振りでラッパ状に開く口縁部を有し、口頸部及び口唇に加飾を施す。(59) 図示し得なかったものを含めると3点存在する。

Ⅲ類：口縁部が短く直線的に立ち上がり球形の胴部を有する。(80) 図示し得なかったものを含めると2例存在する。

Ⅳ類：無頸壺で球形の胴部を有し、内外面丁寧なヘラミガキを施す。(60)が1点のみである。

以上壺は、図示し得なかったものも含めて合計13点と極めて僅少である。Ⅰ・Ⅱ類は当該期に最も一般的に見られる広口壺であるが、Ⅰ類内面に施された顕著なヘラミガキやⅡ類の頸部内面の貼付突帯は、県下中・東部ではほとんど認められない手法である。Ⅱ類(59)の口唇部上下の刻目は、中・東部においては中期初頭（Ⅱ期前半）に盛行する手法であり前期末の段階にはほとんど見られない。またⅠ類(35)やⅣ類の「黒色磨研」仕上げも当該期の中・東部の土器中には類例を認めることができない。西部の特徴であろうか。その系譜と共に今後追求していかなければならない。

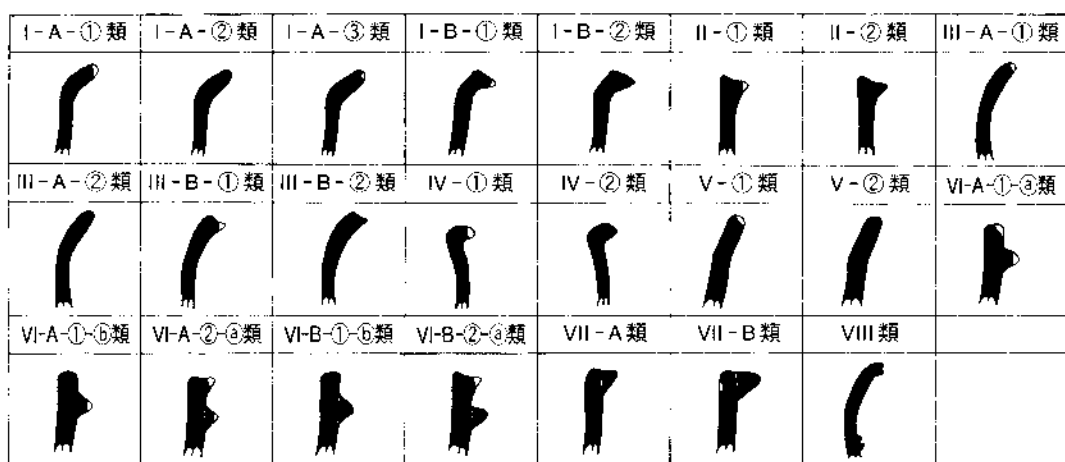


Fig. 43 麁の型態分類

② 麁

器種組成の中で9割以上を占めている。II縁部の形態、突帯の有無やその位置などによってI～VIII類に大別できるが、細部の諸特徴から更に細分が可能である。

I類：いわゆる如意状に外反するII縁部を有するものである。II縁端部を丸くおさめるA類と端部をつまみ出して横方向に強くナデるB類があり、両者共に端部を刻む①類、無刻みの②類がある。更にI-A類にはII唇部に沈線を施す③類も少量ながら存在する。I-A-①類には32・71・74・87・88・90・93が、I-A-②類には39・65・69・75・76・78が、I-A-③類には47が、I-B-①類には38・40・41・50・51・68・82・85・86・89・91が、I-B-②類には67・94が該当する。

II類：II縁部が直立気味に立ち上がる形態で、端部は総じて外方に摘み出し横

大別	細 分 類		
Ⅰ	A	①22点(57.9)	38点 (40)
		②15点(39.5)	
		③1点(2.6)	
	B	①47点(82.5)	57点 (60)
②10点(17.5)		95点 (51.6)	
Ⅱ		①21点(67.7)	31点
		②10点(32.3)	(16.8)
Ⅲ	A	①3点(42.9)	7点
		②4点(57.1)	(53.8)
	B	①3点(50.0)	6点
		②3点(50.0)	(46.2)
Ⅳ		①1点(33.3)	13点
		②2点(66.7)	(7.8)
Ⅴ		①1点(50.0)	3点
		②1点(50.0)	(1.6)
Ⅵ	A	①—㉔1点(7.1)	2点
		①—㉔2点(14.3)	(1.0)
		②—㉔6点(42.9)	
		細分不可能のA	14点
		5点(35.7)	(82.4)
	B	①—㉔2点(66.7)	3点
②—㉔1点(33.3)		(17.6)	
Ⅶ	A	4点(30.8)	17点
	B	9点(69.2)	(9.2)
Ⅷ			13点
			(7.0)
Ⅸ			10点
			(5.4)

表4 麁分類別比率 ()は%

方向に強くナデる。端部を刻むⅡ－①類と無刻みのⅡ－②類がある。前者には66・70・83・92が該当するが、後者には図示可能な資料がない。

Ⅲ類：口縁部が大きなカーブを描いて外反するタイプであり全体の7.8%を占める。Ⅰ類と同様に口縁端部を丸くおさめるⅢ類と摘み出して横方向にナデるⅢ類があり、更に両者共刻目を施す①類と無刻みの②類に細分することができる。Ⅲ－Ⅲ－①類には22・23・81がⅢ－Ⅲ－②類には77が、Ⅲ－Ⅲ－①類には84が、Ⅲ－Ⅲ－②類には46がそれぞれ該当する。

Ⅳ類：わずかに脹らんだ上腹部から口縁部が短く外反するタイプである。端部に刻目を施す①類と無刻みの②類からなる。両者共図示可能なものはない。

Ⅴ類：口縁部がわずかに外方に屈曲し直線的に立ち上がるタイプで、端部に刻目を施す①類と無刻みの②類からなる。両者共に端部は丸くおさめる。図示可能なものはない。

Ⅵ類：口縁部の下に突帯を有するタイプである。刻目突帯を有するⅥ類と無刻目突帯を有するⅥ類に、口縁端部を丸くおさめる①類と端部を摘み出す②類に、更に端部に刻目を施す③類と無刻みの④類に細分することが可能である。Ⅵ－Ⅵ－①－③類には28が、Ⅵ－Ⅵ－②－④類には29・30・42・61・96が、Ⅵ－Ⅵ－①－④類には97・98が、Ⅵ－Ⅵ－②－③類には53が該当する。この他に口縁部が欠損し細分不可能なⅥ－Ⅵ類が5点ある。

Ⅶ類：口縁部外面に接して突帯を貼付するタイプで、刻目の施されるⅦ類と無刻みのⅦ類からなっている。Ⅶ－Ⅶ類は図示し得るものがないが、Ⅶ－Ⅶ類は43・52・95が該当する。Ⅶ－Ⅶ類には、25・95など9例のうち4例が口縁内面に沈線を有する。

Ⅷ類：全体のプロポーションはⅢ類に似ているが、総じて器壁が薄く他の甕に比べて焼成堅緻で胎土も異なっている。口縁及び上腹部外面に微隆起帯を貼付する。25・33・99が該当する。

③ 鉢

Ⅰ類：如意状に外反する口縁部の下に刻目突帯を貼付するタイプで、24・34・62が該当する。前者は口縁端部に刻目を施すが、62は無刻みである。

Ⅱ類：直線的に立ち上がる口縁部を有し突帯はもたない。90が該当する。

(2) 考察

以上壺・甕・鉢について型式分類を行った。以下この分類にもとづいて、県中東部や他県の資料との比較検討も行いながら西ノ谷遺跡出土土器の特徴について考察を進めたい。

① 器種組成

壺・甕・鉢からなり高坏は認められない。図示し得なかったものも含めると壺13点（6.5%）、甕184点（91.5%）、鉢4点（2.0%）であり、甕が実に9割以上を占める。ここに西ノ谷遺跡の器種組成上の最大の特徴がある。県西部（南四国西部）において当該期の比較可能な資料が存在しないが、後述の諸要素から考えて、甕が極端に多いという今次調査結果は県西部の傾向として一般化することが可能である。県中央部の高知平野では前期上器（I期）が1～4期に編年されており、西ノ谷遺跡の土器群は高知平野のI期～4に併行関係を求めることができる。高知平野の中央部に位置し南四国最大の拠点集落である田村遺跡群においては、前期初・中葉のI期～1～3の土器組成は甕が最も多くを占め全体の6～7割で推移するが、前期末のI期～4になると壺と甕の比率が逆転し、壺が65%・甕が34%となる⁽¹⁾。また高知平野東端に位置する前期末の遺跡である下分遠崎遺跡⁽²⁾においては、壺が3割、甕が6割と甕が多いが、西ノ谷遺跡ほどではない。後述するように県西部は、県中央部と比べて弥生上器の形成過程が異なっているが、様式構造にも大きな違いがあるとなしければならない。

② 壺

I、II類は当該期に最も一般的にみられる広口壺であるが、I類の内面に施された顕著なヘラミガキやII類の頸部内面の貼付突帯（59）は、県中・東部ではほとんど認められない手法である。後者は西部瀬戸内の影響であろうか。またII類（59）の口唇部上下の刻目は、県中・東部においては中期前葉（II期）に盛行する手法であり前期末の段階にはほとんど見られない。I類（35）やIV類（60）の「黒色磨研」仕上げも当該期の県中・東部には類例を認めることができない。県西部の特徴であろうか。口縁断面三角形、上面が平坦面をなす無頸壺（60）は県下では出土例を見ない。大分県下郡遺跡 SH 02⁽³⁾出土土器の中に類似相がある。また県中・東部ではこの時期から長頸の壺が登場するが、ここでは見られない。

③ 甕

如意状口縁を有するI類が最も多く51.6%をしめている。この比率は田村遺跡群や下分遠崎遺跡と大差がないが、I類に現われた口唇部形態や文様構成などには顕著な差異が認められる。まず口唇部の形態では端部を摘み出して強く横にナデるB類がA類を凌駕しているが、当該期の県中・東部ではB類はほとんど存在しない。B類と類似相の口唇部はI～I期、すなわち高知平野前期初頭の遠賀川式土器と縄文晩期系の突帯文土器が共存する時期のバリエーションの中に存在するのみである。B類口縁端部の摘み出し横ナデは、突帯の横ナデ技法がそのまま口唇

部に移行したものである。前期後葉に発現したB類の口唇形態は、後述する突帯文土器の成形・調整技法に規定された現象として理解することができる。またA・B類共に刻目を施す例が多数を占めているが、この口唇刻目文の有無と上胴部に施されるヘラ描沈線との対応関係を観察したところ興味ある傾向を示していることが明らかとなった。すなわちI-A-①類（有刻）では観察可能な19点の資料のうち11点（57.9%）にヘラ描沈線が施されるのに対して、I-A-②類（無刻）では15点のうち僅かに1例に施されるのみである。B類についても同様の結果を得ている。I-B-②類42点中32点（76.2%）にヘラ描沈線が施されるのに対して、I-B-①類は7点のうち1点施されるにすぎない。I類ではA・B類共に刻目施文とヘラ描沈線とは密接な対応関係にあることが窺える。II類は16.8%に過ぎないが、I類に次いで多くを占めている。県中央部では見られないタイプである。口唇部の刻目の有無は、概ね2：1の割合で刻目を施すものが多い。ヘラ描沈線との対応関係ではI類以上に顕著な結果が出ている。すなわちII-①類（有刻）21点中14例にヘラ描沈線が施されるのに対してII-②類（無刻）には全く施されない。III類は7.8%と少数であるが、高知平野においてはI類に次いで多いタイプであり、田村遺跡群 Loc 10で37.1%、下分遠崎遺跡で43.2%を占めており、中期に盛行する土佐型甕⁽⁴⁾の相型となるものである。III類は4型式に細分されるが、上胴部に沈線を有するものはやはり口唇部に刻目を施される個体に限られている。IV・V類は、1.6%、1.0%と極少数派である。VI類は9.2%と一割に満たないが三番目に多いタイプである。II類と共に当該期の高知平野には全く認められないタイプであり、今次調査によってその存在が初めて明らかとなった。刻目突帯を有するA類と無刻み突帯のB類とに分かれさらに細分されるが、口唇部の刻目はA類に多くB類に少ない。本類は、完形品に貧しいが総じて深鉢形を呈し、上胴部で内側に屈曲して立ち上がる29・53及び直立する61を除くと、上胴部から口縁部に向かってゆるやかに内湾しながら立ち上がる器形を有する。また1例であるが42のように弱い波状口縁を有するものも存在する。上胴部にヘラ描沈線が全く見られないのも本類の特徴である。本類は、後述するように縄文晩期の刻目突帯の系譜を継ぎ大分県を中心に盛行を見せる下城式土器の範疇に位置付けられるべきものである。VI類の存在は、弥生文化成立・発展期において、県西部が高知平野を中心とする県中央部とは大きく異なった展開をしていた左証となろう。VII類も7.0%と少数派である。刻目を有するA類4例のうち3例にヘラ描沈線が見られ、無刻みのB類9例中の4例にまで口縁部内面に沈線が認められる。本類は県中央部にも少数存在するが、ほとんどがA類であり、内面に沈線を有する例は全くない。B類の内面沈線は、入田B式に比較的多く認められ、そこからの系譜が考えられる。VIII類は5.4%を占める。本類は、県中央部よりも「西の地方から生まれたもの」⁽⁵⁾とされる「薄手式土器」⁽⁶⁾に属するものである。田村遺跡群や下分遠崎遺跡においては1%未満に過ぎないが、県中央部でも西寄りの山根遺跡では30%強を占めており、更に西方の新莊川流域の永野遺跡⁽⁷⁾では土器の大半を占めている。また西ノ谷遺跡の周辺では、入田遺跡・有岡遺跡などからも出土しており、比率は県中央部よ

りも高い。

次に甕の成形手法や器面調整、文様について触れたい。VIII 類を除くと県中央部の土器に比して総じて器壁・底部がやや厚く作られている。底部外面に網代状圧痕をもつ38・81と席状圧痕をもつ86があるが、この種の圧痕は県中央部では全く見られないものである。後川流域の安並遺跡出土の底部にも網代状圧痕を有する例が見られるところから県西部の特徴として把握してよかろう。成形手法についてはルーペを用いてかなり丹念な断面観察を行ったが、接合方法や粘土の単位が把握できたものは極めて少数例に過ぎない。接合方法においては、外傾接合と内傾接合の両者が認められ、前者に属する例は41・42・44・51・61・66・67・72・89・91・93を挙げることができ、後者については28・38・53である。すでに周知のように外傾接合は、縄文土器成形手法の伝統にはないものであり、輪積技法と共に韓国無文土器が弥生文化成立期の日本に影響を与えたものである。⁽⁸⁾そしてこの手法の特徴は粘土帯の接合面の幅が広いことにある。先に挙げた外傾接合を示す11例中粘土の単位がある程度明確に観察できるものは41・42・89・94であり、41が約2cm、42・94が約4cm、89が約1.5cmの幅を示している。41・89は粘土帯というよりもむしろ粘土紐に近いものであり、外傾接合法を採用しているが粘土帯輪積みであるかどうか疑わしい。42・94は輪積みと考えるとよいかも知れない。内傾接合を有する28の粘土の単位幅は約1cm、38は2.5cmを測る。成形手法の明確な例が僅かであることから結論付けはできないが、I類(38・41・51・67・89・91・94)とした遠賀川式土器にも、VI類(28・42・53)とした典型的な縄文晩期系の土器にも両手法が見られる。このことは当該期、西ノ谷遺跡においては、各々の甕の系譜とは無関係に両方の成形手法が用いられていたことになる。県中央部においては前期初頭以来一貫して外傾接合が用いられていたが、前期末に到って内傾接合法が復活する。このことと西ノ谷遺跡の現象とが軌を一にするものなのか、それとも伝統的に内傾接合法が存続していたのか、県西部における弥生土器の成立と展開を明らかにするうえで注目すべき問題である。今後資料の増加をまって検討したい。

文様は、I・II・III・VII類にヘラによる多条沈線、あるいは多条沈線+列点文が認められる。これらの文様は当該期の瀬戸内・南四国に一般的に見られるものであるが、県中央部に比べると列点文の施文される頻度がかなり高い。また県中央部では半截竹管状原体による双線や浮文・山形文など多種の文様が施されるのに対して西ノ谷遺跡では文様の組み合わせが単純であることも指摘することができる。甕の中で胴部文様を有するものは65点であり、全体(184点)の35.3%に過ぎない。この比率は県中央部に比べるとはるかに低い。このことは県西部が県中央部に比べると本来胴部文様を施すことが少ない地域であったことを示している。下城式土器に類似するVI類においては全く胴部文様が認められない。更に興味深い現象は、すでに触れたように口唇部刻目の有無と胴部文様の有無との対応関係が明らかになったことである。I～III類をトータルに見ると観察可能な有刻土器88点のうち60点(68.2%)にヘラ描沈線が認められるのに対して、無刻土器は19点のうち僅かに2点(10.5%)しかヘラ描沈線が認められ

ない。このような現象は高知平野においても指摘できるが、西ノ谷遺跡ほどには顕在化していない。概ね2:1程度である。このことは本来胴部文様を施すことの少ない県西部においては、口唇刻目とヘラ描沈線という2つの属性が密接に関連して展開していることを示している。

最後に器面調整について見ることにする。VIII類を除いて、外面はほとんど木理の荒いハケ調整をタテ方向に施すことを基調とする。しかしIII類は、46・77のように頸部外面をヨコ方向に調整するものや、22・23のように頸部と胴部で調整の方向が異なる例がある。内面はナデ調整の例が多いが、口縁部については水平あるいは斜め方向のハケ調整を施すものも多く見られる。後者の場合は右下りが圧倒的に多い。また41・68・69・75のようにヨコ方向のヘラミガキを施すものも見られる。VIII類は内・外面共に例外なくナデ調整であり、高知平野の同類のものと一致する。

④ 鉢

出上例が4点と最も少い器種であるが、このうち3点が刻目突帯を有するI類である。このようなタイプの鉢は、当該期の高知平野には存在しない。類例を大分県の下郡桑苗遺跡⁽⁹⁾などに求めることが可能で、莖IV類と共に下城式土器の影響下で成立した県西部独特のタイプとして位置付けなければならない。

註

- (1) 出原恵三「弥生時代前期小結」『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田村遺跡群』第3分冊 高知県教育委員会 1986年
- (2) 高橋啓明・出原恵三『下分遠崎遺跡(1)』高知県香我美町教育委員会 1989年
- (3) 讃岐和夫「C-1・4区の調査」『下郡遺跡群』大分県教育委員会 1990年
- (4) 出原恵三「〈土佐型〉甕の提唱とその意義」『遺跡』第32号 遺跡発行会 1990年
- (5) 岡本健児「弥生土器—四国2—」『考古学ジャーナル』89 ニューサイエンス社 1973年
- (6) 出原恵三「〈藤手土器〉の展開とその意義」『南国史談』第7号 南国史談会 1989年
- (7) 岡本健児「永野遺跡出土の弥生時代の遺物について」『高知県葉山村埋蔵文化財発掘調査報告書』葉山村教育委員会 1984年
- (8) 高橋護「遠賀川式土器」『弥生文化の研究』第4巻 雄山閣 1987年
- (9) 高橋信武他『下郡桑苗遺跡II』大分県教育委員会 1992年

2. 西ノ谷遺跡出土弥生前期後葉土器の位置付け

前項においてSK 1・2 及び XII 層出土の一括土器について、器種毎に形態分類を行い諸特徴の抽出を行った。その結果器種組成や特に甕の展開については、県中央部との顕著な違いが明

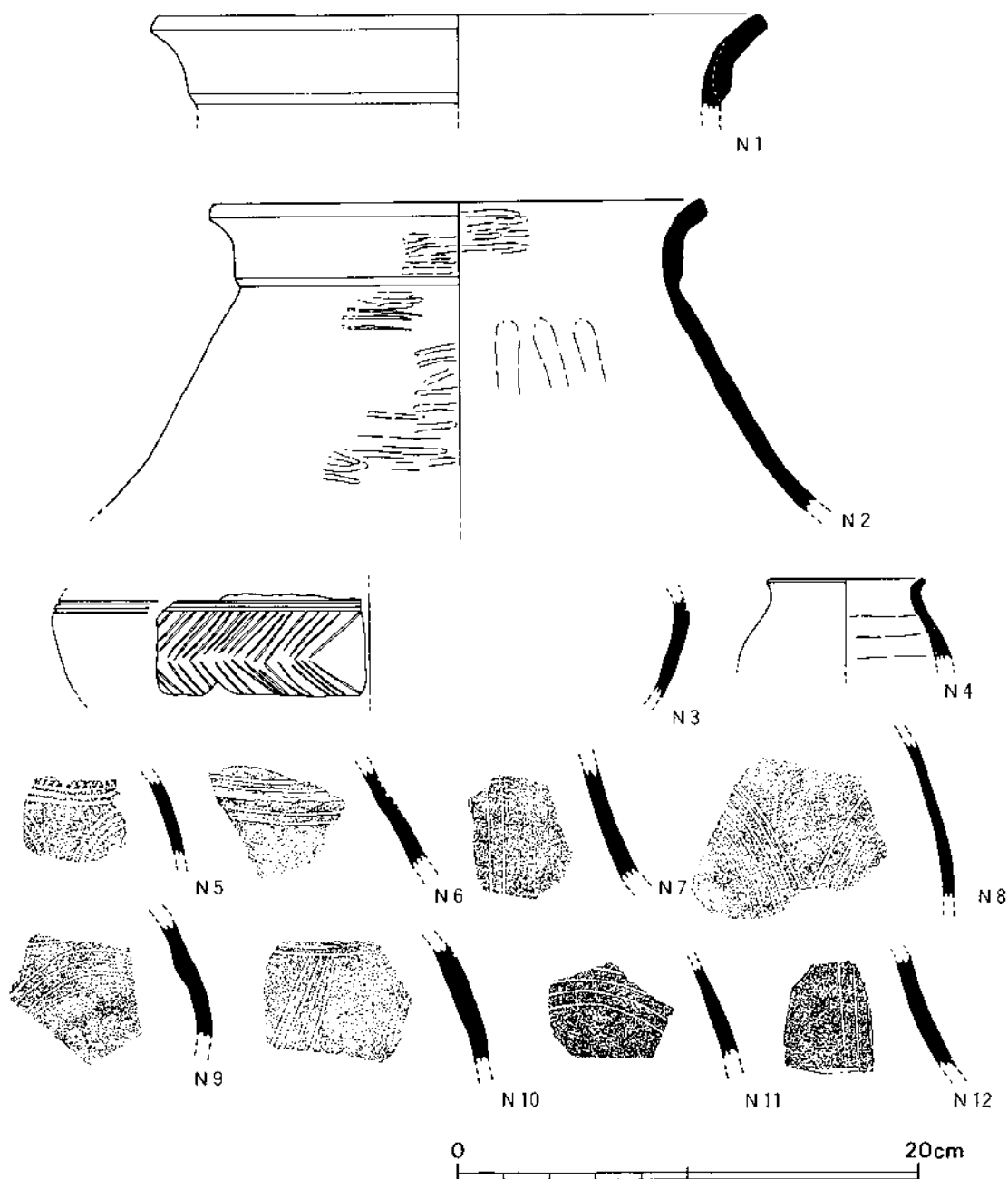


Fig. 44 入田遺跡出土土壺実測図

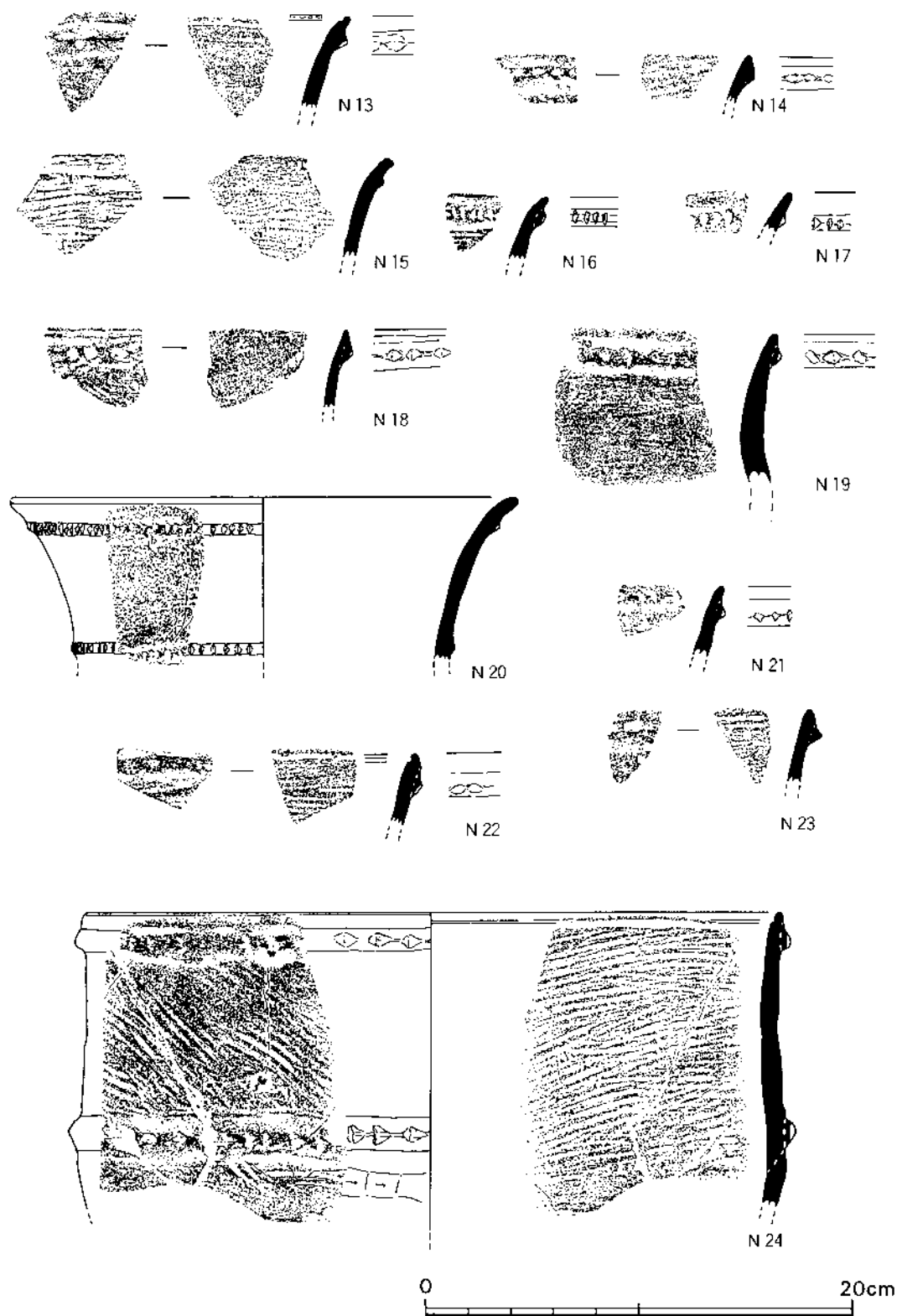


Fig. 45 入田遺跡出土深鉢実測図

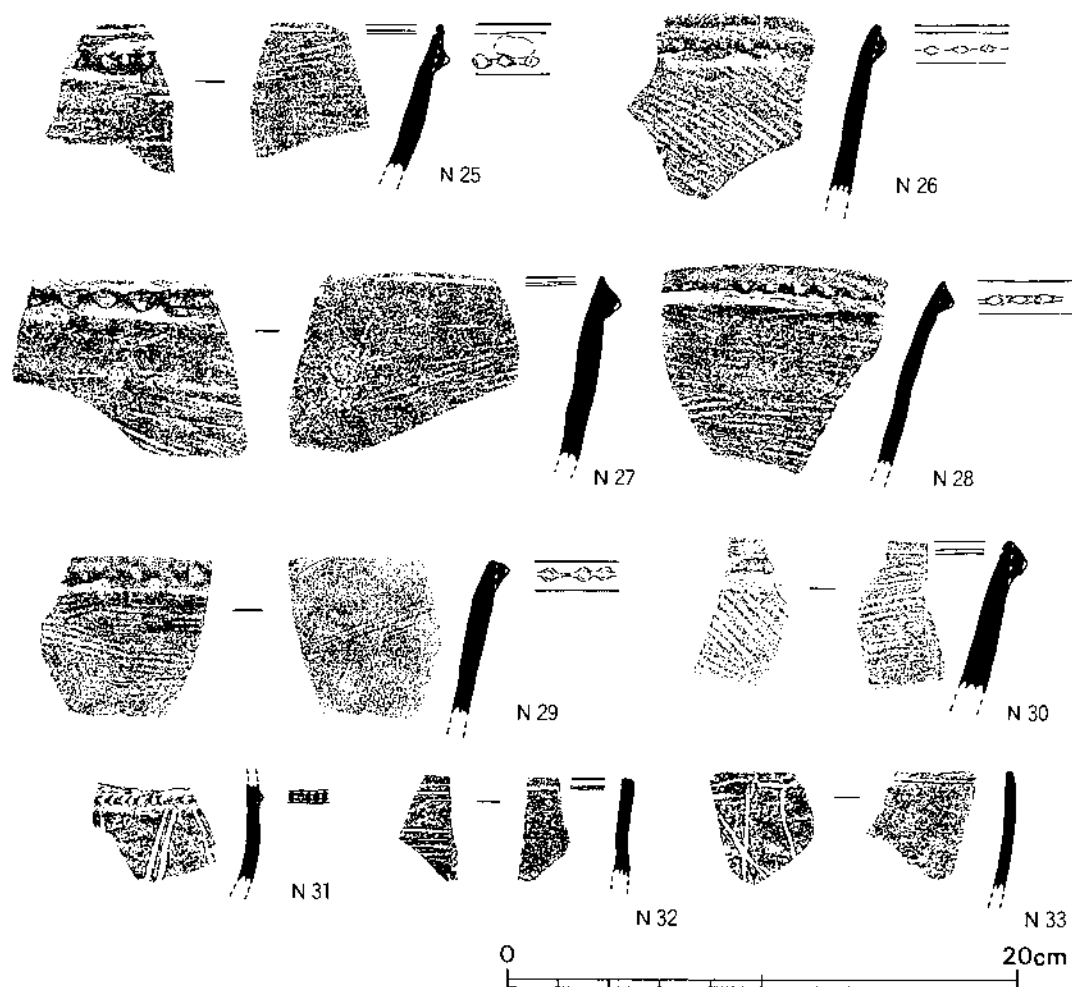


Fig. 46 入田遺跡出土深鉢実測図

らかとなり、また東九州との類似相の摘出など県西部における前期弥生土器の展開を知る上で注目すべきいくつかの事実が明らかとなった。ここでは前項の検討結果をもとに、最も出土量が多く且つバリエーションに富む甕について、西南四国における弥生文化の成立と発展というよりトータルな視点から検討するものである。甕の特徴を際立たせている刻目突帯（Ⅵ類）や多くのタイプに見られる口唇部摘み出し、更に刻目とヘラ描沈線との相関関係などは、先行型式との比較を通して、より鮮明な当地域の特色として把握することができるのである。しかしながら当遺跡周辺は勿論、県西部においては前期後葉に先行する中葉の資料が皆無である。従ってまず当地域における縄文晩期末の遺跡として著名な入田遺跡出土の土器を検討材料としたい。

(1) 入田遺跡出土の土器

入田遺跡は、西ノ谷遺跡の東方約4kmの四万十川右岸にあり、1935年治水工事の際に発見され、その後1950年岡本健児・上岡正五郎氏らによって小発掘調査が行われ、1952年には日本考古学協会弥生式土器文化総合研究特別委員会と高知県教育委員会による合同調査が実施されている。これらの成果については、岡本氏による「土佐入田遺跡調査概報⁽¹⁾」や『日本農耕文化の生成⁽²⁾』に詳しく述べられている。すでに周知のように入田遺跡の調査で最も注目されたことは縄文晩期末の刻目突帯を貼付した条痕文土器と遠賀川式土器が伴出したことである。岡本氏は両者を同時期の所産であると認め、前者については南四国における「末期縄文式系統の条痕文土器」とし、後者については「新来の土器群」として弥生前期に属する入田Ⅰ式土器として型式設定を行った。そして時間的位置付けについては、「入田Ⅰ式土器は型式論からみれば板付式土器系統の古い様相を示して」いることを認めつつも「弥生時代前期の第二の段階」として位置付けられた。その後岡本氏は研究の進展の中で前者を入田B式土器として「南四国西部における弥生文化初頭の弥生土器に伴って発見される縄文系土器と定義⁽³⁾」し、「入田B式と入田Ⅰ式の伴出という事実は、後進地域での現象として把握するか、または入田Ⅰ式が室本式・持田式よりも古い段階の土器なるがゆえの現象と把握するののかの問題である。⁽³⁾」とされた。その後県中央部で田村遺跡群など良好な前期初頭の資料が増加し、中村市においても入田Ⅰ式を伴出しない入田B式が単独で出土する有岡遺跡（有岡B式土器⁽⁴⁾）などが明らかになってくるなかで、有岡B式土器を「板付Ⅰ式（古）併行」に比定し、入田B・Ⅰ式土器についての時間的位置付けについては、必ずしも明確に示されていない⁽⁵⁾。

一方、木村剛朗氏は、入田B式土器の深鉢に見られる諸属性について詳細な検討を加え、その出自や展開について論じ、入田B式土器が「九州地方との親近な関係を葆ちつつ、一方、瀬戸内文化を吸収し発展盛行」したものと位置付け、県中央部の様相とは大きく異なった展開を示していると分布論に言及されている⁽⁶⁾。

入田B式土器や入田Ⅰ式土器の編年的位置付けや分布論についての検討は、西日本各地において当該期の資料が増加しつつある今日、南四国における弥生文化の成立を考える上で急務な課題の一つである。しかしここではその問題については深入りをせず、西ノ谷遺跡出土の前期後葉の土器の位置付けにかかわる点について触れることにしたい。ただ入田B式土器と入田Ⅰ式土器という全く異質な土器の共存現象は、県中央部の田村遺跡の前期初頭（田村前期Ⅰ）では全く認められない現象であり、田村前期Ⅰに比して入田B式が古くなる根拠とはならないと考えている。

Fig 44～46は、筆者が現在実見し得る土器を図化したものである。上述の岡本氏や木村氏の報告、論文掲載資料と重複するものもあれば、欠けるものもある。

入田B式土器

深鉢（Fig 45・46-N13～31） 入田遺跡の中で最も多くを占める。刻目突帯の深鉢・無刻

突帯の深鉢、粗製深鉢からなるが、1～2条の刻目突帯深鉢が多い。ただ細片である場合は、1条か2条かを判別することが難しい場合もある。主体を占める刻目突帯文深鉢は、口頸部の形態からいくつかのバリエーションが認められる。1類：上胴部でわずかに内傾して立ち上がるもの（N24）。これは2条突帯を有す。2類：口頸部が外方に直線的に立ちあがるもの（N21～23・N26～29）。3類：口縁部が直立、あるいは内湾するもの（N25）。4類：口縁部が外反するもの（N13・16・18・19・31）。上胴部で内傾する1類は、入田B式に先行する中村Ⅱ式からの系譜上に位置付けることができるタイプであり、外反する4類は瀬戸内的な特徴とすべきもので入田B式土器の段階になって認められる新たな動きとして注目しなければならない。更に1～4類の口縁部内面には、沈線の施される例（N13・22・24・25など）が見られる。この種の沈線は、瀬戸内の沢田式⁽⁷⁾や津島岡大遺跡⁽⁸⁾の資料に類例を求めることができるもので、当該期瀬戸内からの影響が顕著であったことを示している。

無刻突帯（N15）は、中村Ⅰ式土器の系譜上に付らなるものであるが、当該期のものは突帯の退化が著しく微隆起帯状を呈している。

壺は、（Fig 44-N4）の小型壺の他に浅鉢から変容⁽⁹⁾したことが考えられるやや大振りのものが1点出土している。浅鉢は、碗状を呈する単純なものが1点認められる。入田B式土器成立の背景には、これまでの九州的な要素から瀬戸内的な要素への転換があったものと考えられる。入田B式土器の時間的な位置付けや、他地域の土器型式との併行関係を現段階において確定することは難しいが、浅鉢のあり方を一つの指標とすれば、沢田式よりも後出することが考えられる。

入田Ⅰ式土器

壺（Fig 44-N1～3・N5～12） N1・2は、有段部をもち段部から一旦垂直に立ち上がり、端部近くで外反する特徴は、田村前期Ⅰの壺A-1類と酷似する⁽¹⁰⁾。成形手法は、粘土帯輪積による外傾接合であり、段部も粘土接合時に生じたものである。N3・5～12は胴部片で、重弧文複線山形文・無軸羽状文が見られる。N5を除いて沈線の原体は細く、田村前期Ⅰに共通する。

甕は、図示し得なかった。『日本農耕文化の生成』には、遠賀川式土器が2点掲載されている。壺に対して甕の比率は極めて少ない。田村前期Ⅰは、遠賀川式土器として型式が確立する前の、いわば型式の移行期の特徴を示しているのに対して、入田Ⅰ式土器は、一見して判るように斉一性をもった型式として確立した段階の土器として位置付けることができる。従って入田Ⅰ式は、田村前期Ⅰに後出すると考えなければならない。入田Ⅰ式土器は遠賀川式土器の古い段階に属するものであることには違いないが、入田B式土器との関係においては、遠賀川式土器の生成地帯の周辺部で生じた「二重構造⁽¹¹⁾」として理解しなければならない。この二重構造が、入田Ⅰ式土器以降の土器のあり方にどのような影響を与えて行くのか、西ノ谷遺跡の前期後葉の土器の中にそのあり方を見ることにする。

(2) 西ノ谷遺跡出土の前期後葉甕形土器の位置付け

さて、筆者はかつて弥生前期末に至ると各地域において個有の特徴をもった甕が出現し、それまで斉一性を保っていた遠賀川式土器が急速に衰退に向かうことを述べ、高知平野においては中期に確立を見る「土佐型甕」の先駆型態の出現について示した⁽¹²⁾。この段階に至る過程としては、まず前期初頭（田村前期Ⅰ）における遠賀川式土器生成期とも言えるべき複雑な移行期があり、次いで縄文晩期的な要素を払拭し、一旦遠賀川式土器によって席卷せられるところの前期中葉（同Ⅱ・Ⅲ）の段階を経ているのである⁽¹⁰⁾。斉一性を保ち且つ飾られることの比較的少ない遠賀川式土器が、なぜ再び地域色の濃厚な繁縷なまでに飾りたてられた土器に取って変わられるのか。この変化は文様や形態にとどまらず成形手法の転換も伴うものであった。この問題について、今正確に答えを出すことはできない。ただ土器に再び多くの文様を施すことが要求されるという弥生時代社会の構造的な本質にかかわる問題が横たわっていることだけは確かであろう。

県西部における前期末の様相は、これまでほとんど不明であった。当該期に至って当地域においても飛躍的な遺跡の増加が認められることは明らかであったが、良好な資料に欠けていた。先述した入田B式・入田Ⅰ式土器と地点を異にして出土した入田Ⅱ式土器⁽¹³⁾が少量明らかとなっていたに過ぎない。前項において詳しく述べたように、県西部の前期後葉の様相は高知平野を中心とする中央部とは著しい違いがあることが明らかとなった。甕の大半を占めるⅠ類の一部（Ⅰ-A類）、Ⅲ-A類とⅣ類には共通点を見出すことが可能であるが、他の7割近くは県中央部では全く認められない型式ばかりである。この違いは、前述した前期後葉に生じる地域性の特徴を現わしているものとして、すなわち県中央部と同じ歴史的な性格を有し発現形態のみが異なったものとして理解することが可能であろうか。このことの解明のためには、当該期と入田Ⅰ式とをつなぐ時期の資料を検討しなければならないが、先述のように相当時期の資料が皆無の状況にある。従って今次資料と入田B式・Ⅰ式から追求する以外にその方法はない。前項の分析をもとに今少しトータルな視点から検討したい。

西ノ谷遺跡の甕を歴史的に位置付ける場合最も重要なことは、バリエーションの豊富さにある。大分類で8類、細分すると23類にも分けることができた。一時期におけるこれほどのバリエーションは、当地が東九州や瀬戸内の両地域からの影響によるところの、地理的環境に起因することも考えられないではないが、より本質的には田村遺跡群の前期初頭に生じた現象に類似するものであり、「型式の移行期に現象する特色⁽¹³⁾」として理解することができる。具体的に見ればⅠ-B、Ⅱ-A、Ⅲ-B類の口縁端部摘み出しは、突帯を強く意識した手法である。また入田B式土器の弥生的展開として把握したⅣ類に見られる口縁部直接刻目は、当地域の晩期土器には伝統的に施文されることのなかったものであり、遠賀川式土器からの影響として理解することができる。更に前項において刻目とヘラ描沈線を主とする胴部文様帯との相関関係

を注目すべき事象として指摘した。両属性を最もよく具備するのは瀬戸内の晩期諸型式においてである。口縁部内面の沈線などと共に晩期以来漸進的に影響を受け続けた左証とすることができよう。おそらく遠賀川式土器（入田土式土器）もこのルート上に当地域へ到達したことが考えられる。しかしながら当地域には、東九州的な様相をもつ晩期系土器の伝統が根強く横たわっており、前期初頭以来、中葉を通して県中央部に見られたような構造的転換は果し得ず、二重構造を引き摺りながら推移していたのである。従って当地域における前期後葉に見られる特徴は、県中央部のそれとは歴史的過程を全く異にするものであると言わなければならない。そして前期末に至って二重構造の解消が果されつつあったと理解しなければならない。

県西部における弥生文化の成立は、土器を通して見る限り、東九州と密接に関係しあった晩期末葉土器群の中に瀬戸内から遠賀川式土器が入り、二重構造の様相を呈するが瀬戸内の要素の斬進的浸透の過程、同時にそのことによる東九州の要素の退潮過程として理解することができる。このことは縄文文化成立以来県西部の石器石材として重要な役割を果たしてきた姫島産黒曜石の消長によっても窺われる。すなわち縄文後期までは同黒曜石製の石鏃がかなり見られたが、晩期に至ると全く消滅しサヌカイトや頁岩製のものに完全に転換する。それでも剝片は久保畑遺跡⁽¹⁴⁾や中村貝塚において少量の出土を見るが、入田遺跡からは剝片すら出土しない。この石材流入ルートの劇的な転換は、県西部における弥生文化の成立にとって特に東九州的な要素の退潮として大きな意味をもったに違いない。

県西部における弥生文化成立期の諸特徴は、二重構造の成立について高橋護氏が言及された「縄文文化の伝統を継承する地域と遠賀川系文化に転換した地域との地域間の関係によって現象する」ということを如実に示しているものと言えよう。また成立期に見られたかかる現象が中期以降の展開にどのような影響を及ぼして行くのか興味深い問題である。

（３） 下城式土器との関係について

前項において耳類が下城式土器類似相であることを指摘した。すでに周知のように下城式土器は、大分県佐伯市下城遺跡出土の甕について型式設定⁽¹⁵⁾されたものであったが、宇佐平野から別府湾岸で前期後半に成立し⁽¹⁶⁾、中期中葉頃まで西部を除いた大分県全域に分布する東九州を代表する土器型式であるとされている。その特徴は、縄文晩期の伝統を強く残した口縁下の一条突帯、深鉢状の体部、厚目めの平底、タテハケ調整などを挙げることができる⁽¹⁷⁾。下城式土器の成立は北部九州前期後葉様式の亀ノ甲式土器の発生と軌を一にした現象⁽¹⁸⁾として位置付けることができよう。そして下城式土器の成立や分布・編年については、小田富士雄氏⁽¹⁹⁾や坂本嘉弘氏⁽²⁰⁾はじめ多くの先学によって論じられている。

今日、四国島内においても八幡浜市徳雲坊遺跡や愛媛県宇和町の深ヶ川床などから出土しているが⁽²¹⁾、四国出土の下城式土器について最初に着目し論じられたのは岡本健児氏である。

岡本氏は宇和町永長深ヶ川出土の突帯文土器を下城式と認定し、西四国における弥生前期後半の課題として「下城式土器文化と阿方式土器文化、それに大篠式土器文化の三つがどのような接触を示しているかにある⁽²²⁾」という極めて示唆に富む指摘をしている。すでに述べたように、高知県西部と東九州が共通した晩期土器を有している以上、下城式土器の分布は当然予想されるところであったが、検出事例としては今次調査の成果を待たなければならなかった。

西ノ谷遺跡におけるⅣ類の存在は、前期末葉においてもなお当地域に東九州的な要素が残っていたことを示すものである。壺が極めて少ないという組成上の特徴なども共通した要素である。しかしながら西ノ谷遺跡の甕は遠賀川式土器が5割以上を占めており、Ⅳ類は1割にも満たない少数派である。これが四国西南部における下城式土器の一般的なあり方であろう。大分県下においても下城式土器は、遠賀川式土器と伴出しているが、圧倒的多数を下城式土器が占めており遠賀川式土器は少数派である。四国西南部とは全く逆の現象を示している。これは当地域における遠賀川式土器の受容のあり方の相違を端的に示したものであり、同時に土器について見る限り豊後水道西岸地域が縄文晩期以来の伝統をより強固に残し続けたことを示している。大分県下における下城式土器の出土遺跡は数多く報告されているが、管見の限りでは西ノ谷遺跡で認められたような型式の移行期を示す現象が認められないことから明らかである。

註

- (1) 岡本健児「上佐入田遺跡調査概報」『考古学雑誌』38巻 5・6号 1952年
- (2) 岡本健児「入田遺跡」『日本農耕文化の生成』日本考古学協会編 1961年
- (3) 岡本健児「弥生土器—四国2—」・『考古学ジャーナル』89 ニューサイエンス社 1973年
- (4) 岡本健児「有岡ツグロ橋遺跡」『月刊考古学ジャーナル・特集、地域考古学界動行Ⅱ』1979年 ニューサイエンス社
- (5) 岡本健児「南四国弥生Ⅰ期初頃の土器—東松木式土器について」『考古学叢考』下巻 1988年 吉川弘文館
- (6) 木村剛朗「高知県入田遺跡出土の入田B式土器」『遺跡』27号 1985年 遺跡刊行会
- (7) 中野雅美・岡田博・他「百間川沢田遺跡」『百間川沢田遺跡2 百間川長谷遺跡2』1985年 岡山県文化財保護協会
- (8) 山本悦世「縄文晩期の土器群について」『津島岡大遺跡3』1992年 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- (9) 藤尾慎一郎「水稲農耕と突帯文土器」『日本における初期弥生文化の成立』横山浩一先生退官記念論文集Ⅱ 1991年
- (10) 出原恵三「前期考察」『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』第3分冊 1986年 高知県教育委員会

- (11) 高橋護「遠賀川式土器」『弥生文化の研究』4 弥生土器Ⅱ 1987年 雄山閣
- (12) 出原忠三「く土佐型」甕の提唱とその意義」『遺跡』第32号 1990年 遺跡刊行会
- (13) 高橋護「弥生文化のひろがり」『弥生文化の研究』9 1986年 雄山閣
- (14) 木村剛朗「久保畑・ツグロ橋下遺跡」『四万十川流域の縄文文化研究』 1987年 幡多埋文研
- (15) 賀川光夫「東九州における押捺文土器と彌生式土器」『考古学雑誌』第37巻第1号 1951年
- (16) 高橋徹「東九州における突帯文土器とその周辺」『古文化談業』第12集 1989年 九州古文化研究会
- (17) 高橋徹「弥生時代」『大分県史 先史篇Ⅱ』 1989年
- (18) 後藤宗俊「いわゆる下城式土器について」『台ノ原遺跡』 1975年 大分県教育委員会
- (19) 小田富士雄「弥生土器—九州2—」『考古学ジャーナル』第76号 1972年 ニューサイエンス社
- (20) 坂本嘉弘「縄文晩期刻目突帯文土器系の甕（深鉢）形土器について」『大野原の先史遺跡』 1984年 大分県教育委員会
「いわゆる下城式土器について」『安心院宮ノ原遺跡』1984年 安心院町教育委員会
- (21) 正岡睦夫、十亀幸雄『日本の古代遺跡 22 愛媛』
- (22) 岡本健児「愛媛県宇和町深ヶ川の弥生土器と宇和島市拝鷹山貝塚について」『西四国』第2号 1968年 西四国郷土研究会

3. 西ノ谷遺跡出土の古式土師器について

(1) 分類

① 壺

- I 類：やや大振りで，口縁部はく字状に屈曲し直線的に外方に伸びる。叩き式形であるが，大部分をナデ消している。(155)
- II－A 類：小型の壺で，口縁部はく字状に屈曲し比較的長く外方に伸びる。(141)
- II－B 類：小型の壺で，口縁部は直立気味に立ち上がる。外面は丁寧なヘラミガキが施される。平底をとどめる。(152)
- III 類：二重口縁を有するが，口縁は外反しない。(110)
- IV 類：口縁下に三角突帯を貼付する。確実に壺となるかどうか疑わしいが，ここでは壺として扱う。(111)

② 甕

- I－A 類：頸部でく字状に屈曲し，口縁部が長く伸びる。叩きを施すが全面に残すものは少ない。また粘土帯の接合部を内・外面に明瞭に残す例が多く，ことに口縁部の接合部は外面に段を生じている例が顕著である。ほとんどが平底である。(114・118・120・122・124・129・142・144・145・154・156・157・163)
- I－B 類：I－A 類に比して，頸部の屈曲がゆるやかである。その他の特徴は I－A 類と同様である。(112・113・123・153・164・165)
- II 類：口縁部がく字状に屈曲するもの(121)と丸味をおびて外反するもの(119)がある。I 類に比して口縁部は短い。また口縁部叩き出し手法によるもの(121)も見られる。(119・121・127・143)

③ 鉢

- I 類：平底，碗状を呈する。(150)
- II 類：比較的浅い皿状を呈する。(158)
- III 類：上胴部で内湾し，頸部で外方に屈曲する。(130・136)

1 区 VII 層及び 2 区 XVI 層の一括資料の土器組成及び組成比は表－3 のとおりである。また

出土量の最も多い甕について、口縁部のみの破片である場合Ⅰ－A類とⅠ－B類の判別が難しい。しかしⅠ類とⅡ類として見た場合は、明瞭に判別をすることが可能であり、1区ではⅠ類が25点（92.6％）Ⅱ類が2点（7.4％）、2区ではⅠ類が22点（84.6％）、Ⅱ類が4点（15.4％）を占めている。

	1区	2区	計
壺	2点	2点	4点（5.9％）
甕	27点	26点	53点（77.9％）
鉢	4点	1点	5点（7.4％）
高坏	4点	2点	6点（8.8％）

表5 1区Ⅶ層及び2区ⅩⅥ層出土土器組成表

（2） 1区出土の土器について

1区では第Ⅶ層・第Ⅹ層及び、第Ⅶ層を切る砂礫層（以下、単に「砂礫層」と記す。）から古式土師器の出土がみられた。層位的には、第Ⅶ・Ⅹ層が砂礫層よりも古いことがまず確認できる。この前提に従い、第Ⅶ・Ⅹ層の土器から順に概観することとする。

第Ⅶ・Ⅹ層出土の土器には、壺・甕・高坏・鉢・手づくね土器の各器種が認められる。壺には外傾する二重口縁を有するもの（壺Ⅲ類）と、口縁部直下外面に断面三角形の突帯を有し、タタキ調整痕を留めるもの（壺Ⅳ類）との2形態がある。甕はⅠ・Ⅱ・Ⅲ類の各形態がみられる。底部の形状は、唯Ⅲ類の(106)により丸底と知れるのみである。口縁部の形態は口径に比して口縁部の立ち上がりが高く、長くのびるⅠ類が特徴的である。Ⅰ類甕では頸部に粘土帯の接合痕があり、内傾接合であるという特徴をもつものが多い。また外面の調整にタタキを採用するものは各類に認められ、Ⅱ・Ⅲ類では明瞭にタタキ目を残すものがみられるが、Ⅰ類ではタタキ目を丁寧にナデ消すようであり、タタキを最終調整とする手法からは遠ざかりつつある様子がみてとれる。鉢はⅢ類が出土しているが、口縁部の接合方法にⅠ類甕との共通点が見いだせる。高坏は完形に復元できるものはみられないが、坏部は無段で、脚柱部外面は丁寧にヘラミガキされるもの(112)がある。

砂礫層出土の土器で器種の判明するものはやや少ないが、壺・甕・高坏・鉢の各器種がみられる。壺は小型壺(120)のみで、外面はミガキ調整である。甕にはⅠ・Ⅱ類がみられ、Ⅰ－A類が多数を占め、外面調整にタタキ目はみられない。鉢はⅠ類に分類されるもので、内外面ともミガキを施している。高坏は脚部のみ4点が出土しており、外面にミガキを施すものが2点ある。

以上、第Ⅶ・Ⅹ層及び砂礫層出土の土器について概観した。次に各器種ごとに両土器群の

特徴を抽出したい。まず、壺は両群間で系譜のつかめるものがみられない。甕はⅠ・Ⅱ類が両群に存在し、Ⅰ類甕の頸部接合法は両群に共通する。また、Ⅰ類甕外面のタタキ調整については、第Ⅶ・Ⅹ層出土土器群ではタタキ目をナデ消す手法が採られる一方、砂礫層出土土器群ではタタキ目を留めるものは１点のみみられない。鉢では砂礫層出土資料に精製品が含まれることを指摘できるが、高坏では資料の制約もあり、明瞭な変化を抽出することは難しい。このように両土器群を型式的な時間軸上に位置付けるのには資料的制約があまりにも大きい観がある。Ⅰ類甕の製作技法の継承とタタキ技法の減少傾向、そして層位学的な前後関係を根拠に【第Ⅶ・Ⅹ層出土土器群→砂礫層出土土器群】という図式を描出することも可能であろう。しかし、土石流にともなう砂礫層の堆積が数回にわたって観察されるような不安定な堆積状況においては、層位の上下関係のみで新旧を論ずるのは危険であろうし、また完形品が殆どない中で両土器群の有する型式学的諸特徴によってこれを序列化することにも意義は見いだせない。ここでは特徴的な第Ⅶ・Ⅹ層出土土器群の資料的有効性を述べるに留め、砂礫層出土土器群の位置付けについては新資料の追加を待ちたい。

(3) 2区出土の土器について

2区では第ⅩⅥ層及び第ⅩⅦ層から古式土師器が出土している。第ⅩⅦ層は砂礫層で、縄文土器・弥生土器・土師器が混在した状態で出土しているが、第ⅩⅥ層は安定した遺物包含層と認定され、その出土遺物は一括性の高い土器群として扱うことができよう。次に両層出土の土器群についてそれぞれ概述する。

第ⅩⅦ層出土の土器には壺・甕・高坏の各器種がみられる。壺はⅤ・Ⅵ類の２種があり、Ⅵ類(150)は豊後地方に分布する安国寺式土器である。王永光洋氏による編年⁽¹⁾の弥生後期ⅢないしⅣ期に位置付けられるものであろうか。甕にはⅠ-A・Ⅱ・Ⅲ類があり、中でもⅢ類(149)は庄内式土器の口縁部形態に近似したもので、搬入土器と考えられる。高坏には碗状の坏部をもつものがみられる。

第ⅩⅥ層出土の土器には壺・甕・高坏・鉢の各器種が存在する。壺はⅠ・Ⅱ-B類の２形態がみられ、小型のⅡ-B類(131)はタタキ調整の後、ミガキによって仕上げられる。甕はⅠ類に限られ、口縁部の立ち上がりの高い一群によって占められる。底部の形状は平底・尖底状の平底・丸底の３種が混在する。外面調整にタタキ目を残すものが半数を占めるが、タタキ調整の後ミガキを施すものも存在し、タタキの減少傾向が現れ始めた段階といえよう。高坏は坏部のみ２点出土しているが、いずれも外面をミガキ調整している。

以上が第ⅩⅦ層及び第ⅩⅥ層出土土器群の概略である。上述したように第ⅩⅦ層は砂礫層であり、第ⅩⅥ層はこれに一部接する状態で確かに上下関係を保っている。しかし、両層の取り扱いにはⅠ区の項で述べたような視点を援用しなければならない。すなわち、土石流

等に伴う比較的短期間のうちに形成された砂礫層等の堆積が多数みられるような層序においては、層位的上下関係をそのまま出土遺物の新旧関係に投影することは困難だということである。以上の視点に基づき、両層出土土器群を編年的に検討することには意義を見いだせないものと考えらる。

(4) 西ノ谷遺跡出土古式土師器の編年的位置付けの試み

上記では、1・2区の各層出土土器群の諸特徴を概観し、同時に一括遺物として信頼できる層位の抽出をおこなった。ここで、2区第XVI層は1区第VII層に対応するという層位学的な観察所見に基づき両層出土土器群を一括し、西ノ谷遺跡出土古式土師器の高知県西部地域における位置付けについてみていきたい。

上佐における古式土師器編年については、タタキ技法の盛衰を軸として弥生後期土器から土師器にいたる変遷を論考した岡本健児氏の業績⁽²⁾が挙げられる。岡本氏はその中で芳奈I・II式土器⁽³⁾を取り上げ、高知県西部ではタタキ技法の盛行しないことを指摘している。しかしその後芳奈式土器に匹敵する新資料には恵まれていない。また、高知平野周辺地域では出原恵三氏によって古式土師器の四期編年⁽⁴⁾が確立されており、西部地域の様相については一層関心が注がれている。西ノ谷遺跡出土資料はこのような研究の状況に何らかの進捗をもたらすものと考えられる。

西ノ谷遺跡1区第VII・X層・2区第XVI層出土土器群（以下、「西ノ谷遺跡出土土器群」と呼称する。）の各器種の形態・製作手法等の特徴をまとめると以下になる。

壺：I～IV類の四形態の壺形土器それぞれ1個体が出土しており、二重口縁壺・小型壺を含む。

甕：I～A～III類の四形態の甕形土器が出土しているが、口縁部が長くのび、頸部に内傾の粘土帯接合痕をもつI類が特徴的であり、主体を占める。外面調整は、I類では18個体中11個体がタタキ調整痕を留めるが、ナデ・ミガキによってタタキ目を消しているものが2個体ある。一方、II・III類には全面にタタキ目を残すものがある。底部の形状は平底・尖底状の平底・丸底の3種が混在する。

鉢：無段のII類と頸部が屈曲して一段をなすIII類が出土している。III類は頸部に内傾する粘土帯接合痕を有する。

高坏：完形に復元できるものはない。坏部は無段で、脚柱部外面には細かいミガキ調整を施すものがある。

次に、甕形土器を中心に西ノ谷遺跡出土土器群と高知平野周辺地域の古式土師器との接点を探ってみたい。長くのびる口縁部と、頸部に内傾接合痕をもつI類甕は、現在のところ高知平野周辺では類例が見当たらない。高知県西部地域における地域性と評価できよう。外面調整のタタキ技法については、確かにタタキ調整痕を残すものがほぼ半数を占めるが、最終調整として

採用されているものはⅡ・Ⅲ類甕の2点に限られる。タタキ目を残したⅡ類甕は、高知平野周辺のヒビノキⅢ式土器⁽⁵⁾（出原氏編年Ⅰ期）に酷似し、搬入の可能性がある。底部の形状は平底・尖底状の平底・丸底の3形態が混在するが、これは高知平野周辺では弥生後期末にみられた現象⁽⁶⁾で、後出的といえる。また器種組成をみると、壺：甕：鉢：高坏＝4：22：3：7となり、甕の占める割合が圧倒的に大きい。これは遺跡の性格に起因するものと考えられるが、土製支脚・小型精製三種・また河内・吉備等からの搬入土器が全くみられないことは特筆すべきであろう。以上の所見によると、出原氏編年Ⅰ期との併行関係を想定することができよう。しかし高知平野周辺地域と比較すると、①タタキ調整の減少傾向・②平底・丸底の混在状況・③土製支脚・小型精製三種・搬入土器の不在等の差異が指摘でき、これに加えてⅠ類甕の存在が両者をより異質なものにみせている。

では、西ノ谷遺跡出土土器群と高知県西部地域の既知の土器群との併行関係はどこに求められるであろうか。甕の外表面最終調整にタタキ技法が盛行しない点は、弥生後期末の芳奈Ⅱ式土器との近似性が認められる。平底・丸底の混在状況を呈する点は、芳奈Ⅱ式土器に後出する様相である。また、頸部の接合方法は不明ながら、芳奈Ⅱ式土器には平底のⅠ類甕の形態が存在する。以上のように、西ノ谷遺跡出土土器群は芳奈Ⅱ式土器に近似し、後続する要素が認められる。よって、[芳奈Ⅱ式→西ノ谷遺跡出土土器群]という系譜が辿れるものと考えられる。

また、型式設定はなされていないが、4世紀代に位置付けられた共同中山遺跡群の祭祀跡SX3・4・5⁽⁷⁾出土土器群には、タタキ調整痕を残すⅠ類甕形態が存在し、平底・丸底の混在状況を呈している。そして、外面にタタキ目を留める鉢形土器が共伴することから、高知平野周辺地域の影響が考えられる。良好な一括資料の追加を待たずに、詳細な検討はできないが、西ノ谷遺跡出土土器群に先行する可能性がある。その場合、芳奈Ⅱ式土器との関連が注目されるが、これについても資料の増加を待って論及すべきであろう。

以上、西ノ谷遺跡出土土器群の、既成の編年観・土器型式への比定を試みた。高知県西部地域における芳奈Ⅱ式からの変遷をみる限り、土器生産体制における弥生時代から古墳時代への断絶は認めることができない。Ⅰ類甕の製作手法が芳奈Ⅱ式・西ノ谷遺跡・共同中山SX3・4・5段階で共通する現象は、高知平野における古式土師器生産が「弥生時代の土器生産体制を止揚した新たな製作集団を形成することなく、弥生時代的な生産関係を引きずりながら展開した」⁽⁸⁾状況に等しいものであり、西ノ谷遺跡出土土器群は高知県西部地域における「伝統的第Ⅴ様式」⁽⁹⁾として位置付けることができる。

高知県西部地域の古式土師器は、タタキ技法採用の点で明白なように、高知平野からの一元的な製作技法の波及によって変遷を遂げたものではなく、その背後には安国寺式土器をはじめとする東九州・西部瀬戸内の土器群からの影響も複雑に絡んでいるものと予察される。また、西ノ谷遺跡出土土器群の段階以後、初期須恵器段階の共同中山遺跡群祭祀跡出土資料⁽¹⁰⁾との

間には、甕底部の完全な丸底化、頸部が外傾接合となるなどの型式的な断絶が認められ、未確認の型式が存在することが推察される。今回は上記のような視点については言及できなかったが、今後、良好な新資料によって西ノ谷遺跡出土土器群をとりまく編年観を検証・補完し、一方で周辺地域を視野に入れた系譜問題についても究明していくことが課題であろう。

註

- (1) 王永光洋「大分県の弥生後期土器」『瀬戸内の弥生後期土器の編年と地域性』古代学協会四国支部第4回大会資料 1990年
- (2) 岡本健児「南四国における印目のある弥生土器と土師器」『森貞次郎博士古稀記念・古文化論集』下 1982年
- (3) 岡本健児・木村剛朗「芳奈遺跡・芳奈向山遺跡」宿毛市教育委員会 1978年
- (4) 出原恵三「拝原遺跡」高知県香我美町教育委員会 1993年
- (5) 岡本健児・廣田典夫「高知県ひびのき遺跡」上佐山田町教育委員会 1977年
- (6) 出原恵三「上佐の弥生後期土器編年」『瀬戸内の弥生後期土器の編年と地域性』古代学協会四国支部第4回大会資料 1990年
- (7) 出原恵三・廣田佳久・松田直則・山本哲也「具同中山遺跡群」『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』高知県教育委員会 1988年
- (8) 同註(4)
- (9) 酒井龍一「古墳造営労働力の出現と煮沸用甕」『考古学研究』第24巻第2号 1977年
- (10) 同註(7)
前田光雄・松田直則・廣田佳久・江戸秀輝・藤方正治「後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ」高知県教育委員会・財高知県文化財団埋蔵文化財センター 1992年

付章 1

西ノ谷遺跡出土木製品の樹種について

山口誠治（大阪文化財センター）

（１）はじめに

西ノ谷遺跡出土の木製品の樹種について報告する。なお、出土した木製品の全体を把握しているわけではないが、古代人が使用していた木製品の樹種を知ることが古代の環境を知る上でも大切なことである。今回出土した木製品は、鋏、えぶり、板材、柱材など弥生時代前期～古墳時代前期にわたる貴重な遺物である。

（２）樹種鑑定結果について

鑑定方法としては、木製品の木口・柃目・板目方向の徒手切片を作製して生物顕微鏡により観察し、樹種の識別を行った。この時に注意したのは加工の痕跡を痛めずに木製品の切片を作製することである。

その結果については以下の一覧表に示す。

表 1 出土木製品樹種鑑定一覧

受入番号	器種	樹種名	時期
01	平鋏	コナラ亜属	弥生前期
02	鋏？	ケヤキ	古墳前期
03	えぶり状木器	コナラ亜属	弥生後期
04	木槌状	ムクノキ	古墳前期
06	両端有孔板状	ヤマゲワ	弥生後期

〔鑑定した樹種の組織的特徴について〕

①ヒノキ類（学名：*Chamaecyparis* sp.） 1点

垂直・水平樹脂道を欠く針葉樹脂材であり、放射仮道管も仮道管内壁も欠き分野壁孔も腐食によって失われている。しかし、木口面の晩材部の幅がきわめて狭く、均質緻密な材質であることから判断した。

②コナラ亜属（学名：*Quercus serrata*） 2点

コナラ亜属は、道管が年輪界に沿って1～3列並ぶような環孔材であり、小道管は火炎状に

並んでいた。柢目面での放射組織は単列放射組織と典型的な広放射組織であることを確認した。

③ヤマグワ（学名：*Morus australis*）1点

木口面での観察では環孔材であることを確かめた。また、柔細胞が周囲状に数多く配列し、放射組織が1～6細胞列存在した。柢目面では大道管が存在し単穿孔であり、板目面においては放射組織が典型的な紡錘形であった。

④ムクノキ（学名：*Aphanathe aspera*）1点

散孔材で道管は単独ないし2～3個放射方向に複合し、年輪を通じて均等に分布しているのを観察する。柢目面では単穿孔と軸方向柔細胞のストラドンと放射組織の異性や平伏細胞を有していた。板目面においての放射組織は平伏細胞、直立細胞を有していた。

⑤ケヤキ（学名：*Zeakova serrata*）1点

木口面の年輪界に大道管が1列に並び、大道管外では小道管が多数集合して接線方向につながる環孔材である。道管の穿孔は単一、小道管の内壁にらせん肥厚があり、放射組織は1～8細胞幅くらいで、ニレ科の特徴を示していた。

以上のことを報告する。

【参考文献】

- 1) 島地謙・伊東隆夫著（1988）「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版



1-1 ムクノキ (No. 4) 木口面×20



1-2 左同

柁目面×20

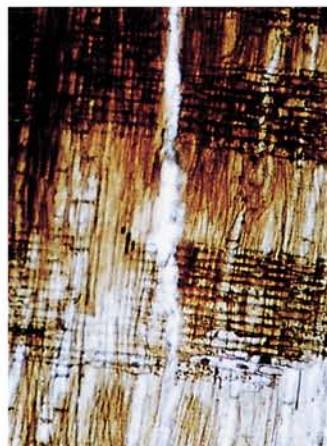


1-3 左同

板目面×20

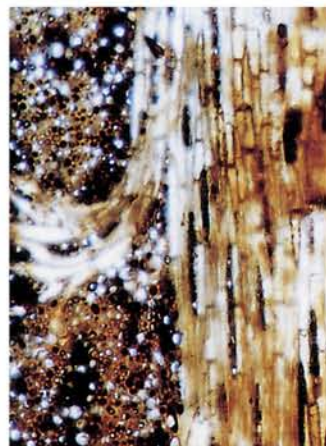


2-1 コナラ亜属 (No. 3) 木口面×20



2-2 左同

柁目面×20



2-3 左同

板目面×20



3-1 ケヤキ (No. 2) 木口面×20



3-2 左同

柁目面×20



3-3 左同

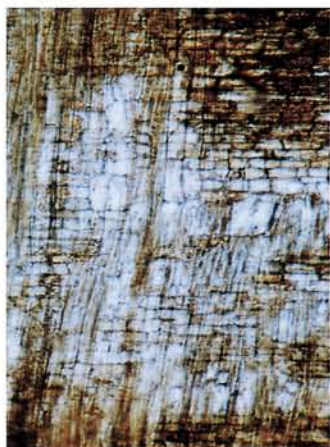
板目面×20

樹種細胞顕微鏡写真

PL 8



4-1 コナラ亜属 (No. 1) 木口面×20



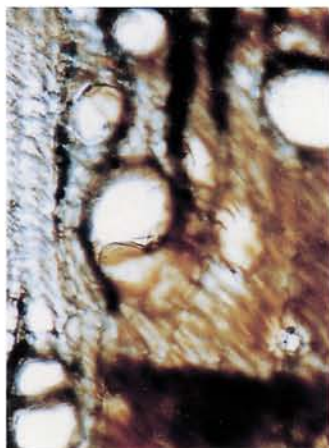
5-2 左同



板目面×20

5-3 左同

板目面×20



5-1 ヤマガワ (No. 5) 木口面×20



6-2 左同

板目面×20



6-3 左同

板目面×20

樹種細胞顕微鏡写真

付章 2

底部圧痕と植物遺体

渡辺 誠

(1) はじめに

ここに報告する資料は、底部圧痕 1 件と植物遺体 5 件である。それらは 1992 年に高知県立埋蔵文化財センターによって発掘調査された、中村市西ノ谷遺跡より検出された資料である。弥生～古墳時代に属すが、個々の時期は個別に記することとする。

(2) 底部圧痕 (Fig. 25-72, Fig. 47)

これは弥生前期新段階に属す甕の底部圧痕である。底面自体は全形が残っており、直径 8.7cm である。網代編みの圧痕で、Fig. 25-72 は雌形である圧痕自体の拓影、Fig. 47 は本来の形としての雄形に油粘土で形取りをしたものである。

その編み方は、2 本 1 単位の素材を、「2 本越え、2 本潜り、1 本送り」にした編み方である。縄文時代にはもっとも普遍的な編み方であり、弥生時代を経て現代まで引き継がれていることを、よく示している好資料である。カゴ類や敷物などに使われていたものの断片が、土器製作の際に転用されたのであろう。

(3) 植物遺体 (Fig. 48)

検出された植物遺体は次の 3 種である。大型の堅果類の種子のみである。

1. くるみ科オニグルミ *Juglans mandschurica* Subsp. *Sieboldina* (MAXIM.) KITAMURA
2. ぶな科イチイガシ *Quercus gilva* BLUME
3. ぶな科ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* (Thunb.) Schottky

いずれも野生植物であり、縄文時代以来食用に供されてきたものである。1 は主に東北日本の落葉広葉樹林帯、2・3 は主に西南日本の照葉樹林帯に優先する。

それらをサンプルごとに記すと、以下のとおりである。

資料 0 (Fig. 48-1) : I 区Ⅷ層。古墳時代前期。

オニグルミの核 3 点である。内 1 点は完形であるが、齧歯類に噛まれた痕跡が明瞭である (上)。他の 2 点は果核の片側のみである (下)。

資料1（同2）：SK 2。弥生時代前期末。

種皮のなかに子葉（実）がつまり、花被もよく残っていて、イチイガシであることが明らかである。7点。

資料2（同3）：XIV層。古墳時代前期。

資料1と同じ条件でイチイガシであることの分かるもの1点、種皮がはがれているが、イチイガシ固有の発芽溝の確認できる子葉19点、左右に分かれた子葉で発芽溝の確認できる例3点、確認できない例8点である。最後の例も、他の種類が見られないことからイチイガシとみなしてよいであろう。

資料3（同4）：XXXIV層。古墳時代前期。

資料1と同じ条件でイチイガシであることの分かるもの7点である。

資料4（同5）：SK 1。古墳時代前期。

左右のそろったツブラジイ3点、片側のみの例4点である。

イチイガシとツブラジイは、いわゆるドングリ類である。それらの多くはアク抜きをしないと食べられない種類であるが、ツブラジイはわずかに甘みを含み、そのまま食べることができる。またカシ類は水さらしによってアク抜きをする必要があるが、唯一の例外として、イチイガシのみはシイ類と同様にそのまま食べることができる。

以上の資料が食用に供されたものでないことは遺存状態から明らかであるが、周囲に成育していたこともまた明らかである。水稻栽培段階に入っても、救荒食料として重視されていたと考えられる。またその材は、農具、家具、器具、および薪炭材などとして、さまざまに利用されていたと考えられるのである。

（4） おわりに

最後に、調査の機会を与えられ種々ご教示下さった高知県立埋蔵文化財センターの出原恵三氏、資料整理に御協力下さった名古屋大学大学院学生丹下昌之氏に対し、衷心より謝意を表する次第である。

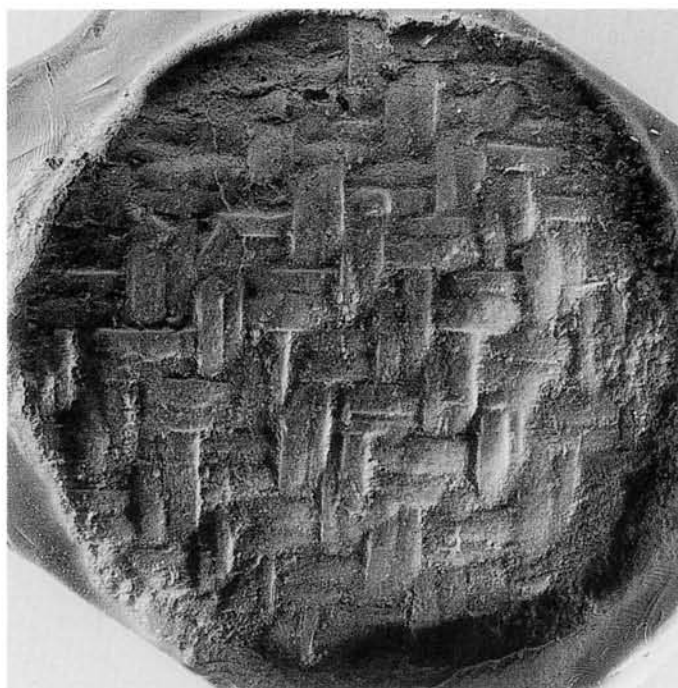


Fig. 47 底部圧痕モデリング陽像（実大）

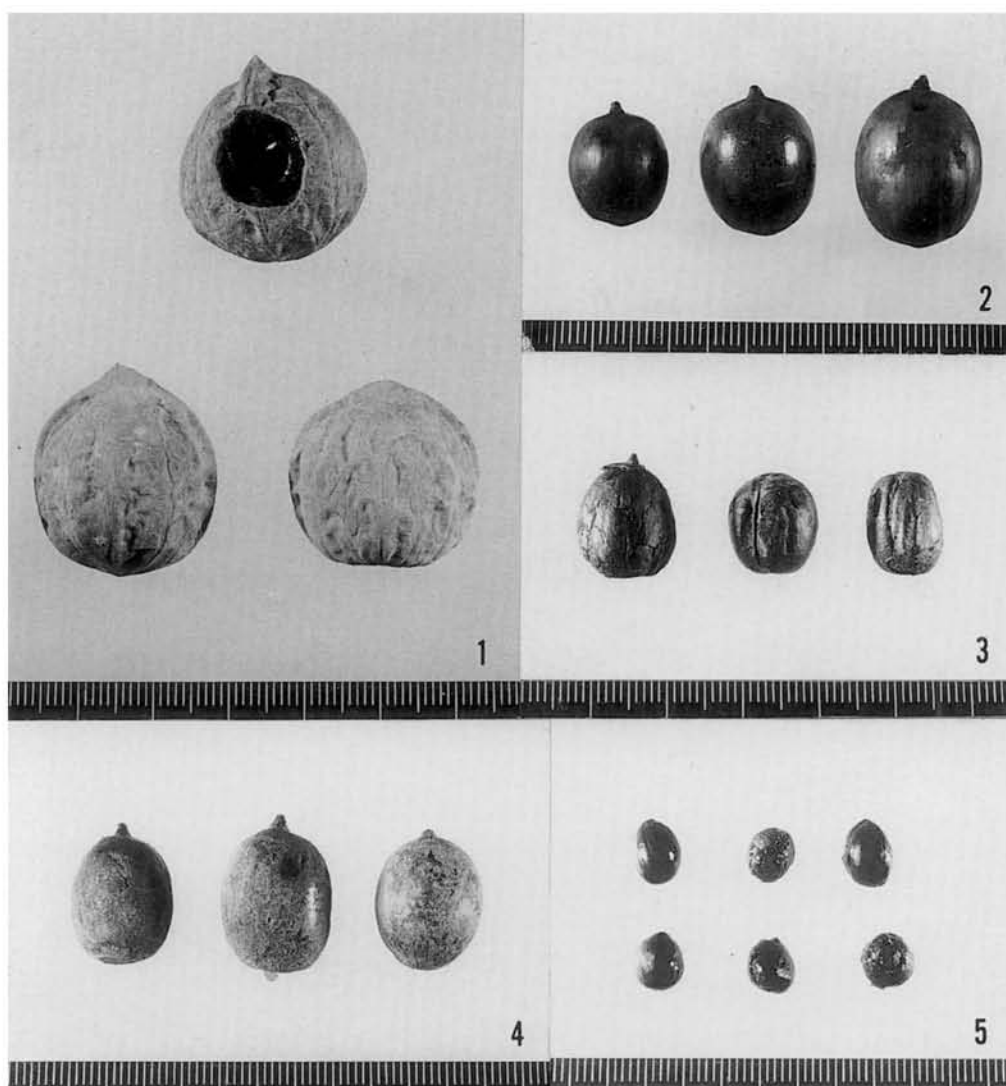


Fig. 48 植物遺体 (実大)

1 : オニグルミ, 2 ~ 4 : イチイガシ, 5 : ツブラジイ.

標同番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	分類	胎土 色調 (石材)	特 徴	備 考
Fig15-22	SK 1	甕	26.4 — — —	III-A-①	細・粗粒砂・石英・長石・角閃石 濃茶色	内傾気味に立ち上がる上胴部から、口縁部は大きなカーブを描いて外反。口縁は丸くおさめ刻目。外面タテハク、内面上部ヨコハケ	外面煤ける。
〃 -23	〃	〃	22.3 — — —	〃	細・粗粒砂多量・石英・長石。 濃茶色	口縁部は大きなカーブを描いて外反。最大径を口縁部に有す。口縁は丸味を帯びた面をなし、全面に刻目を施すが、隅隅が粗。口縁部外面整然としたタテハケ。胴部外面タテ・ヨコハケ。口縁部内面右下り。胴部内面はタテ方向割断ナデ・ヨコ及び右下りのハケ。	〃
〃 -24	〃	〃	27.6 — — —	I	チャート・片岩・砂岩の小礫・石英の細粗粒砂。 暗茶色	口縁は大きなカーブを描いて外反。口縁下に断面三角の刻目突帯貼付。口縁端部をつまんでヨコ方向に強くナデ、口縁は凹状を呈す。口縁下端に刻目。	
〃 -25	〃	〃	19.4 — — —	VIII	チャートの粗粒砂。小礫を多く含む。 桃灰色	口部部はなめらかなカーブを描いて外反。口縁外面及び頸・胴部増に3条の微隆起帯を貼付。内外面ナデ。(下地に荒いハケ)	
〃 -26	〃	〃	— — — 7.6		砂岩の小礫多く、石英・雲母の細粗粒砂。 茶色	底部の台形状を呈す。外面タテのヘラミガキ、内面割断凹痕顯著。底部焼成後穿孔。	内面煤ける。
Fig17-27	SK 2	〃	— — — 9.2			底部はわずかに台形状を呈す。外面タテハケで底部付近のみタテヘラミガキ。	
〃 -28	〃	〃	10.6 — — —	VI-A-(1)-(a)	石英などの細・粗粒砂を多く含む。	口縁部は内湾気味に立ち上がり、口唇部は丸くおさめ細い刻目。口縁下にしっかりした刻目突帯を器壁に埋め込むように貼付。断面に粘土層積み上下の単位をみることができる。内傾接合。外面突帯下にタテ方向を基調とするハケ。内面はナデを基調とし、一部にタテ方向ヘラミガキ。	内・外面カーボンが附着。
〃 -29	〃	〃	24.6 — — —	VI-A-(2)-(a)	頁岩・砂岩・角閃石の粗粒砂。 淡茶色	口縁端部をつまみ出し強くヨコナデ、口唇外端に刻目。口縁下に断面台形の刻目突帯を貼付。突帯の刻目は、管状のもの。突帯下ハケ調整。	
〃 -30	〃	〃	24.6 25.2 — 9.0	〃	石英・風化砂岩の細・粗粒砂を含む。 淡茶色	外方にしゃくれた底部から内湾気味に立ち上がり、口縁に至る。端部は外方につまみを出しヨコナデ、口唇部は凹状を呈す。口唇外端に刻目。口縁下にしっかりした刻目突帯。突帯の上・下強いナデ。外面はタテ方向を基調とするハケ。胴部内面右下りのハケ。(外面とは原体が異なり粗い)	外面全面煤ける。
〃 -31	〃	打製石器 (鋳)			(安山岩)		
Fig19-32	SK 1 周辺の土器	甕	20.0 — 19.8 —	I-A-②	石英・長石の細粒砂を多く含む。 淡茶色	口縁部は凹状に外反。口唇は丸くおさめ全面に刻目。上胴部に9条のヘラ描沈線。外面は右下りを基調とする木理の荒いハケ(ハク+ヘラ沈)。口縁部内面ヨコ方向のハケ。胴部内面指ナデ。	外面は全面煤けるが、沈線帯より下が顕著。

表 6 遺物観察表 3

図号	遺構番号	器種	口縁器高 口径 (cm)	分類	胎土 色調	特徴	備考
Fig19-33	SK1 周辺の土器	甕	24.2 — —	VIII	長石・石英・角閃石の細粒砂を多く含む。 濃茶色	口縁部は大きなカーブを描いて外反。口唇部は面取り。口縁下に置隊起帯を1条貼付。内面ヨコナデ。外面ヨコ方向ハケ。	
〃 -34	〃	鉢	27.2 — —	I	チャート・石英の細粒砂。 暗茶色	口縁部は如意状に外反。口縁端部をつまんで横方向に強くナゲる。口唇は凹状をなし、外縁に細い刻目。口縁下にしっかりした刻目突帯を貼付。口縁部外面、指頭圧痕顕著。内面右下りのハケ。胴部外面右下りのハケ。内面横位のヘラミガキ	
〃 -35	SK2 周辺の土器	甕	14.8 — —	I	砂岩・石英の細粒砂。 茶色	口縁部は強く外反。口唇部は面。内面はヨコ方向の丁寧なヘラミガキ。外面ナゲ。	内・外面カーボンを吸着させ、内面には赤彩を焼す。
〃 -36	〃	甕	— — 8.0		風化砂岩の小礫及び石英の細粒砂。	外面は木理の近いよう調整。	外面焼熱赤変。爆け。外底に横圧痕あり。(長:短=7:4.5mm)
〃 -37	SK2 の周辺	〃	— — 8.8		石英・長石の細粒砂を多く含む。 濃茶色	外面タテ方向のハケ。内面ナゲ。	外面焼け焼熱赤変。内面煤け。
〃 -38	〃	〃	18.4 — —	I-B-1	石英・長石の細粒砂を多く含む。 茶色	口縁部は、大きなカーブを描いて外反。端部を外方につまみ出しヨコ方向に強いナゲ。口唇は面をなし下縁に刻目。上胴部には5条の沈線。その下に竹管状工具による刺突文。断面及び内面に粘土継の接合部で認む。(幅約2cm、内側接合)。内外面ナゲ。	内・外面煤ける。
Fig21-39	集石1	〃	21.2 — —	I-A-2	チャート・石英・角閃石の細粒砂	口縁部は如意状に外反し、内外面ヨコナデ。端部は丸くおさめる。胴部外面タテハケ。内面指頭圧痕顕著。	外面煤ける。
〃 -40	〃	〃	24.4 — —	I-B-1	チャートの小礫を多く含む。 灰茶色	口縁部は如意状に外反。口唇部及び口縁部外面をヨコナゲ。口唇は面をなし、下縁に細い刻目。上胴部外面ヘラ描沈線を9条まで認める。	〃
〃 -41	〃	〃	21.3 — —	〃	砂岩の小礫。チャート石英の粗粒砂を多く含む。 灰茶色	口縁部は如意状に外反し、端部をつまんで強いヨコナゲ。口唇は面をなし下縁に刻目。外面は、タテを基調とするハケ。上胴部には1条のヘラ描沈線(ハケ上沈線)。内面口縁部付近ヨコ方向を基調とするハケ。胴部内面はヨコ方向のヘラミガキ。断面に粘土継接合痕を認む。(幅約2cm、外側接合)	〃
〃 -42	〃	〃	25.5 — —	VI-A-2 (a)	石英・結晶片岩の粗粒砂を多く含む。 赤茶色	弱い波状口縁をなし。口縁は強く外反。端部を外方につまみ出し、口唇は水平な面をなし。外縁に細い刻目。口縁下に断面直角の刻目突帯。胴部外面タテ方向ハケ。断面に接合部を観察することができる。(幅約4cm、外側接合。粘土帯あり)	〃
Fig22-43	〃	〃	18.2 — —	VII-B	砂岩の小礫、石英・黒雲母・長石の粗粒砂を多く含む。 濃茶色	胴部から直立して口縁に至る。口縁外面に断面直角の台形の貼突帯。内面に凹線。外面タテハケ。内面ナゲ。	〃

表7 遺物観察表4

標本番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	分類	胎土 色調	特 徴	備 考
Fig22-44	集石1	甕	— — 7.0	— — —	—	砂岩の小礫、石英・長石・雲母の粗粒砂 黒褐色	底部は深く台形状をなし、上部は外面はハケ、	内外表保ける
〃 -45	〃	〃	— — 7.8	— — —	—	〃 黒褐色	外面はタテハケ+部分的なタテハケ、内面はナデ。	内面保ける、外底に横圧痕あり(長径×短径=7:4.5cm)
〃 -46	〃	〃	21.0 — 18.6	10-B-2	—	石英の細・粗粒砂を多く含む 濃茶～茶色	頸部がくびれ、口縁部は大きく外反、口縁端部をつまみ出し口唇は凹状をなし、内面は弱い段状を呈す。外面はほぼ口ハケ、胴部ナデ。内面に頸は条痕のような荒いナデ。	外面保ける
Fig23-47	集石2	〃	16.4 — 16.4	1-A-3	—	石英・雲母の細粗粒砂、砂岩を含まない。 黒～暗褐色	丸味を帯びた胴部から口縁が粗意状に外反、口内に沈線、口縁部は内外面口ハケ、胴部内面口ハケ、原体幅2cm、外面タテナデ。	内・外面保ける。
〃 -48	〃	〃	— — 8.0	—	—	砂岩・チャートの小礫を多く含む。 灰黄色	外反り気味の底部。外面タテハケ、内面ナデ。	外面保ける。
〃 -49	〃	壺	— — 12.4	—	—	砂岩の小礫、石英・チャート・黒雲母の粗粒砂	外面タテハケ。内面ヘミガキ。	外面保ける、外底に横圧痕。
Fig24-50	1群	甕	18.8 — 19.2	1-B-1	—	長石・石英・角閃石の細・粗粒砂。 茶色	口縁は如意状に外反、内面に部分的な段をなす。口縁端部はつまみ出しで口唇に強いナデ、口唇は凹状を呈す。下縁に刻目、口縁外面に指頭状痕跡著。胴部外面タテハケ、口縁内面口下りハケ。	外面保ける。
〃 -51	〃	〃	18.4 — 18.8	〃	—	砂岩の粗粒砂を多く含む、石英・黒雲母など。 灰茶色	口縁端はつまみ出し、口唇方向に強くナデ。口内は凹状を呈す。外縁に刻目。外面タテハケ、内面ナデ。	〃
〃 -52	〃	〃	23.9 — 25.2	VH-B	—	長石・石英の細粒砂。 灰褐色	口縁部は断面三角形の粘土層を貼付、突帯下に指頭状痕跡著。上胴部はタテハケ。中位以下はタテを基調としつつ斜めの横位方向のハケ。内面は指頭による丁寧なナデ、下地にハケ。	外面全面保ける。下半は焼痕亦変し部露露
〃 -53	〃	〃	24.0 — — —	VI-B-2-a	—	砂岩の粗粒砂、小礫を多く含む。 角閃石。 濃茶色	口縁は直立気味に立ち上がる。端部は外方につまみ出し、強い刻目を施す。口縁下に断面三角形の突帯を貼付。外面口コナデ、内面はヘミガキ。	—
〃 -54	〃	〃	— — 7.8	—	—	チャートの小礫を多く含む。	外面ハケ	内外面保けるが内面が微しい。
〃 -55	〃	〃	— — 8.4	—	—	石英・長石・雲母の粗粒砂を多く含む。	台形状厚手の底部。外面タテハケ、焼痕後穿孔。	内・外面保ける。
〃 -56	2群	壺	13.2 — —	I	—	石英・長石の細粗粒砂を含む。 濃茶色	口縁部は強く外反、外面指頭状痕跡著。口唇面取り。外面タテハケ、内面口コナデ+部分的にヘミガキ。	—

表 8 遺物觀察表 5

挿入番号	遺構番号	器種	口縁器高 口径 底径 法量 (cm)	分類	胎土 色調	特 徴	備 考
Fig24-57	2 群	壺	13.0 — —	I	石英・長石の細 粗粒砂を含む。 茶色	口縁部は強く外反。口唇は凹状、 外面指頭圧痕。内外面ナデ。	
〃 -58	〃	〃	13.2 — —	〃	〃	口縁部は強く外反。口唇は面を なす。口縁外面指頭圧痕。頸部 外面タテハケ。口縁部内面ヨコ ハケ+ヘラミガキ	
〃 -59	〃	〃	19.2 — —	II	チャートの粗粒 砂、小礫を含む。 淡茶色	フツパ状に外反する口縁部。口 唇は1条の沈線+上・下に刻目。 頸部は4条のヘラ描沈線とその 下に2条の刻目突帯を貼付。内 面にも1条の突帯。外面タテハ ケ(ハケ+沈線。沈線脇に下デ)。 内面ハケ+ナデ。	内面は突帯まで煤 ける。
〃 -60	〃	〃	10.7 — — —	IV	長石・石英・砂 岩の細粒砂 暗茶色	無角砂。口縁部は弱く外反。頸 部をつまんで強くヨコナデ。外 面はタテハケ+ヨコヘラミガキ。 内面は指頭ナデ+ヨコヘラミガ キ。断面に粘土層接合部を認む。 (粘土層幅 3 cm)	腹口縁で欠損。
〃 61	〃	甕	20.4 — —	VI-A-②-③	石英・砂岩の細 粗砂。 灰茶色	口縁端部を外方につまみ出す。 口唇は凹状をなし外縁に刻目。 口縁下にしっかりした刻目突帯。 突帯は器壁にうめ込むように貼 付し。刻目原体は双線状。胴部 外面タテハケ。	
〃 -62	〃	鉢	36.0 — — —	I	砂岩の小礫・粗 粒砂。 淡茶色	内湾気味に立ち上がる上腹部 から。口縁はゆるやかに外反。 口唇部はナデにより凹状を呈す。 口縁下にしっかりした刻目突帯。 突帯上下をナデ。外面右下りのハケ。 内面右下りハケ。胴部内面ヨコ ヘラミガキ。	
〃 -63	〃	壺	9.4 — — —		チャートの粗粒 砂を多く含む。 浅黄茶色	胴部下半球状。底部はうす い。外面ヨコ及び右下りのハケ。	外面底部付近以外 は煤ける。
〃 -64	1 群	土製石器	長 6.6cm 短 3.8 厚 0.6 重 21 g			全面に磨痕。刃部は透り出され ていない。	
Fig25-65	2 群	甕	19.4 — — —	I-A-②	風化砂岩・石英 の粗粒砂。 茶褐色	口縁は如意状に外反。口唇は丸 くおさめる。口縁部内面ヨコハ ケ。外面指頭圧痕。胴部外面タ テハケ。	外面煤ける。
〃 -66	〃	〃	18.6 — —	II ①	石英・砂岩の 細・粗粒砂。 にぶい黄茶色	口縁端部をつまみ出し。底部に 細い刻目。上腹部に4条のヘラ 描線。上腹部外面タテハケ。中 位以下右下りのハケ。内面はナ デ。	〃
〃 -67	〃	〃	21.6 — — —	I-B-②	石英・砂岩・花 崗岩の粗粒砂を 多く含む。 黄茶色	口縁部は如意状に外反。口唇は 凹状を呈す。上腹部に8条まで ヘラ描沈線。内面はヘラミガキ。 黄茶色	内・外面煤ける。
〃 -68	〃	〃	26.6 — —	I-B-③	砂岩の小礫。石 英・雲母の細粗 粒砂。 灰黄褐色	内湾気味に立ち上がる上腹部か ら。口縁が外反。端部をつまみ 出して強くヨコナデ。下端に細 い刻目。上腹部に6条以上のヘ ラ描沈線を認める。 外面ヨコナデ。内面ヨコ方向ヘ ラミガキ。	外面煤ける。

表 9 遺物観察表 6

種別番号	遺構番号	器種	口径 器高 腹径 底径 法量 (cm)	分 類	胎 土 色 調	特 徴	備 考
Fig25-69	2群	甕	22.4 — —	I-A-①	砂岩の小礫、石 英・チャート の細・粗粒砂	口縁部は強く外反、口唇は丸く おさめる。胴部外面タテハケ。 上胴部内面ヨコハマミガキ。	外面煤ける
＊ -70	＊	＊	25.2 — —	II-①	石英・角閃石・ 砂岩の細・粗粒 砂 淡茶色	口縁端部は外方につまみ出し、 口唇は面をなす。外端に細い刻 目。口縁外面に指頭圧痕。 上胴部外面に4条のヘラ描洗線。 底にドテあり、外面ハケ、内面 ナデ。	＊
＊ -71	＊	＊	21.8 — —	I-A-①	風化砂岩、石英 の細・粗粒砂。 茶褐色	直立気味の上胴部から口縁が如 意状に外反、口唇は丸くおさめ る。口縁部内外面ヨコナデ、口 唇細目、胴部外面タテハケ、内 面はナデ。	＊
＊ -72	＊	＊	— — 8.7		石英・長石の細 粗粒砂を多く含 む。 赤茶色	断面台形状の底部。 外面に灘物状圧痕、内外面ナデ。	外面被熱赤変煤け る。
＊ -73	＊	磨製石器	長 8.2cm 刃 2.5 厚 0.4 重 15g		貞岩		
＊ -74	3群	甕	— — —	I-A-①	茶色	口縁部は如意状に外反、口唇部 は丸くおさめ刻目。上胴部に8 条までヘラ描洗線を認める。胴 部外面タテハケ、内面ヨコハ ミガキ。	外面煤ける。
＊ -75	＊	＊	17.0 — —	I-A-②	風化砂岩の小礫、 石英・雲母の粗 粒砂を含む。	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外 面本理の荒いたテハケ。	＊
＊ -76	＊	＊	21.4 — —	＊	＊ にぶい褐色	口縁部は如意状に外反し、内外 面ヨコナデ。胴部外面本理の荒 いたテハケ、内面指頭圧痕顕著。	
＊ -77	＊	＊	25.6 — 25.8	III-A-②	雲母を中心とす る細・粗粒砂。	頂部が著しくくびれ、口縁に向 かって大きなカーブを描いて上 立ち上がる。口唇は面をなす。 口頂部外面はヨコハケと	
＊ -78	＊	＊	22.8 — —	I-A-②	砂岩の小礫、石 英・黒雲母の 細・粗粒砂。 灰茶色	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外 面本理の荒いたテハケ、内面指 頭圧痕顕著。	
Fig26-79	D層	甕	16.4 — —	I	石英・砂岩・角 礫石の細粗粒砂 茶色	口縁部は強く外反、口縁部外面 ヨコナデ。頂部外面タテハケ＋ 7条のヘラ描洗線。 内面ヘラミガキ、口唇面取り。	
＊ 80	＊	＊	11.1 — 15.4	III	石英・長石の細 粗粒砂。 若色	胴部中央に最大径をもち、口縁 部はく字状に屈曲。	
＊ -81	＊	甕	19.0 — —	III-A-①	チャート・石 英・長石の細粗 粒砂を多く含む。 茶色	口縁部は大きく外反、口唇は面 取りハケ状原体で細い刻目。上 胴部に7条までヘラ描洗線を認 む。外面タテハケ、内面は石下 りのハケ。	
＊ -82	＊	＊		I-B-①	砂岩・石英の細 粗粒砂。 灰茶色	口縁端部をつまみ出しヨコナデ。 口唇部は凹状をなし、端部に刻 目。上胴部外面に7状ヘラ描洗 線、洗線帯の下に刺突文を配す。 外面タテハケ。	内・外面煤ける。

表10 遺物観察表 7

埋蔵番号	通構番号	器種	注量 cm ²	口径 高 胴径 底径	分類	胎土 色調	特徴	備考
Fig26-83	D層	甕		19.2 - 22.8 -	II-1:	石英・角閃石の 細粗粒砂。 濃茶色	最大径を腹部に有し、口縁部は 短く外反。端部をつまみ出しヨ コナデ。口縁部は凹状を呈し、 端部に刻目。上胴部外面に7条 のヘラ描沈線。沈線帯下に刺突 列点文を配す。外面タテハケ。 内面は部分的に右下りのハケ。	
〃 - 84	〃	〃		18.0 - - -	III B-1:	チャート・石 英・砂岩の細粗 粒砂。 茶色	最大径を腹部に有す。口縁部は 大きく外反し端部をつまみ出し てヨコナデ。口縁部は凹状をな し、端部に刻目。上胴部に9条 のヘラ描沈線。沈線帯下に刺突 列点文を配す。外面タテハケ。 内面ナデ調整。	外面裸け、被熱赤 変。
〃 - 85	〃	〃		36.2 - - -	I-B-3:	砂岩、角閃石の 細・粗粒砂。 灰茶色	最大径を腹部に有す。口縁部は 短く外反し、端部をつまみ出し ヨコナデ。口縁部は凹状を呈し 端部に刻目。上胴部に7条のヘ ラ描沈線。沈線帯の下に刺突列 点文を配す。口縁部内面ヨコハ ケナデ。口縁部外面右下りの ハケナデ。腹部外面右下りの ハケ	外面裸ける。
〃 - 86	〃	〃		19.0 - - -	I-B-1:	砂岩の小礫、チ ャート、角閃石 の細粗粒砂。 濃茶色	口縁部は如意状に外反、端部を つまみ出しヨコナデ。口縁部は 面をなし、端部に刻目。外面タ テナデ。口縁部内面右下り、胴 部内面指頭状。	〃
〃 - 87	〃	〃		26.4 - - -	I-A-①:	砂岩の小礫、石 英の細粗粒砂。 明茶色	口縁部は指頭でつまみ強く屈曲、 内面に稜をなす。端部は丸くお さめ。口唇に刻目。口縁部内外 面ヨコナデ。腹部外面タテハケ。 内面はヨコヘタミガキ。	
〃 - 88	〃	〃		21.8 - - -	I-A-1:	石英・チャ ート・風化、砂岩 の細・粗粒砂。 暗茶色	口縁部は強く外反。口縁端部は 丸くおさめ、刻目。口縁部外面 ヨコナデ。胴部外面タテハケ。 内面ヨコヘタミガキ。	外面裸ける。
〃 - 89	〃	〃		18.0 - - -	I-B-1:	石英・角閃石・ 長石の細粒砂。	口縁部はく字に外反。端部をつま み出してヨコナデ。口縁部は凹状 をなし、端部に刻目。	
〃 - 90	〃	〃		19.8 - 20.2	I-A-1:	チャートの粗粒 砂を多く含む。 灰色	口縁部は、丸味を帯びたカーブ を描いて外反。口唇は面をなし、 端部に刻目。上胴部に反線を4 帯装し、沈線帯間に3条の刺突 列点文。外面タテハケ。口ハケ 沈線。内面ナデ。	外面全面裸ける。
〃 - 91	〃	〃		21.6 - - -	I-B-1:	チャート・石 英・長石の細・ 粗粒砂。 茶色	口縁部を外方につまみ出しヨコ ナデ。口縁部は取り、端部に刻 目。外面タテハケで口縁部付近 はヨコナデ。口縁部内面ハケ。 胴部内面タテナデ。内面及び断 面に粘土密着台部痕を認める。	〃
〃 - 92	〃	〃		22.1 - - -	II-1:	石英・砂岩・チ ャートの細・粗 粒砂。 淡茶色	口縁部をつまみ出し、強くヨ コナデ。口唇は面をなし、端部 に刻目。上胴部に6条のヘラ描 沈線。外面タテハケ。口ハケ 沈線。口縁部内面右下りのハケ。	〃
〃 - 93	〃	〃		19.4 - - -	I-A-1:	石英・角閃石・ 砂岩・長石・チ ャートの細粗粒 砂。 濃茶色	口唇は丸くおさめ細い刻目。上 胴部外面に無いヘラ描沈線を7 本まで確認。外面タテハケ。口 ハケ沈線。内面ヘタミガキ。 ミガキ後顔料を塗付した可能性 あり。	

表11 遺物観察表 8

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	分類	胎土 色調	特 徴	備 考
Fig26-94	D層	甕	24.0 — —	I-B-2	砂岩の小礫、チャート、角閃石の細粗粒砂、濃茶色	口縁部は短く外反し、端部をつまんで横ナデ、口唇は面をなす。外面タテハケ、内面ヘラミガキ。	内面は全面煤け、カーボンカッター状に付着。
Fig27-95	〃	〃	17.4 — —	VI-B	角閃石、石英の細粗粒砂。砂岩の小礫。	口縁部はゆるやかに外反。外面にしっかりと突帯を貼付。内面に沈線あり。突帯の上下をつまんで強くヨコナデ。	
〃 -96	〃	〃	18.4 — —	VI-A-(2) ④	砂岩の小礫、角閃石、石英・長石の細粗粒砂。濃茶色	口縁部をつまんで強いヨコナデ。口唇は面をなし端部に刻目。口縁下にしっかりと刻目突帯。	
〃 -97	〃	〃	23.4 — —	VI-B-1-(6)	石英、角閃石の細粒砂。砂岩の粗粒砂。	口唇は水平な面をなし、断面方形の突帯貼付。突帯の上下、ヨコナデ。胴部外面本理の粗いたテハケ、ヨコ方向ヘラミガキ。	
〃 -98	〃	〃	18.4 — 19.2	VI-B ①⑤	角閃石、砂岩、チャート石英の細・粗粒砂を多く含む。灰茶色	口縁部に最大径を有し、内腔気味に立ち上がる。口唇は面をなし、口縁下に断面方形の貼付突帯。突帯下に指頭凹痕顯著。突帯上・下及び口縁部内・外面ヨコナデ。外面本理の粗いたテハケ、内面は指頭によるナデ。	突帯下全面煤ける。
〃 -99	〃	〃	— — —	VIII	チャート、石英の細粗粒砂。淡茶色	口縁部はゆるやかに外反、端部を下方向につまみ出す。外面に3条まで断面三角形の微隆起帯を貼付。	
〃 -100	〃	鉢	22.1 — —	II	砂岩の小礫、石英、角閃石の細粗粒砂。淡茶色	口縁部に向かって直線的に外方に立ち上がる。口唇部は面をなす。	
〃 -101	〃	甕	— — 8.0		チャート・雲母、角閃石、石英の細粗粒砂。	外面ハケ調整。	外面は煤け、内面にカーボン付着。外底に線状痕3個 長軸：短軸＝ 7.2：3.9mm 6.1：4.0mm 6.0：4.0mm
〃 -102	〃	〃	— — 9.2		石英・長石・雲母の細粗粒砂を多く含む。茶色	底盆部に指頭凹痕あり。外底にアンベラの凹痕。	
〃 -103	〃	甕	— — 6.8		チャートの小礫・粗粒砂を多く含む。淡茶色	底盆部に指頭凹痕あり。外面右下りのハケ調整。	輸入品の可能性あり。
〃 -104	〃	甕	— — 7.6		チャート・砂岩の小礫・雲母、石英の細粗粒砂。茶色	外面タテハケ	外面煤ける。外底煤けなし。
〃 -105	〃	〃	— — 9.3		長石・石英・角閃石、チャートの細粗粒砂。茶色	断面形状の底部。外面タテハケ。内面サブ。	
〃 -106	〃	〃	— — 8.0		石英・長石、チャート・角閃石の細・粗粒砂。	外面タテハケ。	内面の底部のみ煤けず、胴部内・外面煤け。
〃 -107	〃	〃	— — 10.0		石英・長石の細・粗粒砂。茶色	外底線状の凹痕	

表12 遺物観察表 9

挿入番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	分類	胎土 色調 石 材	特 徴	備 考
Fig27-108	D層	ノミ状 石斧	輪 1.0 厚さ 1.3		石材 結晶片岩。	全面丁寧に研磨されている。刃 部は鋭い。	
Fig31-110	VII層	壺	13.8 — — —	II	チャートと細粗 粒砂を多く含む。	二重口縁壺で、端部は尖る。	
〃 -111	〃	〃	23.6 — — —	IV	チャートの小礫 を多く含む。 淡黄茶色	口縁下に断面三角形の突起、外 面下地に右上りの叩き。口縁端 部は丸くおさめる。	
〃 -112	〃	甕	14.8 — 17.2 —	I-B	砂岩他の粗粒砂 を少量含む。 淡褐色	直立気味の口縁部が長く立ち上 がる。口縁部接合部外面に指頭 圧痕顕著。胴部外面上半は右上 りの叩き+ナデ+部分的にハケ。 胴部内面はハケ+ナデ。	外面 全面煤ける。
〃 -113	〃	〃	19.2 — 16.8 —	〃	粗粒砂を少量含 む。 茶色	口縁部は直線的に外方に立ち上 がり、端部はわずかに外反。胴 部はほとんど張らない。口縁部 内面ヨコハケ。外面は、にぶい 双線が2筋タナに施される。口 縁部接合痕が明瞭に残る。	外面は煤が部厚く 付着。
〃 -114	〃	〃	15.8 — — —	I-A	チャート・石 英・角閃石の細 粒砂少量。 茶色	口縁部外面指頭圧痕顕著。口縁 端部ヨコナデ。	
〃 -115	〃	〃	14.6 — — —	I-A	石英・風化砂岩 の粗粒砂を少量 含む。 淡茶色	口縁部は直線的に外方に立ち上 がり、口唇は面取る。内面右下 りの叩き調整。外面指頭圧痕顕 著。	外面煤ける。
〃 -116	〃	〃	15.2 — 13.3 —	〃	〃	口縁部は直線的に外方に立ち上 がり、口唇は丸くおさめる。上 胴部が張る。口縁部外面右上 りの叩き、上胴部外面右上りの叩 き、中位は水平方向の叩き、上 胴部断面に粘土帯接合部を認む。	〃
〃 -117	〃	〃	15.6 — — —	〃	風化砂岩他の粗 細粒砂を少量含 む。 灰茶色	口縁部は直線的に立ち上がり、 口唇は丸くおさめる。内・外面 指頭圧痕顕著。	内・外面煤ける。
〃 -118	〃	〃	20.1 — — —	〃	石英・砂岩の細 粗粒砂を少量含 む。 黄茶色	わずかに内湾気味に立ち上がり、 端部は丸くおさめる。外面指頭 圧痕顕著。内外面にベタ状体による 圧痕あり。	外面煤ける。
〃 -119	〃	〃	21.2 — — —	II	砂岩・石英の粗 粒砂を含む。 濃茶色	口縁部は丸味を帯びて外反。端 部は丸くおさめる。口縁部外面 タテハケ。胴部内面ヨコハケ	内・外面共に煤け、 カーボンが厚く付 着。
〃 -120	〃	〃	14.8 — — —	I-A	砂粒をほとんど 含まない。 濃茶色	丸味をもった上胴部から、口縁 部はく字状に外反。端部は丸く おさめる。口縁部内外面指頭圧 痕+ナデ。	
〃 -121	〃	〃	20.2 — 24.0 —	II	チャートの小礫 を含む。 橙茶色	口縁部は内面に鋭い稜をなして、 く字状に外反。全面叩き（右上 り）。口縁部叩き出し、断面に 粘土接合痕を認める。	胴部外面下半は全 面煤ける。搬入品 の可能性あり。
〃 -122	〃	〃	16.6 — — —	I-A	砂粒をほとんど 含まない。 淡黄茶色	断面に口縁部の接合痕を認める。 口縁部外面にベタ状体による 圧痕。内面は指頭圧痕。	外面煤ける。
〃 -123	〃	〃	18.8 — — —	I-B	風化砂岩、雲母、 石英の細粗粒砂 を多く含む。 淡茶色	口縁部は、ゆるやかなカーブを 描いて外反。内面には接合時に 生じた段あり。外面ナデ。内面 指頭圧痕。	外面全面煤ける

表13 遺物観察表10

採回番号	遺構番号	器種	口径 器高 口径 底径 法量 (cm)	分類	胎土 色調 石質	特 徴	備 考
Fig31 124	VII 層	甕	21.2 — —	I・A	チャートと主とする粗粒砂を含む。 茶色	口縁は直線的に立ち上がり、端部近くで外反。端部は丸くおさめる。口縁の接合部外面に指頭圧痕顯著、外面ヨコハタ、内面ナデ。	
Fig32 125	〃	〃	— — 18.2	—	風化砂岩の粗粒砂を多く含む。 淡茶色	わずかに肩が張る。内・外面ナデ調整を基調とし、胴外面下半にはヨコ方向のヘラミガキ、断面に接合痕を認める。	
〃 126	〃	〃	— — —	—	角閃石地の細粒砂を含む。 淡灰茶色	外面タテハタ・タテ方向ヘラミガキ 内面ナデ及びヘラ調整。	
〃 127	〃	〃	— — 18.6	—	石英・黒雲母の細・粗粒砂。 橙茶色	下胴部に最大径。外面右上下りを基調とする叫き。内面にタテ方向の沈線が無秩序に走る。内底。	外面底部付近以外は全面煤ける。
〃 128	〃	〃	— — 20.4	—	砂粒をほとんど含まない。 淡茶色	上胴部に最大径を有す。外面中位ヨコ方向の粗粒なハタ。下位にヘラミガキと弱いヘラ削り。内面ナデ。断面に接合痕あり。	外面煤ける。 内面下位に炭化した腐食物付着。
〃 129	〃	〃	19.2 — —	I・A	石英・チャート、砂岩の細・粗粒砂。 暗灰茶色	口縁部はわずかに内凹気味に立ち上がる。口縁部断面に幅広い接合部を認む。屈曲部外面強いヨコナデ。口縁部内外面指頭圧痕顯著。	外面全面激しく煤ける。
〃 130	〃	鉢	17.2 — 15.6	III	石英・雲母の細粗粒砂を含む。 灰茶色	口縁部は直線的に立ち上がり、口唇は丸味をおびた面をなす。口縁部接合痕を認む。接合部外面には指頭圧痕が顯著。	
〃 131	〃	高坏	— — —	—	石英・雲母の細粗粒砂を多く含む。 桃茶色	脚は、坏底部から直線的に開く。タイプ 内・外面ナデ。	外面赤彩。
〃 132	〃	〃	16.2 — —	—	チャート・黒雲母の細・粗粒砂。 灰茶色	坏底部から直線的に立ち上がる口縁部。口唇は丸味を帯びた面。坏底部と口縁の立ち上がり部外面に接合で生じた段部あり。外面ヨコナデ。内面ミガキ。内底付着にヘラ原体による圧痕が残る。	
〃 133	〃	〃	— — —	—	石英・雲母・風化砂岩の細粗粒砂。 茶色	胴大部から坏部が分離。エンタシス状の脚から腰が大きく外反。外面タテ方向ヘラミガキ。内面ヘラ削りによる圧痕。	
〃 134	〃	〃	— — —	—	風化砂岩の小礫・石英細粗粒砂。 桃茶色	坏底部から大きく開く脚部。	
〃 135	〃	〃	16.6 — —	—	石英・長石・黒雲母の細・粗粒砂。 桃茶色	口縁部は直線的に立ち上がり、口唇は丸くおさめる。底部との接合部に弱い段。外面ヨコナデ。内面ヨコハタ・ヨコナデ。	
〃 136	〃	鉢	17.2 — 16.3	III	石英・風化砂岩の細・粗粒砂。 茶色	肩が張り出し、口縁は直線的に立ち上がる。口唇は丸味をおびる。口縁部接合部内面に指頭圧痕が顯著。口縁部外面ヘラミガキ。胴部外面強いヘラ・ナデ・ヘラミガキ。	外面煤ける。
〃 137	〃	手づくね土器	5.3 5.0 6.0 —	—	チャート、長石、風化砂岩、雲母の細・粗粒砂を多く含む。 灰茶色	口縁部内外面指頭圧痕顯著。	外面の半分が煤ける。

表14 遺物観察表11

種別番号	遺構番号	器種	口径 法量 (cm)	器高 胴径 底径	分類	胎土 調色 (石目)	特徴	備考
Fig32-138	VII 格	壺	— — 4.2	— — —		風化砂岩の小礫・ 炭母・長石の細 粗粒砂。 淡茶色。	平底。内面ハケ。外面ナデ調整。	
〃 -139	〃	管玉	全長 全幅 全厚 重量 孔径	2.3 0.45 0.5 0.6g 1.5mm		(管玉)		
〃 -140	〃	叩石	全長 全幅 全厚 重量	10.2 4.5 4.5 630g		(砂岩)		
Fig33-141	砂礫層	壺	12.0 — 12.0 —	— — — —	II-A	石英・角閃石・ チャートの細粗 粒砂。 茶色。	口縁部はく字状に外反。直線的 に立ち上がり。口唇は丸い。肩 盤玉状の胴部。断面に口縁部接 合面を認む。内面に指頭状痕顕 著。胴部外面ハケ調整。	外面煤ける。
〃 -142	〃	甕	14.2 — — —	— — — —	I-A	砂岩・チャート の小礫。石英・ 角閃石の細粗粒 砂。 淡茶色。	内面に丸味を帯びた後をなし、 く字状に外反。口唇は面をなし。 端部内外面はコナデ。外面右 上り。内面右下りのハケ。	
〃 -143	〃	〃	13.2 — — —	— — — —	II	チャートの細・ 粗粒砂を多く含 む。 褐色。	口縁はく字状に外反。口唇は尖 り気味。上胴部の隘口縁から剝 離。	
〃 -144	〃	〃	20.4 — 20.0 —	— — — —	I-A	チャートの粗粒 砂を多く含む。 淡茶色。	肩が傾り出し。口縁は直線的に 立ち上がり。口唇は丸い。上胴 部及び口縁部の接合裏を認む。 接合部付近内外面に指頭状痕顕 著。内外面・ナデ。	内・外面激しく煤 ける。
〃 -145	〃	〃	17.0 — — —	— — — —	〃	石英・砂岩の細 粗砂。 淡茶色。	口縁部は内面に稜をなして、く 字状に屈曲。直線的に長目に立 ち上がる。端部は丸い。	
〃 -146	〃	高坏	— — — —	— — — —		砂岩の小礫。角 閃石・石英の細 粗粒砂。	直線的に下降する脚部から裾部 は屈曲して外反。端部は面取り。	内・外面部分的に カーボン付着。
〃 -147	〃	〃	— — — —	— — — 9.5		砂岩小礫・石英・ 角閃石の小礫。 淡茶色。	脚部は、上部から大きなカーブ を描いて外反。端部は丸くおさ める。	
〃 -148	〃	〃	— — — —	— — — 12.2		〃	比較的既脚。脚部は外底部から 大きくカーブを描いて外反。端 部は丸くおさめる。	
〃 -149	〃	〃	— — — —	— — — —		精選された胎土 褐色。	脚柱部はエンタシス状を呈す。 裾は強く屈曲して外反。外面ハ ラミガキ。	
〃 -150	〃	鉢	9.8 6.2 — 3.8	— — — —	I	チャートの小礫・ 粗粒砂。 桃茶色。	内湾して立ち上がり。機状を呈 す。端部は丸くおさめる。内外 面ヘラミガキ。	

表15 遺物観察表12

2 区

順列番号	遺構番号	器種	口径 法量 口径 底径 (cm)	分類	胎土 色調 (石材)	特徴	備考
Fig.90-152	XVI 層	壺	10.6 15.0 14.3 2.6	H-B	石英粗粒砂・ 黄茶色	やや肝の張った偏球形の胴部を有し、口縁部は直線的に立ち上がり、端部は丸くおさめる。断面及び内面に明瞭な粘土帯接合痕を認む。内面は、上半に指頭圧痕顕著、下半は丁寧なヨコナデ。口縁部外面明き+ヨコハケ、胴部外面は明き+ヘラミガキ。	胴部外面下半、 タール状に炭化物が付着。
〃 -153	〃	甕	16.2 - 16.8 -	I-B	石英の細・粗粒砂を多く含む。 暗茶色	口縁は、くびれ部から直線的に長く立ち上がる。端部は丸くおさめる。上胴部及び口縁部外面に右よりの明き。くびれ部付近ナデ。上胴部及び口縁内面指頭圧痕顕著。	外面は全面煤ける
〃 -154	〃	〃	13.9 23.0 16.4 1.4	I-A	チャート、風化砂岩の粗粒砂を多く含む。 暗茶色	随弾型を呈する胴部から、口縁はわずかに内寄気味に長く立ち上がる。端部は丸くおさめる。胴部外面下半右より明き、上半はナデ、胴部断面のミヤ所に粘土帯接合痕を認む。胴部中央の接合部で段となす。胴部内面丁寧なヨコナデ。	〃
〃 -155	〃	壺	13.2 - 20.8 -	I	石英・チャートの細・粗粒砂を含む。 淡茶色	口縁部は屈曲部内面に接をなしてく字状に外反、直線的に外方に伸びる。最大径は胴部中央に有す。胴部内面及び断面に粘土帯接合痕を明瞭に認む。(口巾 6.5cm)。外面はナデを基調とし、内面には接合部に指頭圧痕顕著。	〃
〃 -156	〃	甕	17.2 - - -	I-A	砂岩・長石の粗粒砂。 淡黄茶色	口縁部は直線的に立ち上がる。断面に上胴部及び口縁部の接合痕を明瞭に認む。口縁外面、上胴部外面に右よりの明き。口縁部接合部付近は指頭圧痕+ナデ。	〃
〃 -157	〃	〃	14.8 25.5 19.2 4.4	〃	石英・角閃石の粗粒砂。	口縁部は、く字状に外反し長く立ち上がり端部付近でわずかに外反。端部は丸くおさめる。最大径を上胴部に有する。胴部内面及び断面に粘土帯の接合痕を明瞭に認む。(口巾 4 ~ 5 cm)。胴部外面明き成形で、接合部で方向が変わる。口縁部内外面ナデ。	〃
〃 -158	〃	鉢	15.0 - - -	II	石英・角閃石・風化砂岩の細粗粒砂。 桃色	ゆるやかに内湾して立ち上がる。口唇は丸い。擬口縁で割離。	
〃 -159	〃	高杯	17.6 - - -		石英・角閃石・長石の細・粗粒砂・風化砂岩の小礫。	底部から丸味をもって立ち上がり、口縁はわずかに外反。口縁は丸い。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ヘラミガキ。	
〃 -160	〃	〃	37.4 - - -		砂岩小礫・角閃石・石英・長石の細・粗粒砂。 淡茶色	口縁部はゆるやかに外反、端部は丸くおさめる。外底部外縁に弱い段。口縁部内外面横方向のナデ、外面下半ヘラミガキ。柱状部との断面を観察可。	
〃 -161	〃	甕底部	- - - -		チャートの小礫・粗粒砂を多く含む。	丸底・内外面ナデ。	
〃 -162	〃	壺底部	- - - 8.0		砂岩の小礫、雲母を含む。 淡茶色	厚く、わずかに凹状を呈する底部。	

表16 遺物観察表13

標本番号	遺構番号	器種	口径 器高 口径 法量 (cm)	分類	胎土 色調	特 徴	備 考
Fig39-163	XXVI 層	甕	18.5 27.6 —	I A	チャート・砂岩の小円珠を多く含む。他に石英・長石などの細粗粒砂。 黄褐色	口縁部は長く立ち上がり、肩部付近でわずかに外反。口縁内・外面はほぼ同様の厚さ。胴部外面に粘土層単位と考えられるラインが認められる。(巾3.5～4cm・丸底)	外底付近以外は全面煤ける。
※ -164	※	※	22.0 27.8 20.5	I B	砂岩の小礫・石英・長石の細・粗粒砂 灰黄色	肩部のくびれは弱く、口縁は長く立ち上がる。内外面共に指頭状痕顕著。口縁部接合部外面はタテ方向のハケが顕著。口縁部内外面ほぼ同厚。	※
Fig40-165	※	※	19.2 23.7 19.0 4.4	I B	砂岩の小礫・石英・角閃石の粗細粒砂 淡茶色	肩部のくびれは弱く、口縁は長く立ち上がり肩部は丸くおさめられる。外面に水平方向の叩き。胴部外面はナデ。下位はタテハケ。ヘラミガキを施す。	外面全面煤ける。
Fig41-167 XXVII 層	深鉢		26.4 — —		石英・チャート・角閃石・長石の細・粗粒砂を多く含む 濃茶色	口縁部が外方に肥厚。胴部全細文のタイプであろう。	
※ -168	XXIX 層 上面	甕	15.0 21.6 15.9 1.0		チャート・砂岩の小礫・粗粒砂を含む 黄茶色	口縁部は内面に稜をなして十字状に屈曲。口縁部内外面ほぼ同厚。口縁部内外面右下りのハケ。胴部外面右下りの叩き。右下りのハケ。屈曲部内面に指頭状痕顕著。胴部内面右下りハケ。内面に粘土層の単位を認め。(巾3.5cm)	外底付近以外全面煤ける。
※ -169	XXVII 層	甕	— — —		砂岩・頁岩・チャートの細・粗粒砂。 桃茶色	二重口縁。外面は円形浮文に竹管の刺突。双線による山形文。	
※ -170	※	甕	— — —	III	角閃石・石英・チャートの細粗粒砂 灰茶色	口縁部端つまみ上げ。	搬入品
※ -171	※	甕	15.2 — — —		チャートの粗粒砂で占められる。 桃色	肩部下端に厚さ0.3cm、巾1cmの格子を施した粘土層を覆付。内外に屈曲した口縁部外面に2帯の櫛状波状文。口唇は面取り。	搬入品の可能性が強い。
※ -172	※	甕	14.3 — —	I A	チャート・砂岩の粗粒砂、小礫。 淡茶色	内・外面ナデ	内・外面煤ける。
※ -173	※	※	17.9 — —	II	長石・石英・チャートの細・粗粒砂。 灰茶色	口縁は内外に稜をなして十字状に屈曲。内・外面右下りのハケ。	※
※ -174	※	※	14.6 —	※	細・粗粒砂を含む。 淡茶色	口縁部外反。口縁外面タテハケ。内面水平及び右下りのハケ。下腹部内面指頭状痕。	外面煤ける。
※ -175	※	※	12.4 — —	※	石英・チャートの細粗粒砂を含む。 灰茶色	口縁部は丸味を帯びて外反。胴部外面はほぼ同様の厚さ。中位付近は右下りの叩き。断面及び内面に粘土層接合部を認め。(巾2cm前後)	※
※ -176	※	※	— 12.4		石英・チャート・長石の細・粗粒砂	胴部外面右下りの叩き。部分的にタテハケ。内面上位タテハケ。	※

表17 遺物観察表14

採回番号	遺構番号	器種	口徑 器高 胴径 法量 (cm)	分 類	胎 土 色 調 石 材	特 徴	備 考
Fug41-177	XXVII 域	罎	16.0 — 14.8	I	チャート・粗粒砂を多く含む 桃茶色	張り少ない胴部から口縁部が外反。端部は丸くおさめる。口縁部叩き出し。内面はコナデ。	
※ -178	※	※	— — 3.0		※ 灰茶色	外底本葉圧痕。外面右土りの叩き。内面はハケ原体によるクモノス状の圧痕。	
※ -179	※	※	14.6 — —	II	長石・砂岩・石英・角閃石の細粗粒砂。 にふい粉	口縁部は丸味を帯びて外反。口縁部内外面はコナデ。胴部内面横ハケ。外面タテハケ+ナデ	外面焼ける。
※ -180	※	※	— — —		チャート・砂岩の小礫・細粗粒砂を含む 桃茶色	長胴・丸底。外面右土りの叩き。内面右下りのハケ及びナデ。断面に粘土層の接合部を認め。印4.5～6 cm?	
※ -181	※	※	— — 5.0		チャート・頁岩の粗粒砂を含む。 橙茶色	外面上部は叩きをタテナデで消す。外底付近水平方向の叩き。内面は右下りのハケ	
※ -182	※	高坪	— — 2.4		チャート・砂岩の小礫粗粒砂。 淡茶色	わずかにくぼんだ上底。外面叩き。接合部で方向が異なる	外底付近以外は全面焼ける
※ -183	※	※	— — —		砂岩の小礫・石英・チャート・角閃石の細粗粒砂	比較的深い唇部を有し。外面屈曲部に強い接をなす。内面右下りのハケ。	

表18 遺物観察表15

写真図版

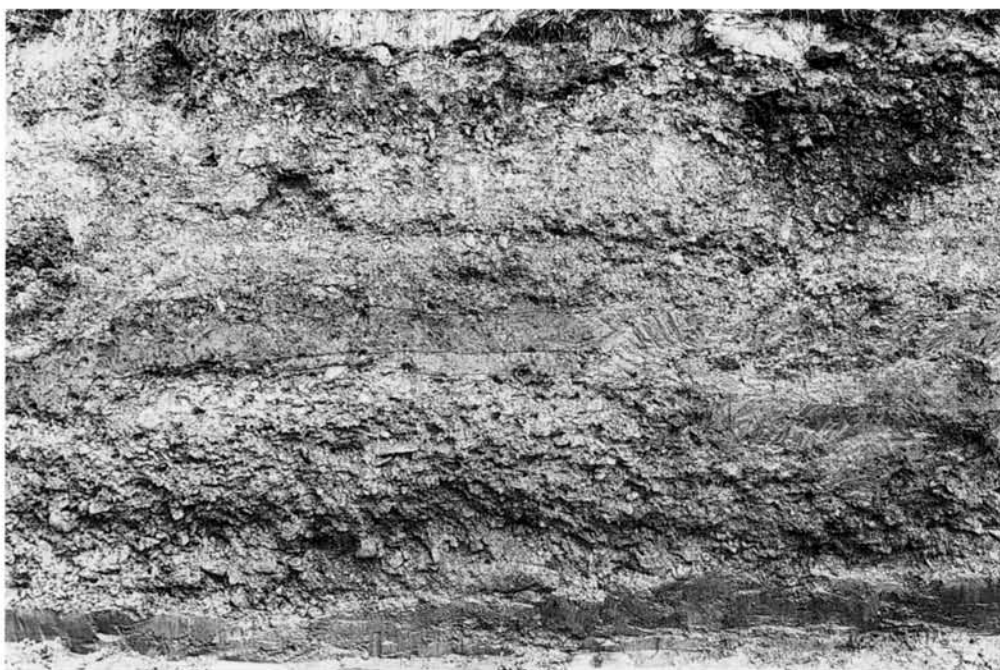


西ノ谷遺跡全景（北東から）



同上（北から）

PL10



1区 東壁



1区 南壁

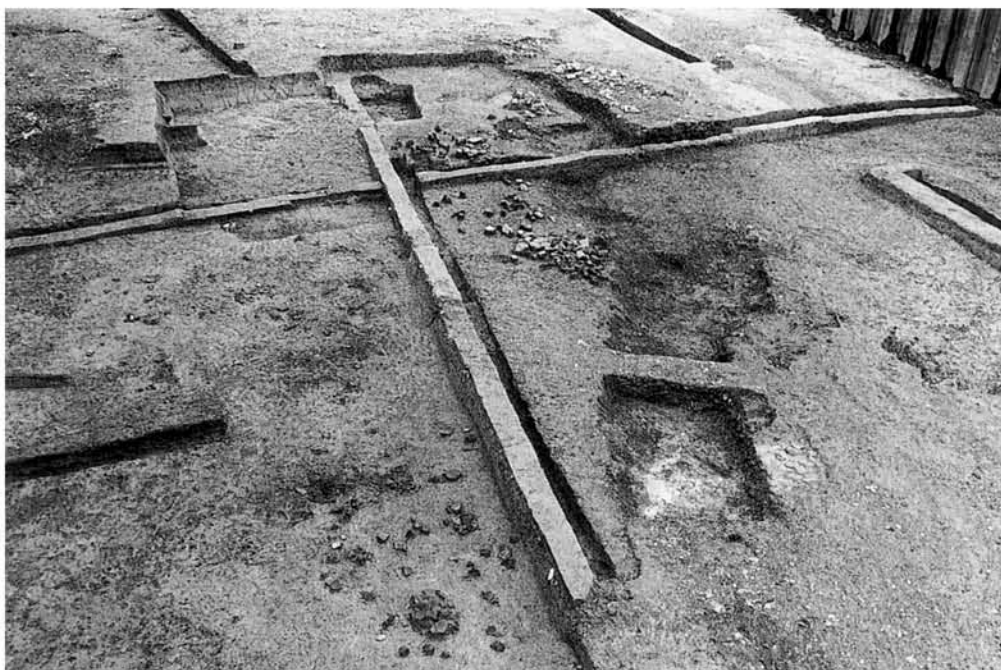


1区 南壁



1区 TR3 北壁セクション (SD1 付近)

PL12



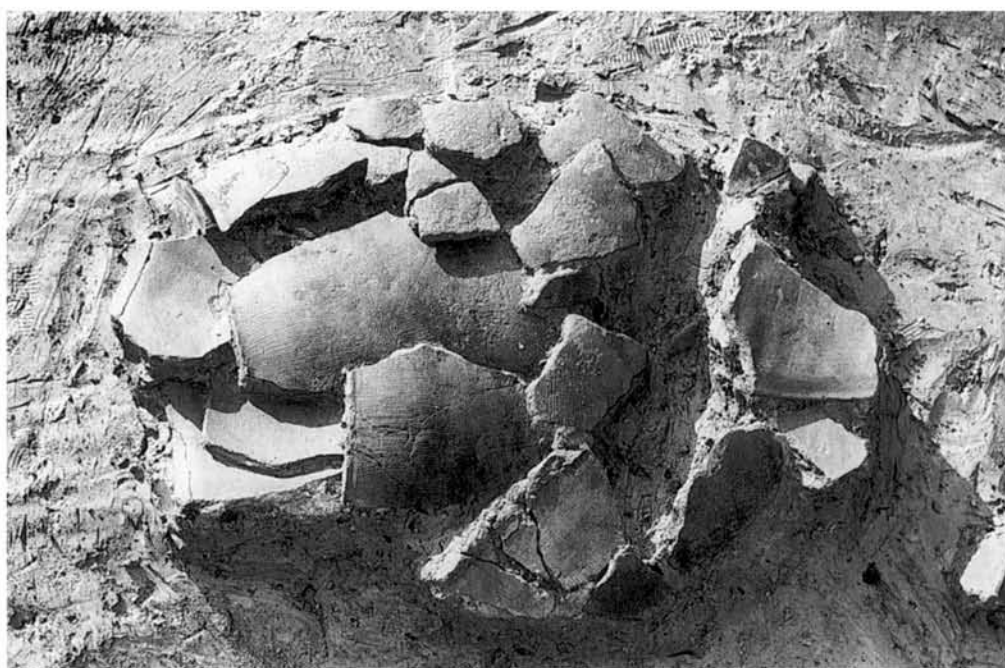
1区 弥生前期 1～3群の遺物出土状況（北から）



1区 弥生前期 集石2検出状況



1区 弥生前期土器集中出土状況



同上 (52)

PL14



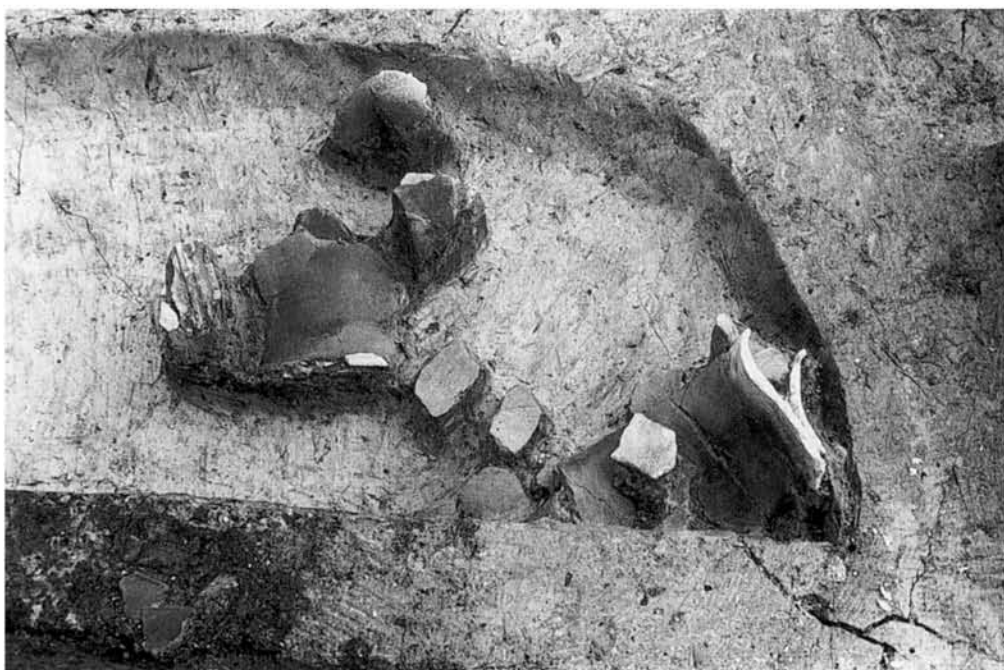
SK 1 検出状況



同上

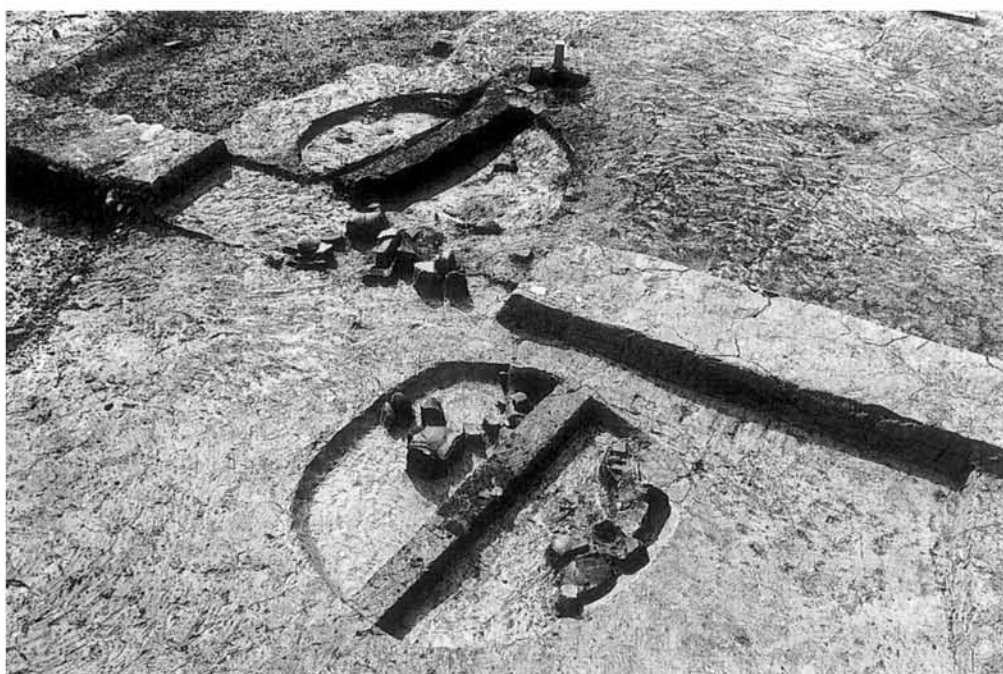


SK 1 遺物出土状況

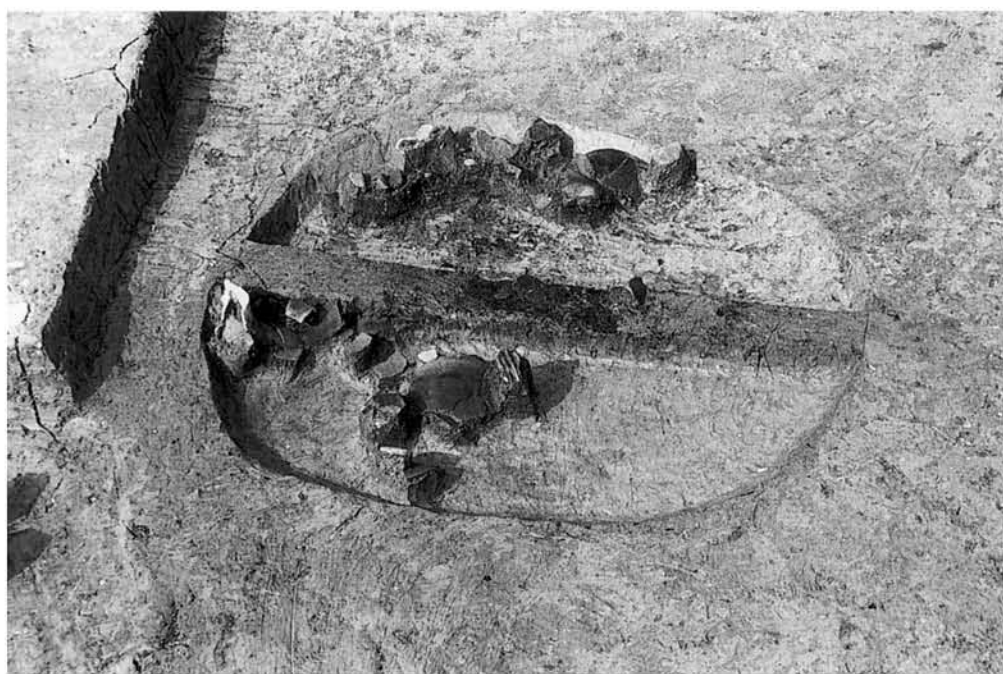


同上

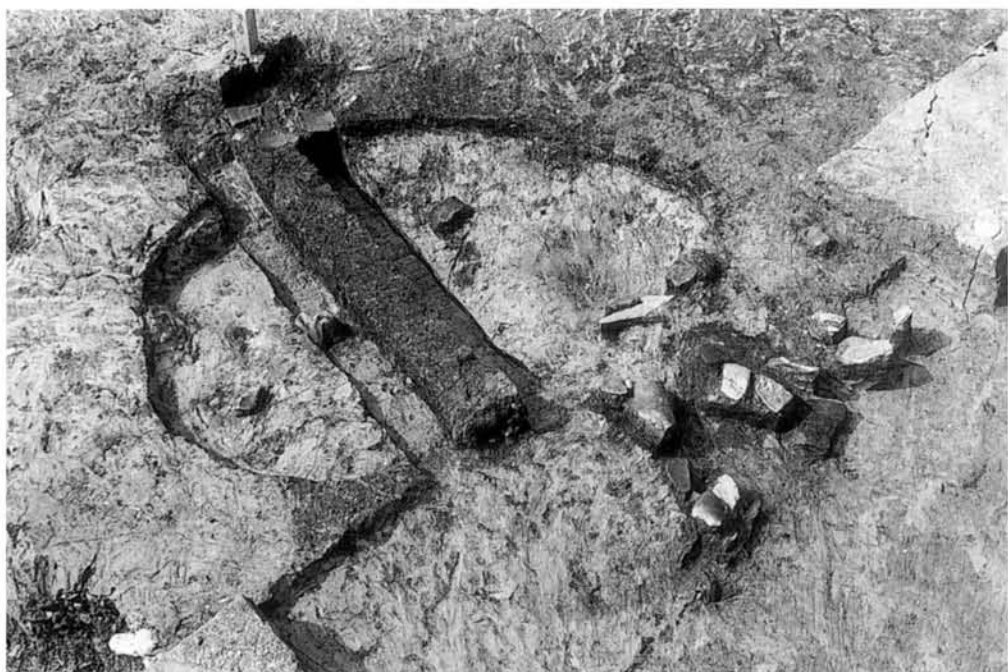
PL16



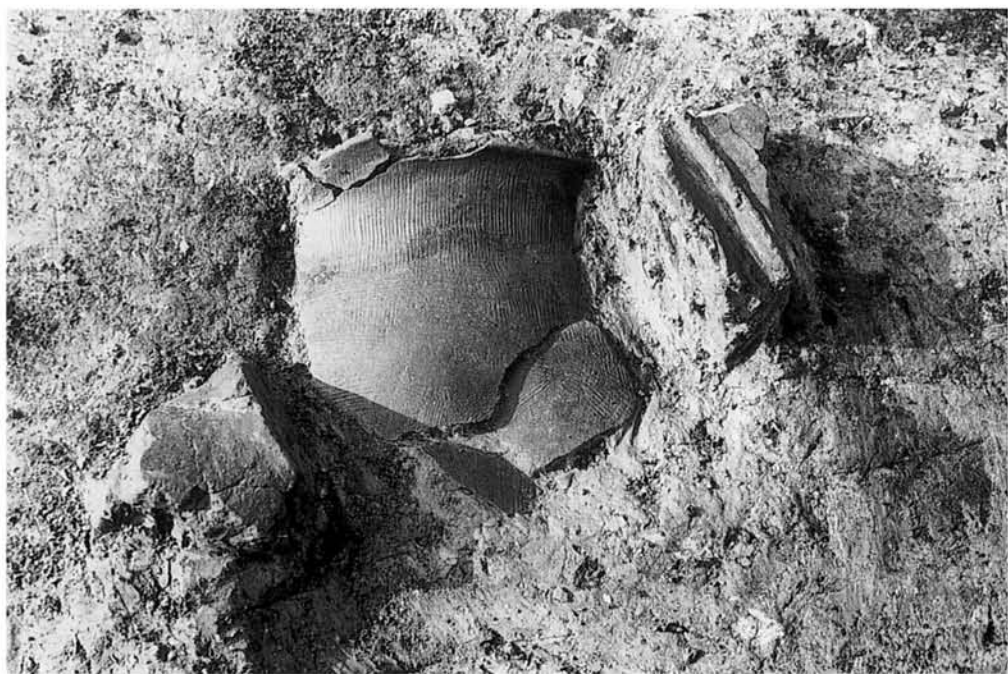
SK 1・2 遺物出土状況（北西より）



SK 1 遺物出土状況



SK 2 遺物出土状況

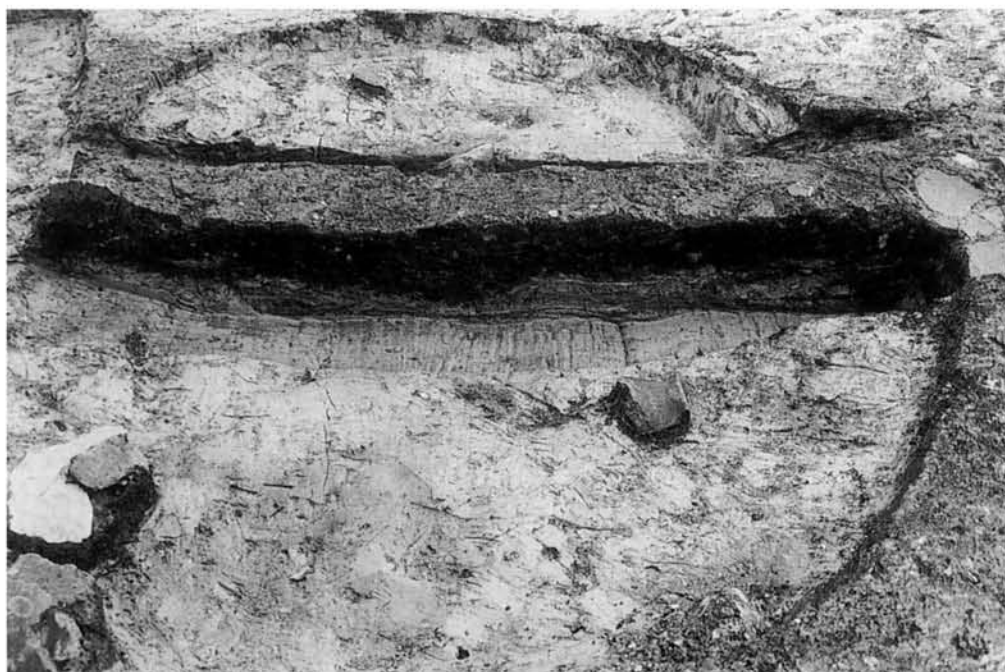


SK 1 遺物出土状況 (23・24)

PL18



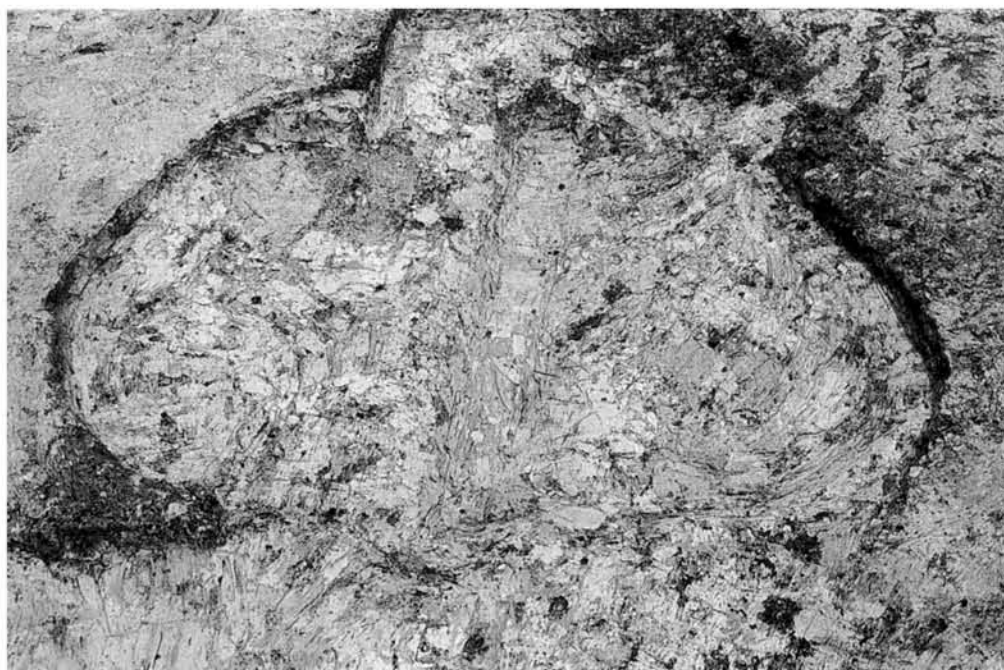
SK 2 検出状況



SK 2 セクション及び遺物出土状況



SK 1 完掘状況



SK 2 完掘状況

PL20



1区 古式土師器出土状況（VII層）



同上



SK 3 半截狀況



SK 3 半截断面

PL22



SK 3 ドングリ出土状況



SK 3 完掘状況



1区 古式土師器出土状況 (VII層)



同上

PL24



1 区 古墳時代前期遺物出土状況



同上



1区 完掘状況（北より）



1区 調査後の断ち割り

PL26



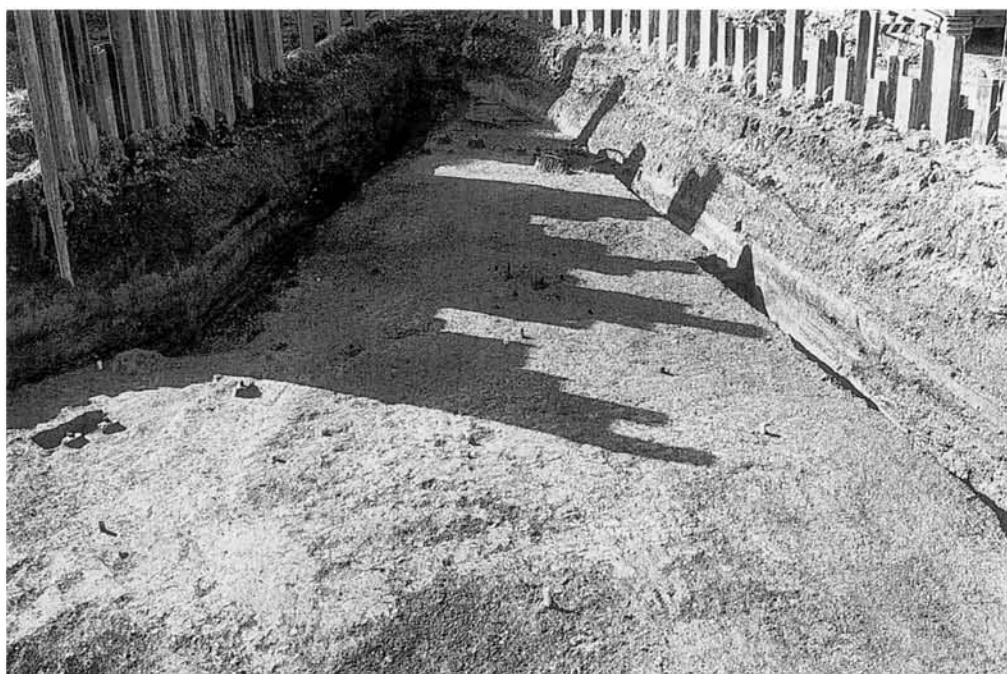
2区 西壁セクション



2区 完掘状況（北東側半分）



2区 完掘状況（北東側半分）

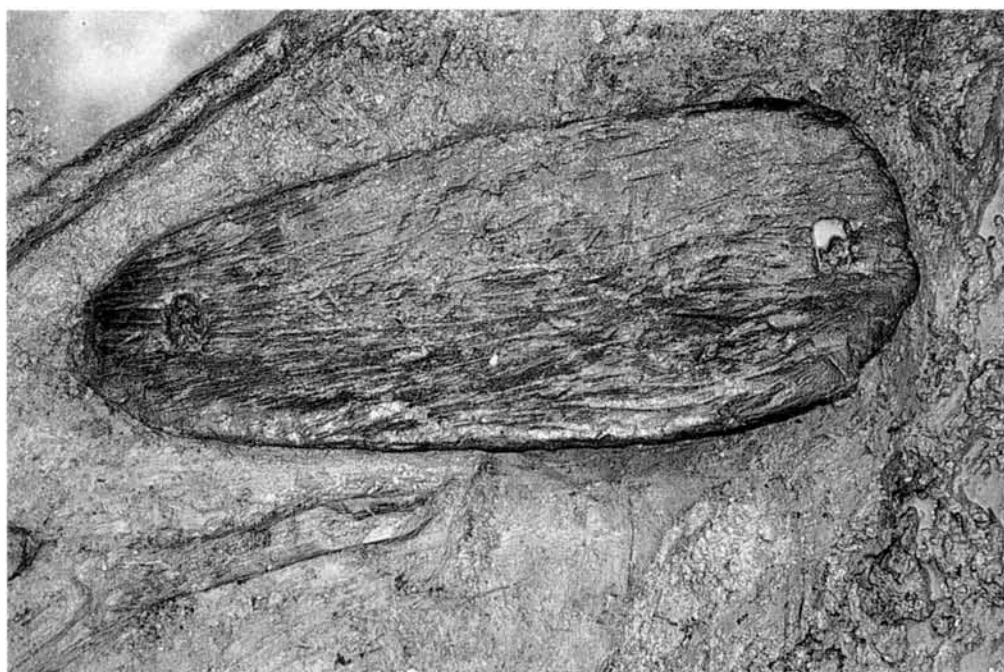


同上 （南西側半分）

PL28



2区 木製品出土状況



同上



2 区 古墳時代前期土器出土状況



同上

PL30



2区 古墳時代前期土器出土状況



同上



2 区 古墳時代前期土器出土状況

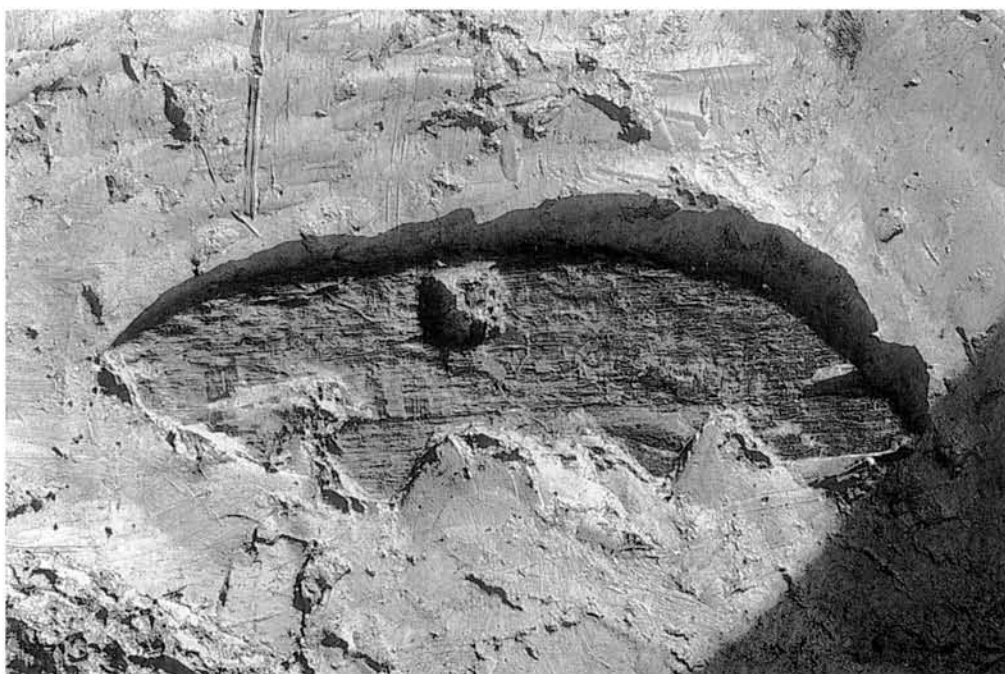


同上

PL32



2区 古墳時代前期土器出土状況



2区 エブリ出土状況



37



46



50



63



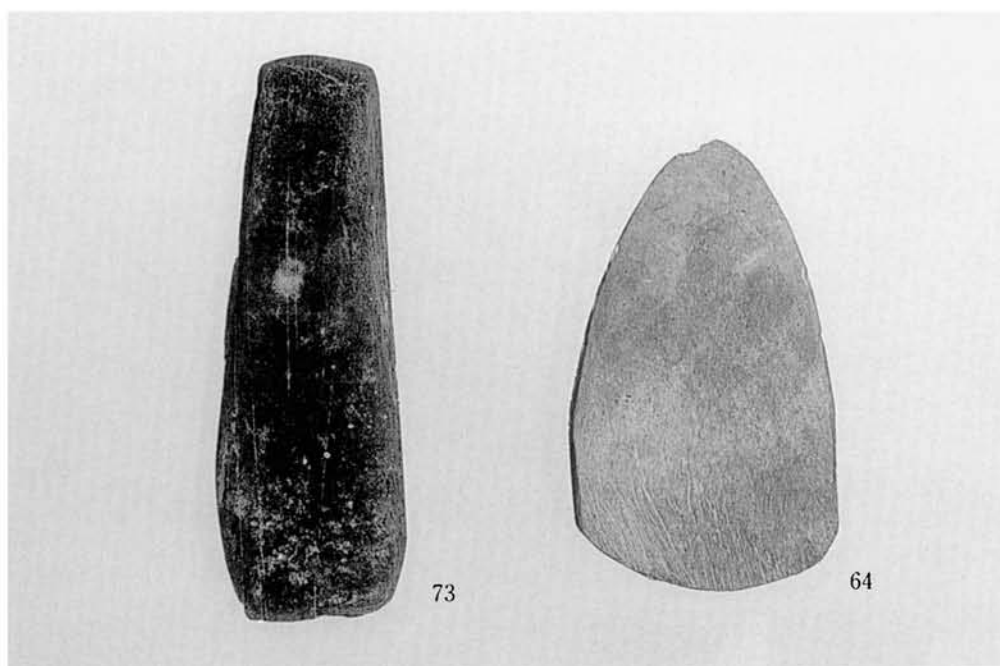
72



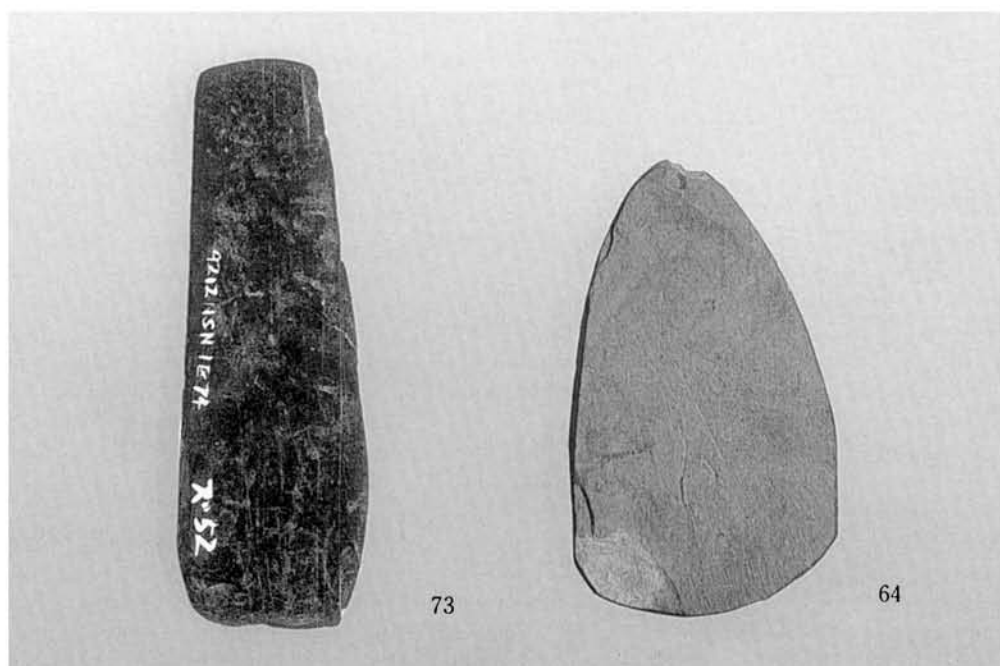
167

縄文土器 (167) 及び弥生前期土器 (37・46・50・63・72)

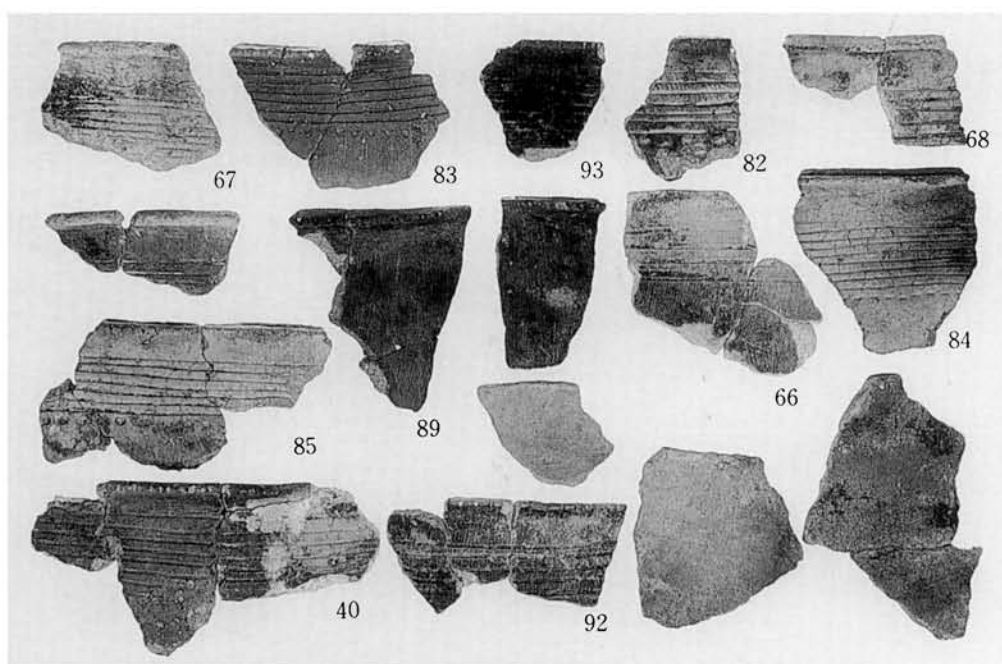
PL34



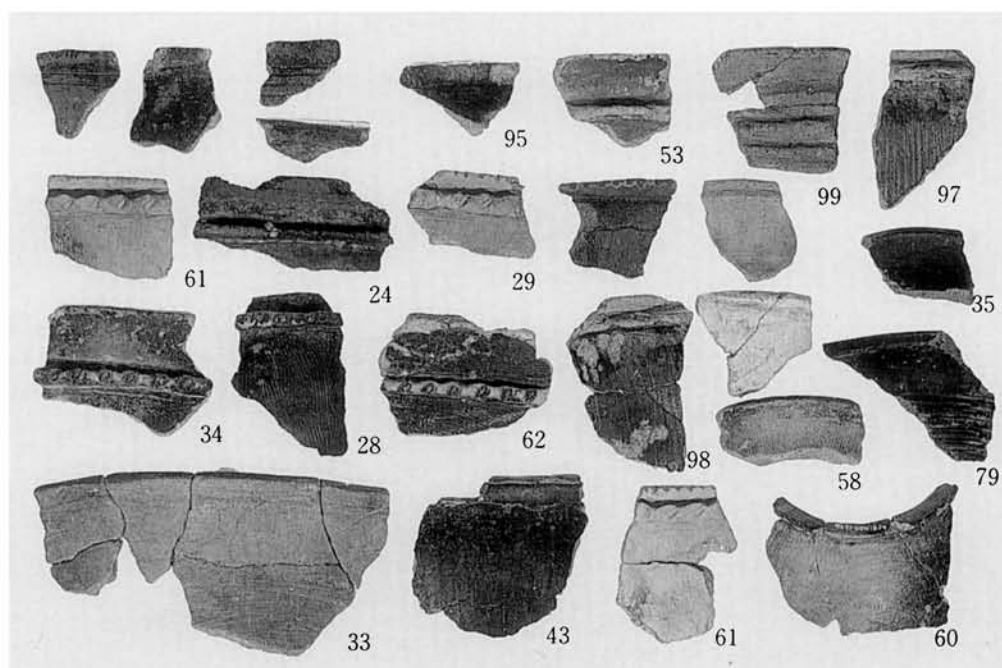
弥生前期石器



同上裏面

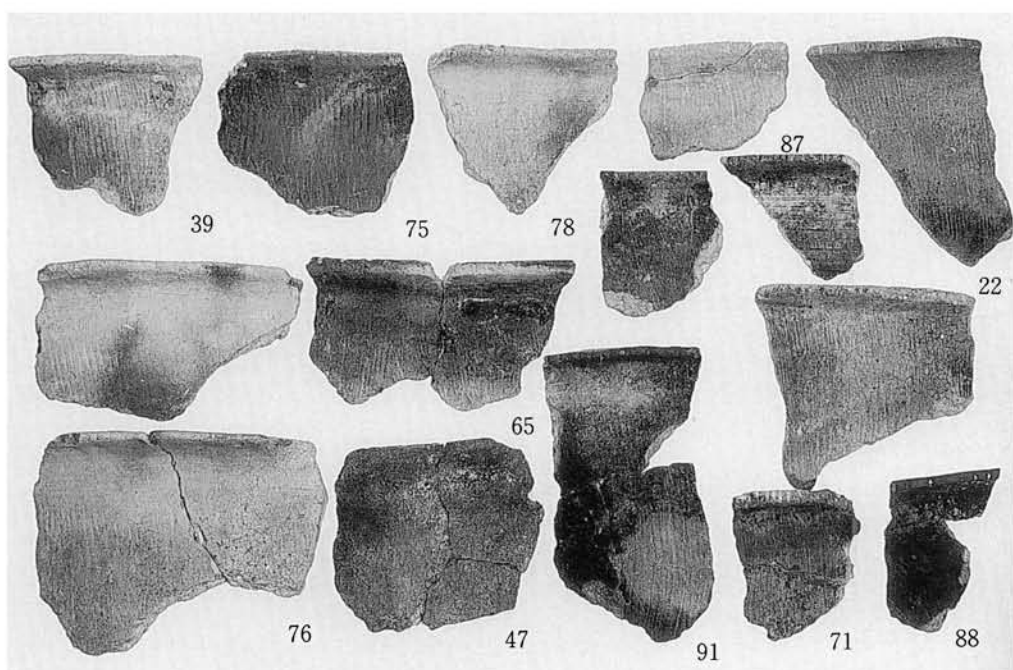


弥生前期土器

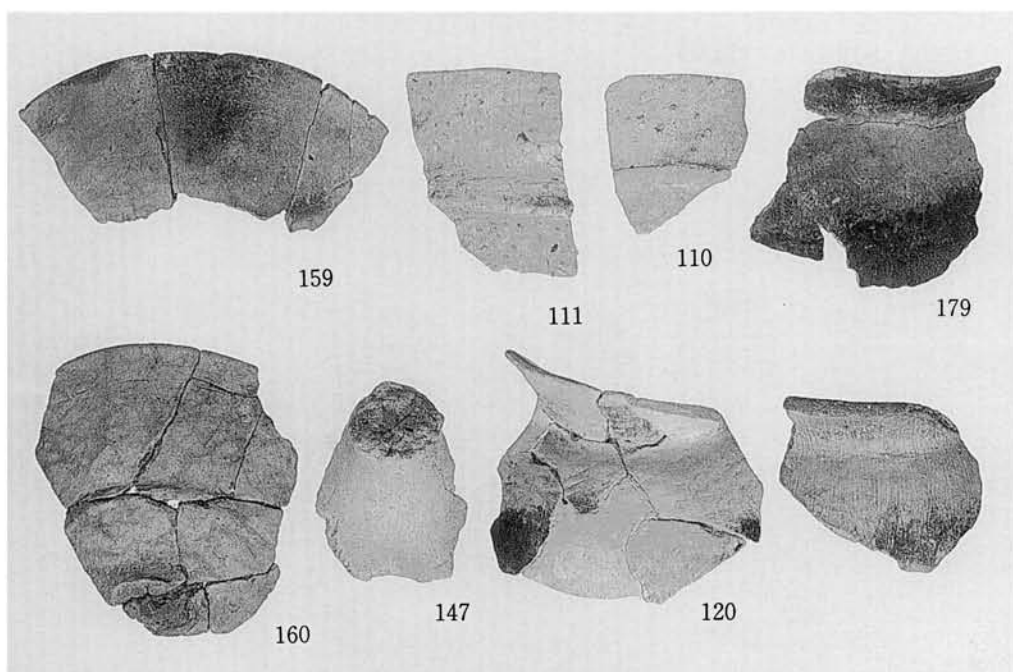


同上

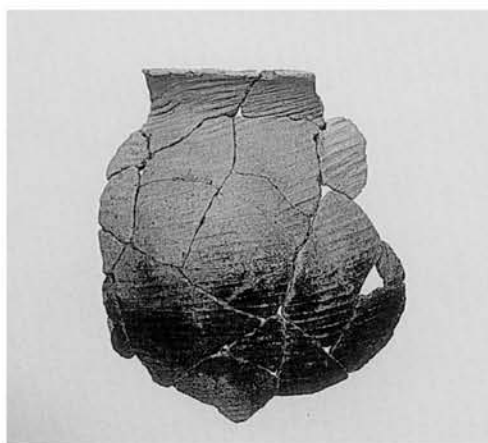
PL36



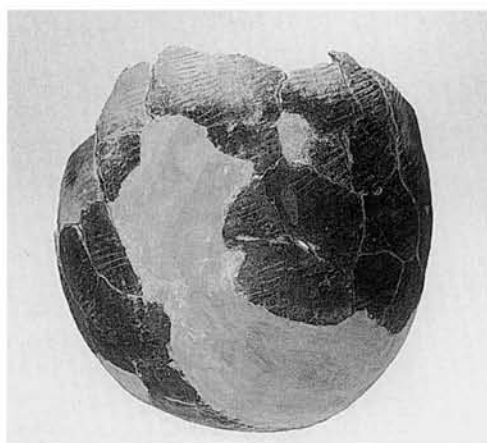
弥生前期土器



古墳時代前期土器



121



127



144



152



153



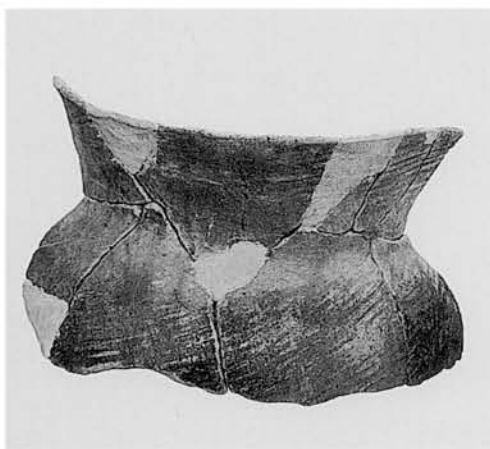
154

古墳時代前期土器

PL38



155



156



163



164



165



168

古墳時代前期土器

中村・宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ

西ノ谷遺跡

第1分冊

発行日 1993年3月31日

編集・発行 高知県教育委員会
財 高知県文化財団埋蔵文化財センター

印刷 (有)西村謄写堂